病害虫発生予察情報（６月予報）

令和６年５月28日
静岡県病害虫防除所長

１　予報概況

作物名	病害虫名	予報 （６月の県平均平年比）	予報の根拠
稲	葉いもち	発生量：並 （発病株率 0.3%）	前年８月葉いもち発生量：並　（±） 前年９月穂いもち発生量： 少（発生なし）（－） 置き苗いもち：発生なし　（－） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±） 降水量：並か多い　（＋）
	縞葉枯病 （ヒメトビウンカ）	縞葉枯病発生量：少 ヒメトビウンカ発生量：やや少 （発病株率 0.03%）	前年８月縞葉枯病発生量：やや少（－） ５月の予報灯誘殺数： 並（発生なし）（±） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±） 降水量：並か多い　（－）
	イネミズゾウムシ	発生量：やや少 （寄生株率 11.2%）	前年７月発生量：やや少　（－） ５月の予報灯誘殺数：並（誘殺なし）（±） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±）
	イネドロオイムシ	発生量：少 （東部高冷地：寄生株率 1.8%）	前年７月発生量：少（発生なし）（－） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±）
	斑点米カメムシ類	発生量：やや多	５月中下旬発生量：多　（＋） ５月の予報灯誘殺数：並～やや少　（±） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±） 降水量：並か多い　（－）
ばれいしょ	疫病	発生量：やや少	５月中旬発生量：少（発生なし）（－） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±） 降水量：並か多い　（＋）
	ジャガイモガ	発生量：並	５月中旬発生量：並（発生なし）（±） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±） 降水量：並か多い　（±）
温州みかん	チャノキイロアザミウマ	発生量：並 （発生果率 0.2%）	5月中下旬発生量（予）：並　（±） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±） 降水量：並か多い　（±）
	ヤノネカイガラムシ	発生時期：並 発生量：並 （寄生葉率 0.1%）	５月上旬発生量：並　（±） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±） 降水量：並か多い　（±）
	ミカンハダニ	発生量：多 （寄生葉率 5.8%）	５月上旬発生量：多　（＋） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±） 降水量：並か多い　（±）
中晩柑類	かいよう病	発病度（葉）：並 （発病度 0.5）	５月上旬新葉発生量：並（発生なし）（±） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±） 降水量：並か多い　（＋）

作物名	病害虫名	予報 （６月の県平均平年比）	予報の根拠
きく （施設）	黒斑病・褐斑病	発生量：並 （発病株率：0.3%）	５月中旬発生量：並（発生なし）（±） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±） 降水量：並か多い　（＋）
	えそ病 （トマト黄化えそウイルス：ＴＳＷＶ）	発生量：並 （前年発生なし）	５月中旬発生量：並（発生なし）（±） えそ病：並（発生なし）（±） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±）
	アザミウマ類	発生量：並 （被害株率：17.0%）	５月中旬発生量：並　（±） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±）
	ハモグリバエ類	発生量：並 （前年被害なし）	５月中旬発生量：並（発生なし）（±） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±）
	オオタバコガ	発生量：多	トラップ誘殺量：多　（＋） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±）

表の見方について

- 予報の発生量は平年（静岡県の過去 10 年間）との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の５段階で示しています。
- 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年（静岡県の過去 10 年間）との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の５段階で示しています。
- 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況（調査時期と発生量）、気象庁の１か月予報（気温と降水量）を記入しています。その状況が多発要因の場合は（＋）、少発要因の場合は（－）を示し、＋－を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

農薬情報はこちらで検索！

静岡県農薬安全使用指針
・農作物病害虫防除基準

https://www.s-boujo.jp/

静岡県病害虫防除所 HP が新しくなりました。

静岡県病害虫防除所 HP

https://www.pref.shizuoka.jp/sangyoshigoto/norinjimusho/1058658/boujo/index.html

作物名	病害虫名	予報 （６月の県平均平年比）	予報の根拠
なし	黒星病	発生量：並	５月中旬発生量：並（一部多発）（±） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±） 降水量：並か多い　（＋）
かき	落葉病	発生量：多	前年９月発生量：多　（＋） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±） 降水量：並か多い　（＋）
	チャノキイロアザミウマ	発生量：並 （寄生果率 0.1%）	5月中下旬発生量（予）：並　（±） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±） 降水量：並か多い　（±）
	フジコナカイガラムシ	発生量：並 （７月寄生果率 0.7%）	５月中旬発生量：並（発生なし）（±） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±） 降水量：並か多い　（±）
キウイフルーツ	かいよう病	発生量：やや少	５月上中旬発生量：少　（－） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±） 降水量：並か多い　（＋）
果樹全般	果樹カメムシ類	発生量：やや少	越冬虫数：少　（－） ５月上旬発生量：少　（－） 予察灯誘殺数：やや少　（－） フェロモントラップ誘殺：やや多　（＋） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±） 降水量：並か多い　（±）
茶	炭疽病	発生量：多 （病葉数 3.8 葉/1.25㎡）	５月中下旬発生量：多　（＋） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±） 降水量：並か多い　（＋）
	もち病	発生量：多 （病葉数 7.7 葉/1.25㎡）	５月中下旬発生量：やや多　（＋） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±） 降水量：並か多い　（＋）
	輪斑病	発生量：並 （病葉数 1.7 葉/1.25㎡）	５月中下旬発生量：並（発生なし）（±） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±）
	カンザワハダニ	発生量：やや少 （寄生葉率 1.0%）	５月中下旬発生量：少　（－） 天敵（カブリダニ指）：やや少　（－） 防除員からの情報：やや多　（＋） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±） 降水量：並か多い　（－）
	チャノキイロアザミウマ	発生量：並 （叩き落とし虫数 10.4 頭/4 か所）	５月中下旬発生量：並　（±） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±） 降水量：並か多い　（±）
	チャノミドリヒメヨコバイ	発生量：多 （叩き落とし虫数 5.1 頭/4 か所）	５月中下旬発生量：多　（＋） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±） 降水量：並か多い　（±）
	チャノホソガ	発生量：やや多 （巻葉数 2.4 葉/1.25 ㎡）	５月中下旬発生量：やや多　（＋） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±） 降水量：並か多い　（±）

２．予報の根拠と防除対策

【稲】

＜生育の概況等＞

生育は平年並～やや早い。

葉いもち病（葉いもち）

予報の根拠

・前年８月の巡回調査では、平均発病株率は 2.2%（平年 2.3%）と平年並の発生であった。また前年９月の巡回調査では、穂いもちの発生は認められなかった（平年発病株率 0.1%）。
・５月中下旬の巡回調査では置き苗の葉いもちの発生は認められなかった。
・１か月予報では、気温はほぼ平年並だが、降水量は平年並か多いため、発生をやや助長する（いもち病の発病好適条件は気温 15℃～25℃、葉面の 10 時間以上の湿潤状態）。

防除対策

・置き苗は本田に植え付けた株よりも早期に葉いもちが発生し伝染源になりやすいため、田植え後できるだけ早く補植をすませ、不要な苗は速やかに処分する。
・常発ほ場では薬剤の予防散布を行う。
・急性型病斑（病斑周辺部に褐色部分がなく、暗緑色あるいはねずみ色の病斑）が多いときには、速やかに薬剤散布をする。
・本県では MBI-D 剤耐性いもち病菌が発生している。また近年、他県では QoI 剤耐性いもち病菌の発生が問題となっており、本県でも発生が懸念されるため、耐性菌の発生リスクが高い薬剤を使用する場合は、連用を避けるなど適切に使用する（詳細は「農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準（ホームページ https://www.s-boujo.jp/）」の「殺菌剤耐性菌に関する各種資料について」の項を参照）。

条縞葉枯病（ヒメトビウンカ）

予報の根拠

・前年８月の巡回調査では、縞葉枯病の平均発病株率は 0.2%（平年 0.6%）と平年よりやや少なかった。
・５月第３半旬時点の予察灯におけるヒメトビウンカの誘殺は、全地点で認められなかった（平年誘殺なし）。なお、成虫の誘殺データについては静岡県病害虫防除所ホームページで情報提供している。
・１か月予報では、気温はほぼ平年並だが、降水量は平年並か多いため、本病を媒介するヒメトビウンカの増殖を特には助長しない。このため、本病の発生も特には助長されない。

防除対策

・本病の常発ほ場では、ヒメトビウンカの発生に注意する。本病に感染しやすい幼穂形成期頃までを中心に防除を徹底する。
・ヒメトビウンカはコムギ収穫後に水田に侵入するため、コムギ跡地ほ場の近隣の水田では６月上中旬に本田防除を実施する。

●イネミズゾウムシ

予報の根拠

・前年７月の巡回調査では、イネミズゾウムシの平均被害株率は１.９%（平年２.８%）と平年よりやや少なかった。

・各地の予察灯への５月上中旬の成虫誘殺は確認されていない（平年０～０.８頭／半旬）。

・１か月予報では、気温はほぼ平年並のため、発生を特には助長しない。

防除対策

・常発地域で箱処理剤を使用していない場合や食害が顕著な場合は、薬剤を散布する。

●イネドロオイムシ（イネクビホソハムシ）

予報の根拠

・前年７月の巡回調査では、東部高冷地におけるイネドロオイムシの被害は認められず（平年６.３%）、平年より少なかった。

・１か月予報では、気温はほぼ平年並のため、発生を特には助長しない。

・例年、６月以降は幼虫による食害が増加する。

防除対策

・常発地域で箱処理剤を使用していない場合や食害が顕著な場合は、幼虫が発生する６月中下旬に薬剤防除を行う。

●斑点米カメムシ類

予報の根拠

・５月中下旬の畦畔等の雑草におけるカメムシ類の発生は平年より多かった（30 回すくい取り平均捕獲数：６.１頭、平年２.６頭）。

・５月第３半旬時点の県内４ヶ所の予察灯における誘殺数は、平年並～やや少なく推移している。

・１か月予報では、気温はほぼ平年並だが、降水量は平年並か多いため、発生を特には助長しない。

防除対策

・畦畔及び水田周辺の除草は、カメムシ類の密度低下に有効である。なお、出穂直前および以降の除草はカメムシ類を水田内に移動させてしまうため、出穂 10 日前には除草を終了する。

＜その他の病害虫＞

●ニカメイガ

・前年９月の被害は平年並であった（平均被害株率 0.４%、平年 0.５%）。

・５月第３半旬時点の予察灯およびフェロモントラップにおける誘殺数は、磐田市加茂で平年並～やや多く推移しており、他地点では平年並～少なく推移している。なお、成虫の誘殺データについては静岡県病害虫防除所ホームページで情報提供している。

●トビイロウンカ

・５月第３半旬時点で予察灯での誘殺は確認されていない。

・本種は梅雨の下層ジェット気流に乗じ飛来する。日本における発生量は年によって大きく異なり、飛来源における発生状況や飛来時期、量、回数に影響される。また、世代交代を繰り返すことで急激に増殖し、数が増えてからでは効果が高い薬剤を使用しても十分な殺虫効果が得られない場合がある。このため、予防に重点を置いた防除を実施する。

●スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）

・前年６月の巡回調査では、スクミリンゴガイの平均発生面積率は 35%（平年 38%）と平年並だった。しかし、今年度の防除員への聞き取り（５月）では６名がスクミリンゴガイの発生がやや多い、もしくは多いと回答があった。

・１か月予報では、気温はほぼ平年並のため本員の発生は助長しない。

・移植後２～３週間は、食害を抑制するために浅水管理（４cm 以下（理想は１cm 以下））に努める。

・発生地域の普通期水田では移植後の薬剤処理を実施する。

・６月中旬～７月、水路壁面や畦畔に赤橙色の卵が多数産卵されるため、見つけ次第卵をつぶす。なお、既に産卵や被害が確認されている地域では、識認改策、防除を行う。

・スクミリンゴガイには寄生虫（広東住血線虫）が存在する可能性があるので、貝に触る場合は必ずゴム手袋をはめること。

【ばれいしょ】

＜生育の概況等＞

産地によって異なるが、平年より早い傾向にある。

●疫病

予報の根拠

・５月中旬の巡回調査では、発病は認められなかった（平年 4.0%）。

・１か月予報では、気温はほぼ平年並で、降水量は平年並か多いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

・本病は 10℃を超えると活動が始まり、18～20℃が最適温度となる。開花期以降、気温が 15℃以上かつ降雨により湿度が高い状態が継続すると発病しやすくなる。

・発病に好適な気温下で降雨が続くと本病は急速にまん延する。発病してからの防除は難しいので、継続した予防散布を行う。

・発病株や罹病残さは伝染源となるので、ほ場外へ持ち出し処分する。

●ジャガイモガ

予報の根拠

・５月中旬の巡回調査では、被害は確認されなかった（平年被害なし）。

・１か月予報では、気温はほぼ平年並で、降水量は平年並か多いため、発生を特には助長しない。

防除対策

・例年発生するほ場では注意が必要である。

・イモは露出しないよう土寄せをして産卵を防ぐ。

・掘り取ったイモは産卵防止のため覆いをかけるとともに、速やかに屋内に搬入後、覆いをする。

・イモの残さは発生源となるのでほ場に残さない。

【温州みかん】

＜生育の概況等＞

生育は平年より数日早い地域が多いが、地域や品種により生育がばらついている。着花量は平年並～やや多い。

●チャノキイロアザミウマ

予報の根拠

・５月中下旬の巡回調査（茶）における発生量は、平年並であった。

・１か月予報では、気温はほぼ平年並で、降水量は平年並か多いため、発生を特には助長しない。

防除対策

・アメダス気象データを用いた予測によると、５月 28 日以降の気温が平年並で推移した場合、第２世代成虫の発生時期は５月 30 日～６月 15 日と予想される。なお、各産地における発生時期予測の詳細は、静岡県病害虫防除所ホームページの「チャノキイロアザミウマ発生時期予測」（https://www.pref.shizuoka.jp/sangyoshigoto/norinjimusho/1058658/boujo/hassei/yosoku.html）を参照する。

・本種各世代において、飛来最盛日の１週間前～飛来最盛日までが薬剤防除適期である。

・光反射シートマルチを利用する場合には、樹冠占有面積率 60%以下の園地で、反射率 90%以上のシートを全面被覆すれば、薬剤防除と同等の効果がある。

・炭酸カルシウム微粉末剤 25～50 倍を６月上旬と７月中旬に計２回散布することにより、６月～８月にかけて化学殺虫剤を散布した場合とほぼ同等の防除効果が得られる。

●ヤノネカイガラムシ

予報の根拠

・５月上旬の巡回調査では、平均寄生葉率は 0.１%（平年 0.１%）と平年並であった。

・県予察ほ場（静岡市清水区茂畑：標高約 200m）における１齢幼虫の初発日は５月８日（昨年：５月８日）であった。防除適期となる２齢幼虫発生ピークは６月中旬と予想されるが、標高約 100m より低い産地ではこれより１週間程度早くなる。

・１か月予報では、気温はほぼ平年並で、降水量は平年並か多いため、発生を特には助長しない。

防除対策

・本種の発生が少ない園では防除を省けるが、発生の見られる場合は２齢幼虫の発生ピークに薬剤散布する。

●ミカンハダニ

予報の根拠

・５月上旬の巡回調査では、平均寄生葉率は 12.５%（平年 2.４%）であり、一部園地で多発していたため平年より多かった。

・１か月予報では、気温はほぼ平年並で、降水量は平年並か多いため、発生を特には助長しない。

防除対策

・土着天敵を保護・利用することにより、６月の防除を省くことができる。ただし、寄生葉率が 30%を超える場合は、薬剤防除を実施する。

＜その他の病害虫＞

●黒点病

防除対策

・病原菌は樹上やほ場内の枯枝で越冬し伝染源となる。近年は黒点病が多発傾向となっており、ほ場内で菌密度が高まっていると考えられるため、ほ場からの枯枝の除去を徹底する。

・第１回目の防除は６月上旬に実施し、第２回目の防除は散布間隔 25～30 日又は累積降水量 250～300 ㎜を目安に行う。各産地における第２回目の防除適期の予想は、静岡県病害虫防除所のホームページの「カンキツ黒点病要防除時期予測」（https://www.pref.shizuoka.jp/sangyoshigoto/norinjimusho/1058658/boujo/hassei/yosoku.html）を参照する（６月以降随時更新）。

●ゴマダラカミキリ

防除対策

・成虫は６月上旬頃に地際部から脱出し、葉や枝を１週間程度食害した後、地際部に産卵する。この時期に樹全体に薬剤散布することで、産卵前の成虫を防除できる。また、６月上旬までにシュロの繊維や金網などの資材を地際部に巻き付け、産卵を防止する。

【中晩柑類】

●かいよう病

予報の根拠

・５月上旬の巡回調査では、新葉の発病は認められなかった（平年発病度 0.04）。

・１か月予報では、気温はほぼ平年並で、降水量は平年並か多いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

・病原菌の生育適温は 20～30℃であり、旧葉に形成された病斑から降雨時に雨滴とともに飛散する。新葉が硬化する前は気孔や傷口から侵入、感染する。

・防基垣、防風網の整備等を行い、防風対策に努める。

・新梢に発病が見られる園場では、降雨前に銅水和剤または抗生物質の散布を行う。なお、銅水和剤の散布では薬害を防ぐため炭酸カルシウム剤（200 倍）を加用する。

【ハウスみかん】

＜その他の病害虫＞

●ミカンキイロアザミウマ・ネギアザミウマ

防除対策

・着色期の発生に注意し、初期防除に努めるとともにハウス内外の除草を徹底する。また施設開口部に防虫網や光反射ネットを張り、施設内への本種の侵入を防ぐ。

【なし】

＜生育の概況等＞

生育は平年並～数日遅い。着花量は地域により異なる。

●黒星病

予報の根拠

・５月中旬の巡回調査では、発病果率 0.9%（平年 0.2%）であったが、一部の多発ほ場を除くと平年並であった。

・１か月予報では、気温はほぼ平年並で、降水量は平年並か多いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

・病原菌の発育適温は 20～22℃であり、４～５月の降雨が多かった地域では発生が多くなるため、防除を行う。

・耐性菌の発生を抑えるため保護殺菌剤による予防散布に重点を置き、同一系統の薬剤は連用を避ける。

＜その他の病害虫＞

●黒斑病

防除対策

・幸水、豊水、静喜水は抵抗性品種で防除の必要はない。新水、喜水は罹病性品種で発病しやすいため、防除を行う。

・梅雨期が発病まん延期であり、降雨状況に合わせて防除を行う。

【キウイフルーツ】

＜生育の概況等＞

生育は平年並～数日遅い。着花量は平年並～やや多い。

●かいよう病

予報の根拠

・５月上中旬の巡回調査では、発病葉率は 1.5%（過去８年間の平均 12.2%）と例年より少なかった。ただし、一部地域ではやや多かった。

・１か月予報では、気温はほぼ平年並で、降水量は平年並か多いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

・病原菌の生育適温は 10℃～20℃であり、罹病樹から搬出した樹液が風雨により飛散することで気孔や傷口から感染する。

・細菌病であることから、樹体内に一度細菌が侵入してしまうと根本的な治療は難しい。予防防除を重点的に行い、罹病樹は伐採するなど早期には場から除くこと。

・受粉結実後～果実肥大期までに予防散布をする。なお、使用する薬剤によっては薬害が生じる時間なので、炭酸カルシウム剤を加用し薬害軽減をはかる。

・キウイフルーツの葉は風で傷害を受けやすく、病原菌の新たな侵入路となるため防風対策を徹底する。

・管理作業によっても感染するため、せん定器具はこまめに消毒する。

【果樹全般】

●果樹カメムシ類

予報の根拠

・今年２月の越冬量調査において、落葉１㎡あたりのチャバネアオカメムシ越冬虫数は、県平均 0.5 頭（平年 1.3 頭）と平年より少なかった。

・５月上旬に実施した、かんきつの花における叩き落し調査では、果樹カメムシ類の寄生数／５か所は 0.5 頭（平年 1.3 頭）と平年より少なかった。

・県内４か所の予察灯における５月１～20 日の果樹カメムシ類の合計誘殺数の平均は、185 頭（平年 229 頭）と平年よりやや少なかった。なお、果樹カメムシ類の内訳は、チャバネアオカメムシが 70.7 頭（平年 101 頭）、ツヤアオカメムシが 114 頭（平年 127 頭）、クサギカメムシが誘殺なし（平年 1.1 頭）であった。

・県内６か所のフェロモントラップにおける５月１～20 日の果樹カメムシ類の合計誘殺数の平均は、101 頭（平年 81.4 頭）と平年よりやや多かった。なお、果樹カメムシ類の内訳は、チャバネアオカメムシが 40.3 頭（平年 43.8 頭）、ツヤアオカメムシが 48.2 頭（平年 34.1 頭）、クサギカメムシが 12.3 頭（平年 3.5 頭）であった。

・１か月予報では、気温はほぼ平年並で、降水量は平年並か多いため、発生を特には助長しない。

・以上から、今後の果樹カメムシ類の発生量はやや少ないと予想される。

【かき】

＜生育の概況等＞

生育は平年並で、着花量は地域により異なる。

●落葉病

予報の根拠

・前年９月の巡回調査では、発病葉率 23.4%（平年 7.5%）と平年より多かった。

・１か月予報では、気温はほぼ平年並で、降水量は平年並か多いため、本病の感染をやや助長する。

防除対策

・本病は罹病した落葉が主要伝染源であり、降雨時に雨滴で飛散し感染を拡大させる。

・５～７月が主な感染時期であり、60～120 日の潜伏期間後に発病する。８月以降の散布では防除効果が得られないため、５～７月の降雨前に予防散布により防除を行う。

・本病は肥料不足、長雨などにより樹勢の弱った木に発生しやすいため、栽培管理に注意する。

●チャノキイロアザミウマ

予報の根拠

・５月中下旬の巡回調査（茶）における発生量は、平年並であった。

・１か月予報では、気温はほぼ平年並で、降水量は平年並か多いため、発生を特には助長しない。

防除対策

・アメダス気象データを用いた予測によると、５月 28 日以降の気温が平年並で推移した場合、第２世代成虫の発生時期は５月 30 日～６月 15 日と予想される。なお、各産地における発生時期予測の詳細は、静岡県病害虫防除所ホームページの「チャノキイロアザミウマ発生時期予測」（https://www.pref.shizuoka.jp/sangyoshigoto/norinjimusho/1058658/boujo/hassei/yosoku.html）を参照する。

・本種は開花期から７月まで飛来し、加害する。花弁落下期までの初期防除を徹底する。

●フジコナカイガラムシ

予報の根拠

・５月中旬の巡回調査では、果実への寄生は認められなかった（平年寄生なし）。

・１か月予報では、気温はほぼ平年並で、降水量は平年並か多いため、発生を特には助長しない。

防除対策

・アメダス気象データ（浜松）を用いた予測によると、５月 28 日以降の気温が平年並で推移した場合、防除適期となる１～２齢幼虫発生時期は６月２～19 日頃と予想される。

・前年発生が見られた園地では発生に注意し、第１世代１～２齢幼虫期に防除を行う。第２～３世代の場合、各齢期の個体が混在するとともに、生息場所となる果実とへたの隙間が果実の肥大によって狭くなり薬剤の散布ムラが生じやすくなることから、丁寧な散布を心がける。

＜その他の病害虫＞

●ハダニ類

防除対策

・多発すると落葉することもあるが、多くの場合は経済的被害は少ない。多発園地では殺ダニ剤を散布する。

防除対策

・うめ、もも、びわでは収穫期まで越冬成虫による被害果が発生する。かんきつ、かき、なし、キウイフルーツでは、主に７月以降に新成虫による被害果が発生する。

・ほ場での発生状況をよく観察し、発生が見られたら防除を行う。

・本年の越冬量調査、予察灯及びフェロモントラップにおける発生状況の詳細は、静岡県病害虫防除所ホームページに掲載している「害虫誘殺グラフ」（https://www.pref.shizuoka.jp/sangyoshigoto/norinjimusho/1058658/boujo/hassei/yusatsu.html）を参照する。

【茶】

＜生育の概況等＞

５月中下旬の巡回調査時では、一番茶の摘採はほぼ終了していた。

●炭疽病

予報の根拠

・５月中下旬の巡回調査では、平均発病葉数は 6.8 葉/1.25 ㎡（平年 2.8 葉/1.25 ㎡）と平年よりも多かった。特に川根地域で、23.1 葉/1.25 ㎡（平年 4.8 葉/1.25 ㎡）と発生が目立った。

・感染には新芽生育時に 10 時間以上の濡れが必要である。１か月予報では、気温はほぼ平年並だが、降水量は平年並か多いため、発生を助長する。

防除対策

・降雨により胞子が飛散して感染するため、梅雨期となる６月は感染機会が多くなる。例年、発生が見られる茶園やすでに発病している茶園では、二番茶萌芽期から開葉期にかけて防除を行う。なお、薬剤防除を２回実施する場合には、１回目に予防剤を使用し、２回目に治療剤を使用する。

●もち病

予報の根拠

・５月中下旬の巡回調査では、平均発病葉数は 5.0 葉/1.25 ㎡（平年 3.7 葉/1.25 ㎡）と平年よりもやや多かった。

・本病は新芽生育時に降雨が多く、湿潤な日が続くと多発する。１か月予報では、気温はほぼ平年並で、降水量は平年並か多いため、発生を助長する。

防除対策

・高湿度条件下で胞子が飛散して感染するので、風通しの悪い山間坪地茶園等では発生しやすい。潜伏期間が 10 日程度と短いため、二番茶摘採期の頃に発生する。なお、薬剤防除を２回実施する場合には、１回目に予防剤を使用し、２回目に治療剤を使用する。

●輪斑病

予報の根拠

・５月中下旬の巡回調査では発生が確認されなかった。（平年発病葉数 0.03 葉/1.25 ㎡）

・発病は 25℃以上の高い気温が好適である。１か月予報では、気温はほぼ平年並であるため、発生の増加もほぼ平年並であると考えられる。なお、本病の発生に降雨量は関係しない。

防除対策

・摘採や整枝によってできた傷口から発病が始まるため、常発茶園では二番茶摘採後に速やかに防除を行う。なお、摘採直後に防除ができない場合は、整枝時に摘採面より２cm 程度深く刈り、その直後に薬剤散布を行う。

●カンザワハダニ

予報の根拠

・５月中下旬の巡回調査では、摘採面での平均寄生葉率は 0.9%（平年 2.6%）と平年より少なかった。また、天敵のカブリダニ類の叩き落とし虫数は 0.7 頭/4 か所（平年 1.0 頭）と平年よりやや少なかった。

・病害虫防除員からは、12 名中６名が平年より多い、またはやや多い報告だった。

・倒年、６月の発生は天敵のカブリダニ類により抑制される。

・１か月予報では、気温はほぼ平年並で、降水量は平年並か多いため、発生は特には助長されない。

防除対策

・６月は、天敵の活動等により発生は少なくなるが、既に発生の多い茶園では早めに防除を行う。

●チャノキイロアザミウマ

予報の根拠

・５月中下旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は 3.9 頭/4 カ所（平年 4.2 頭/4 カ所）と平年並だった。

・倒年、二番茶生育期から発生が増加する。１か月予報では、気温はほぼ平年並で、降水量は平年並か多いため、発生は特には助長されない。

防除対策

・二番茶以降の萌芽から開葉期にかけて防除を実施する。

・一番茶摘採後の更新園では、６月から７月にかけて再生芽への害生が増加する場合があるので、発生状況に注意し、再生芽の生育期に防除を実施する。

●チャノミドリヒメヨコバイ

予報の根拠

・５月中下旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は 3.9 頭/4 カ所（平年 1.7 頭/4 カ所）と平年より多かった。

・１か月予報では、気温はほぼ平年並で、降水量は平年並か多いため、発生は特には助長されない。

防除対策

・倒年、二番茶生育期から発生が増加するので、新芽の開葉期に防除を実施する。

・一番茶摘採後の更新園では、６月から７月にかけて再生芽への害生が増加すると被害が大きくなるので発生状況に注意し、再生芽の生育期に防除を実施する。

●チャノホソガ

予報の根拠

・５月中下旬の巡回調査では、平均巻葉数は 0.6 葉/1.25 ㎡（平年 0.4 葉/1.25 ㎡）と平年よりやや多かった。

・県内各地のフェロモントラップへの誘殺時期は、ほぼ平年並である。

・１か月予報では、気温はほぼ平年並で、降水量は平年並か多いため、発生は特には助長されない。

防除対策

・幼虫の発生が新芽生育期に合致すると被害が大きくなるので、地域の予察灯やフェロモントラップにおける誘殺虫数の推移や新芽への産卵状況に注意し、適期防除に努める。なお、成虫の誘殺データについては静岡県病害虫防除所ホームページで情報提供している。

＜その他の病害虫＞

●チャハマキ・チャノコカクモンハマキ

防除対策

・５月中下旬の巡回調査では、チャハマキの平均寄生虫数は 0.50 頭/1.25m² （平年 0.50 頭/1.25m²）、コカクモンハマキの平均寄生虫数は 0.16 頭/1.25m²（平年 0.13 頭/1.25m²）と、両種ともに平年並だった。

・成虫に活性のある殺虫剤で防除する場合は、発生に注意し、各地域の発蛾最盛期頃を目安に散布する。

●ナガチャコガネ

防除対策

・成虫は年１回６月頃に発生するので、成虫発生初期（６月上中旬）に被害が出た場所とその周辺部を対象として薬剤を処理する。

・成虫の誘殺データについては病害虫防除所ホームページで情報提供している。

【きく（施設）】

＜生育の概況等＞

生育は平年よりやや遅い。

●黒斑病・褐斑病

予報の根拠

・５月中旬の巡回調査では、発病は認められなかった（平年発生なし）。

・１か月予報では、気温はほぼ平年並だが、降水量は平年並か多いため、発生をやや助長する（本病は特に降雨が続くと発生が多くなる。病原菌の生育適温は黒斑病 24～28℃、褐斑病 20～28℃）。

防除対策

・本病は潜伏期間が長く発病後の防除では手遅れとなるので、薬剤の予防散布を行う。

・多湿で発生が助長されるため、梅雨期には特に多発に注意する。

・発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に持ち出して適切に処分する。

・土の上に落ちた被害葉が伝染源となるため、被害葉をほ場に放置しない。

・親株が罹病しているとそこから新芽に伝染し、定植してから発病することが多いため、発病が見られる株を親株として用いない。

●えそ病（トマト黄化えそウイルス：TSWV）

予報の根拠

・５月中旬の巡回調査では、発病は認められなかった（前年発病なし）。

・１か月予報では、気温はほぼ平年並のため、媒介虫であるミカンキイロアザミウマの増殖を特には助長しない。このため、本病の発生も特には助長されない。

防除対策

・発病株は伝染源となるため速やかに抜き取り、土中に埋める等して適切に処分する。

・ミカンキイロアザミウマはトマト黄化えそウイルスを媒介するため、食害が認められる場合には速やかに薬剤散布を実施する。

・施設開口部に防虫ネット（目合い 0.4mm 以下）を設置し、アザミウマ類の侵入を抑制する。

●アザミウマ類（クロゲハナアザミウマ、ネギアザミウマ、ミカンキイロアザミウマ）

予報の根拠

・５月中旬の巡回調査では、平均被害株率は 10.9%（平年 11.2%）と平年並だった。

・１か月予報では、気温はほぼ平年並のため、発生を特には助長しない。

防除対策

・定植後の初期防除に努める。

・親株は発生源となる可能性があるため、採穂後は親株をほ場に放置せず、速やかに処分する。

・施設開口部に防虫ネット（目合い 0.4mm 以下）を設置し、侵入を抑制する。

・ほ場周辺の雑草はアザミウマ類の発生源となるため、ほ場周辺の除草を行う。

●ハモグリバエ類（マメハモグリバエ）

予報の根拠

・５月中旬の巡回調査では、被害は認められなかった（前年被害なし）。

・夏期はハモグリバエ類の天敵（寄生蜂）の活動により密度が抑制されやすい。

・１か月予報では、気温はほぼ平年並のため、発生を特には助長しない。

防除対策

・葉に１mm 程度の白い斑点（産卵痕及び摂食痕）が多数見られる場合は、薬剤散布を実施する。

●オオタバコガ

予報の根拠

・浜松市のきく産地及び磐田市に設置しているフェロモントラップにおける誘殺数は、平年より多く推移している。なお、成虫の誘殺データについては病害虫防除所ホームページで情報提供している。

・１か月予報では、気温はほぼ平年並のため、発生を特には助長しない。

防除対策

・倒年７月以降に幼虫の発生が増加するが、６月から芽における被害の発生に注意し、初期防除に努める。

３．季節予報

●１か月予報　（東海地方　令和６年５月２３日　名古屋地方気象台発表）

【予報期間】　５月２５日から６月２４日

【予想される向こう１か月の天候】

向こう１か月	天候	期間の前半は、天気は数日の周期で変わるでしょう。期間の後半は、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。
	降水量	降水量は、平年並または多い確率ともに４０％です。
１週目	気温	１週目は、平年並の確率５０％です。
２週目	気温	２週目は、低い確率５０％です。
３～４週目	気温	３～４週目は、高い確率５０％です。

【確　率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多％
１か月	気温	３０	４０	３０
１か月	降水量	２０	４０	４０
１か月	日照時間	４０	３０	３０
１週目	気温	３０	５０	２０
２週目	気温	５０	３０	２０
３～４週目	気温	２０	３０	５０

【予報の対象期間】

１か月　：　５月２５日（土）～　６月２４日（月）
１週目　：　５月２５日（土）～　５月３１日（金）
２週目　：　６月　１日（土）～　６月　７日（金）
３～４週目　：　６月　８日（土）～　６月２１日（金）

※ 利用上の注意

・気温・降水量は「低い（少ない）」「平年並」「高い（多い）」の３つの階級で予報します。階級の幅は、1991～2020 年の 30 年間における各階級の出現率が等分（それぞれ 33%）となるように決めてあります。（気候的出現率と呼びます）。
・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い（少ない）場合は「平年に比べて多い（少ない）」、また平年の日数と同程度に多い（少ない）場合には「平年と同様に多い（少ない）」と表現します。なお、単に多い（少ない）と表現した場合には対象期間の２分の１より多い（少ない）ことを意味します。

お問い合わせは
静岡県病害虫防除所　〒438-0803　磐田市富丘678-1
TEL 0538-36-1543　FAX 0538-33-0780
URL
https://www.pref.shizuoka.jp/sangyoshigoto/norinimusho/1058588/b-ouyo/index.html

病害虫発生予察情報（7月予報）

令和６年６月 26 日
静岡県病害虫防除所長

１　予報概況

作物名	病害虫名	予報（７月の県平均平年値）	予報の根拠
稲	葉いもち・穂いもち	発生量：並（発病株率 1.9%）	６月中旬の葉いもち発生量：やや多（＋） ６月中旬の苗代葉いもち発生：なし（－） 気象予報：気　温：高い（－） 降水量：ほぼ平年並（±）
	ごま葉枯病	発生量：多（発病株率 14.7%）	６月中旬発生量：多（＋） 気象予報：気　温：高い（＋） 降水量：ほぼ平年並（±）
	縞葉枯病（ヒメトビウンカ）	発生量：並（発病株率 0.16%）	６月中旬の第２世代幼虫発生量： 並（発生なし）（±） ６月中旬のヒメトビウンカ発生量： やや少（－） ６月の予察灯誘殺数：並～少（±～－） 気象予報：気　温：高い（＋） 降水量：ほぼ平年並（±）
	セジロウンカ	発生量：並（寄生虫数 0.59 頭／株）	６月中旬発生量：並（発生なし）（±） ６月の予察灯誘殺数： 並～少（誘殺なし）（±～－） 気象予報：気　温：高い（＋） 降水量：ほぼ平年並（±）
	トビイロウンカ	発生量：並（寄生虫数 0.002 頭／株）	６月中旬発生量：並（発生なし）（±） ６月の予察灯誘殺数：並（誘殺なし）（±） 気象予報：気　温：高い（＋） 降水量：ほぼ平年並（±）
	斑点米カメムシ類	発生量：多（平年捕獲数 19.7 頭/30 回すくいとり）	６月中旬発生量：多（＋） ６月の予察灯誘殺数：少（－） ただし、島田市は多（＋） 気象予報：気　温：高い（＋） 降水量：ほぼ平年並（±）
かんしょ	ナカジロシタバ	発生量：多（寄生虫数 0.3 頭/㎡）	６月中旬発生量：多（＋） 気象予報：気　温：高い（＋） 降水量：ほぼ平年並（±）
	イモキバガ	発生量：やや少（巻葉数 1.4 葉/㎡）	６月中旬発生量：少（－） 気象予報：気　温：高い（＋） 降水量：ほぼ平年並（±）
	エビガラスズメ	発生量：並（寄生虫数 0.04 頭/㎡）	６月中旬発生量：少（発生なし）（－） 気象予報：気　温：高い（＋） 降水量：ほぼ平年並（±）
温州みかん	黒点病	発生量：やや多（発病度 0.22）	６月中旬発生量：並（発生なし）（±） 気象予報：気　温：高い（＋） 降水量：ほぼ平年並（±）
	チャノキイロアザミウマ	発生量：やや少（寄生果率 0.2%）	６月中旬発生量：少（発生なし）（－） 気象予報：気　温：高い（＋） 降水量：ほぼ平年並（±）
	ミカンハダニ	発生量：やや少（寄生葉率 7.9%）	６月中旬発生量：並（±） 気象予報：気　温：高い（－） 降水量：ほぼ平年並（±）

作物名	病害虫名	予報（７月の県平均平年値）	予報の根拠
中晩柑	かいよう病	発生量：やや多（発病度（果）0.21）	６月中旬発生量：並（±） 気象予報：気　温：高い（＋） 降水量：ほぼ平年並（±）
キウイフルーツ	かいよう病	発生量：少	６月中旬発生量：少（－） 気象予報：気　温：高い（－） 降水量：ほぼ平年並（±）
果樹全般	果樹カメムシ類	発生量：やや多	越冬量：少（－） かんきつ寄生数：少（－） 予察灯誘殺数：やや少（－） フェロモントラップ誘殺数：やや多（＋） ヒノキ・スギ着果量：多（＋） ヒノキ・スギ寄生数：並（±） ヒノキ球果袋掛数：少（－） 気象予報：気　温：高い（＋） 降水量：ほぼ平年並（±）
茶	炭疽病	発生量：多（病葉数 18.8 葉/1.25 ㎡）	６月上中旬発生量：多（＋） 気象予報：気　温：高い（±） 降水量：ほぼ平年並（±）
	もち病	発生量：やや少（病葉数 13.3 葉/1.25 ㎡）	６月上中旬発生量：やや少（－） 気象予報：気　温：高い（－） 降水量：ほぼ平年並（±）
	輪斑病	発生量：多（病葉数 18.8 葉/1.25 ㎡）	６月上中旬発生量：多（＋） 気象予報：気　温：高い（＋）
	チャハマキ	発生量：並（寄生虫数 0.7 頭/1.25 ㎡） 発生時期：並～早い	６月上中旬発生量：やや少（－） 気象予報：気　温：高い（＋） 降水量：ほぼ平年並（±）
	チャノコカクモンハマキ	発生量：並（寄生虫数 0.5 頭/1.25 ㎡） 発生時期：並～早い	６月上中旬発生量：やや少（－） 気象予報：気　温：高い（＋） 降水量：ほぼ平年並（±）
	チャノホソガ	発生量：やや少（巻葉数 1.1 葉/1.25 ㎡） 発生時期：並～やや早い	６月上中旬発生量：少（－） 気象予報：気　温：高い（＋） 降水量：ほぼ平年並（±）
	チャノキイロアザミウマ	発生量：並（叩き落とし虫数 11.0 頭/4 カ所）	６月上中旬発生量：やや少（－） 気象予報：気　温：高い（＋） 降水量：ほぼ平年並（±）
	チャノミドリヒメヨコバイ	発生量：多（叩き落とし虫数 2.8 頭/4 カ所）	６月上中旬発生量：多（＋） 気象予報：気　温：高い（＋） 降水量：ほぼ平年並（±）
	クワシロカイガラシ	発生量：やや少（寄生株率 0.8%） 発生時期：早い	６月上中旬発生量：少（－） 気象予報：気　温：高い（＋） 降水量：ほぼ平年並（±）
	ヨモギエダシャク	発生量：多（叩き落とし虫数 0.1 頭/4 カ所）	６月上中旬発生量：多（＋） 気象予報：気　温：高い（＋） 降水量：ほぼ平年並（±）

作物名	病害虫名	予報（７月の県平均平年値）	予報の根拠
きく（施設）	黒斑病・褐斑病	発生量：やや少（発病株率：0.3%）	６月中旬発生量：少（発生なし）（－） 気象予報：気　温：高い（＋） 降水量：ほぼ平年並（±）
	アザミウマ類	発生量：やや多（平年７月被害株率：16.4%）	６月中旬発生量：並（±） ただし、一部圃場で多（＋） 気象予報：気　温：高い（＋）
	アブラムシ類	発生量：やや少（平年７月寄生株率：0.1%）	６月中旬発生量：少（発生なし）（－） 気象予報：気　温：高い（＋）
	オオタバコガ	発生量：並（平年７月被害株率：1.7%）	６月中旬発生量：少（発生なし）（－） ６月の成虫誘殺数： やや少～多（－～＋） 気象予報：気　温：高い（＋）
	ハダニ類	発生量：多（発病株率 3.5%）	６月中旬発生量：多（＋） 気象予報：気　温：高い（＋）

表の見方について

- 予報の発生量は平年（静岡県の過去 10 年間）との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の５段階で示しています。
- 予報の発生時期について記載がある場合は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年（静岡県の過去 10 年間）との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の５段階で示しています。
- 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況（調査時期と発生量）、気象庁の１ヶ月予報（気温と降水量）を記入しています。その状況が多発要因の場合は（＋）、少発要因の場合は（－）を示し、＋－を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

農薬情報はこちらで検索！

静岡県農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準

https://www.s-boujo.jp/

静岡県病害虫防除所 HP が新しくなりました。

静岡県病害虫防除所 HP

https://www.pref.shizuoka.jp/sangyoshigoto/norinjimusho/1058658/boujo/index.html

２　予報の根拠と防除対策

【稲】

＜生育の概況等＞

巡回時の生育は、早期栽培が分げつ期～幼穂形成期、普通期栽培が活着期～分げつ期であった（調査期間：６月 11 日～19 日）。なお、病害虫防除員の情報によると、生育は概ね平年並～やや早い。

葉いもち・穂いもち

予報の根拠

- ６月中旬の巡回調査では、発病株率は 0.6%（平年 0.3%）と、平年よりやや多かった。置き苗いもちの発生はみられなかった。
- １か月予報では、気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並のため、発生を助長しない（感染好適条件：気温 15～25℃、葉面湿潤時間 10 時間以上、前５日間の平均気温が 20～25℃を全て満たす時）。

防除対策

- 置き苗は本田に植え付けた株より早期に葉いもちが発生し、いもち病の伝染源になりやすい。補植する場合はできるだけ早く行い、不要な苗は速やかに処分する。
- 育苗箱処理剤の残効は出穂期頃までなので、効果の切れた時期以降で、本病の発生に適した曇雨天で日照不足が続く場合は注意が必要である。
- 梅雨の時期は特に発生しやすい気象条件となるため、上位１～３葉に病斑が見られる場合は適期（穂ばらみ期～穂揃期）に必ず防除を実施する。特に急性型病斑（周辺部に褐色部分がなく、暗緑色あるいはおずみ色の病斑）が多いときには、速やかに薬剤散布をする。
- 常発地では薬剤の予防散布を行う。
- 本県では MBI-D 剤耐性いもち病菌が発生している。また、他県では QoI 剤耐性いもち病菌が発生し問題となっている。本県でも耐性菌の発生が懸念されるため、発生リスクが高い薬剤を使用する場合は、連用を避けるなど適切に使用する（詳細は「農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準の「参考資料」内「殺菌剤使用ガイドライン（日本植物病理学会　殺菌剤耐性菌研究会）」を参照）。

斑点米カメムシ類

予報の根拠

- ６月中旬の巡回調査では、平均発病株率は 5.6%（平年 0.01%）と平年より多かった。
- 本病は近年全国的に発生面積が増加している。発病には土壌条件の影響が大きいが、気象条件については、25～30℃、湿度 90%前後の結露しやすい状況が感染に好適である。また出穂期以降の高温はイネの本病に対する抵抗力が低下する。１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- 主要肥料成分では窒素およびカリの欠乏が発病を助長する。このほか可給態ケイ酸、鉄、マンガン、マグネシウムの欠乏と石灰の多用が発病を助長するとされている。そのため肥料切れに注意し、必要に応じ穂肥などを施用する。
- 出穂期以降に高温・多湿が続いた場合には、葉の病点のみならず穂枯れを起こすので、葉に病斑が見られる場合は穂ばらみ期～穂揃期にかけて薬剤散布を行う。

●褐斑病菌（ヒメトビウンカ）

予報の根拠

・６月中旬の巡回調査では、縞葉枯病の発生は確認されなかった（平年平均発病株率0.01%）。また、本病を媒介するヒメトビウンカの最高寄生数は0.09頭／株（平年0.14頭／株）と平年よりやや少なかった。

・６月１～10日時点の県内４ヶ所の予察灯におけるヒメトビウンカの誘殺数は全地点で平年並～少なく推移している。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並であるが、気温は平年より高いため、ヒメトビウンカの増殖をやや助長する。このため、本病の発生もやや助長される。

防除対策

・例年、縞葉枯病が発生する地域ではヒメトビウンカの発生に注意し、特に幅の本病への感受性の高い幼穂形成期頃までを中心に防除を行う。

●セジロウンカ

予報の根拠

・６月中旬の巡回調査では、セジロウンカの発生は確認されなかった（平年平均最高寄生数0.03頭／株）。

・６月１～10日時点の県内４ヶ所の予察灯におけるセジロウンカの誘殺は確認されなかった（平年６月誘殺なし）。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並であるが、気温は平年より高いため、梅雨の下層ジェット気流に乗じて飛来した本種の増殖をやや助長する。

防除対策

・株元をよく観察し、成虫虫が多寄生する場合や寸寸病が発生している場合は直ちに薬剤を散布する。

●トビイロウンカ

予報の根拠

・６月中旬の巡回調査では、トビイロウンカの発生は確認されなかった（平年６月時発生なし）。

・６月１～10日時点の県内４ヶ所の予察灯におけるセジロウンカの誘殺は確認されなかった（平年６月誘殺なし）。なお、成虫の誘殺数データは静岡県病害虫防除所ホームページ「害虫誘殺グラフ」で提供している。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並であるが、気温は平年より高いため、梅雨の下層ジェット気流に乗じて飛来した本種の増殖をやや助長する。

防除対策

・本種は世代交代を繰り返すことで急激に増殖し、数が増えてからでは効果が高い薬剤を使用しても十分な殺虫効果が得られない場合があるため、予防に重点を置いた防除を実施する。

・本種に効果の高い育苗箱施用剤を使用していない場合は、梅雨明け後～出穂前及びその10～14日後の計２回の防除を検討する。また、本種に効果の高い育苗箱施用剤を使用している場合であっても、今後の誘殺数に注意し、可能な限り１回目の防除を検討する。

●斑点米カメムシ類（アカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメ等）

予報の根拠

・６月中旬の水田畦畔・雑草地等における斑点米カメムシ類の発生は、平年より多かった（30回すくいとり平均捕獲数：27.5頭、平年16.6頭）。

・６月１～10日時点の畠田市を除く県内３ヶ所の予察灯では、斑点米カメムシ類の誘殺数は平年より少なく推移している。ただし、畠田市ではアカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメが平年より多く、ミナミアオカメムシが平年よりやや多く推移している。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並であるが、気温は平年より高いため、斑点米カメムシ類の増殖をやや助長する。

防除対策

・畦畔及び水田周辺の除草は、カメムシ類の密度低下に有効である。除草してない水田は早急に実施する。なお、出穂直前および以降の除草はカメムシ類を水田内に移動させてしまう可能性があるので、出穂の10日前までに除草を終了する。

・出穂後は本田内のカメムシ類の発生に注意し、確認された場合は薬剤防除を実施する。特に出穂期が周辺より早い水田はカメムシ類が集中するため、注意を要する。

・穂揃期（成虫侵入期（すべての茎のうち80%の茎で穂が出た状態））とその７～10日後（幼虫ふ化期）の２回薬剤散布を行うと防除効果が高い。粒剤は出穂期に散布する。イネカメムシの発生が目立つ場合は、出穂期（すべての茎のうち50%前後の茎で穂が出た状態）に散布する。

<その他の病害虫>

●スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）

発生状況

・６月中旬の巡回調査では、スクミリンゴガイの発生面積率は34%（平年39%）と平年並であった。ただし、病害虫防除員12名中８名から、多いまたはやや多いとの報告があった。

防除対策

・移植後２～３週間は、食害を抑制するために浅水管理（４cm以下（理想は１cm以下））に努める。

・発生地域では移植後の薬剤処理を実施する。

・水路壁面や畦波に赤橙色の卵が多数産卵されるため、見つけ次第卵をつぶす。なお、スクミリンゴガイには寄生虫（広東住血線虫）が存在する可能性があるので、貝に触る場合は必ずゴム手袋をはめる。

【かんしょ】

<生育の概況等>

生育は平年並で推移している。

●ナカジロシタバ

予報の根拠

・６月中旬の巡回調査では、平均寄生幼虫数1.2頭/m²(平年0.4頭/m²)と平年より多かった。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、発生を助長する。

防除対策

・幼虫は齢期が進むと食害量が急増するため、例年発生するほ場では観察により早期発見に努める。

・若齢幼虫が多数見られる場合は薬剤防除を行う。

●イモキバガ（イモコガ）

予報の根拠

・６月中旬の巡回調査では、平均被葉数は0.2葉/m²（平年0.5葉/㎡）と平年より少なかった。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、発生を助長する。

防除対策

・例年、葉の繁茂に伴い被葉数は増加する。多発する場合は防除を行う。

●エビガラスズメ

予報の根拠

・６月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年平均寄生幼虫数0.1頭/m²）。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、発生を助長する。

防除対策

・幼虫は齢期が進むと食害量が急増するため、早期発見に努め、若齢幼虫のうちに防除を行う。

【温州みかん】

<生育の概況等>

生育は数日早い産地が多く、着果量は産地によりばらついている。

●黒点病

予報の根拠

・６月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年平均発病度0.03）。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

・20～27℃の水滴中で胞子が発芽し、葉や果実に感染して黒点ができる。降雨日の最低気温が22℃以上になると容易に感染する。

・アメダスの気象データを用いた予測に基づいた要防除時期は、６月１日防除の場合、既に要防除時期に達している地域が多く、６月11日防除の場合は６月30日～７月８日、６月21日防除の場合は７月８～28日となる。各産地における要防除時期予測の詳細は、静岡県病害虫防除所ホームページの「防除時期等予測」を参照する。

・防除実施日以降の累積降雨量が250mm、または防除実施日から25～30日経過した時点が次の防除実施の目安となる。上記の要防除時期予測を目安に、栽培地域のアメダスの気象データなどを確認し、累積降雨量が増えた場合は防除を早めて実施すること。

●チャノキイロアザミウマ

予報の根拠

・６月中旬の巡回調査では、本種の害生は認められなかった（平年平均害生果率0.2%）。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・アメダス気象データを用いた予測によると、第３世代成虫の発生時期は６月24日～７月９日、第４世代成虫は同様に７月14日～７月29日と予想される（産地により発生時期が異なる）。各産地における発生時期予測の詳細は、静岡県病害虫防除所ホームページの「防除時期等予測」を参照する。

・本種各世代において、飛来最盛日の１週間前～飛来最盛日までが薬剤防除適期である。

・炭酸カルシウム微粉末剤を６月上旬に散布した園地では、７月中旬にも同剤を散布することによって、６～８月にかけて化学殺虫剤を３～４回散布した場合とほぼ同等の防除効果が得られる。なお、梅雨明け以降の散布は、収穫時期に白斑が残りやすくなるため注意する。

●ミカンハダニ

予報の根拠

・６月中旬の巡回調査における平均寄生葉率は5.4%（平年5.8%）と平年並であった。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生を助長しない。

防除対策

・７～８月の盛夏期は高温により本種の増殖は抑制され、土着天敵（カブリダニ類など）の活動が活発になることから、本種は減少する傾向にある。ただし、多発園（寄生葉率が30%を超える園地）では薬剤防除を行う。

<その他病害虫>

●かいよう病

予報の根拠

・６月中旬の巡回調査では、果実での発病は認められなかった（平年平均発病度(果実)発生なし）。

防除対策

・ウンシュウミカンは抵抗性を持つが、中晩柑と近接している園では感染する可能性があるため、感染状況を見て防除を行う。

・病原菌の生育適温は20～30℃であり、旧葉に形成された病斑から降雨の際に雨滴とともに飛散し、新葉が硬化する前に気孔や傷口から感染する。発生が見られる園地では降雨前に予防散布を行う。

・夏芽でのハモグリガ被害は本病の発生を助長するため、ハモグリガの防除を行う。

●ゴマダラカミキリ

防除対策

・卵やふ化幼虫を対象として、７月上旬に主幹から株元にかけて薬剤散布し、幼虫の食入を防止する。

【中晩柑】

●かいよう病

予報の根拠

・６月中旬の巡回調査では、平均発病度（果実）は 0.04（平年 0.05）と平年並であった。平均発病度（葉）は 1.54（平年 0.46）であり、一部園地で多発していたため平年より多かった。

・１か月予報では、気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並のため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

・病原菌の生育適温は 20～30℃であり、旧葉に形成された病斑から降雨の際に雨滴とともに飛散し、新葉が硬化する前に気孔や傷口から感染する。発生が見られる園地では降雨前に予防散布を行う。

・夏芽のハモグリガによる被害は本病の発生を助長するため、ハモグリガの防除を行う。

【キウイフルーツ】

＜生育の概況等＞

生育は平年並で推移している。

●かいよう病

予報の根拠

・６月中旬の巡回調査では、発病葉率は 3.1%（過去８年の平均発病葉率 9.4%）であった。

・１か月予報では、気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並のため、本病の発生を特には助長しない。

防除対策

・病原菌の生育適温は 10℃～20℃であり、罹病樹から漏出した樹液が風雨により飛散することで気孔や傷口から感染する。

・平均気温が 25℃を超えると病勢が停滞する。９月下旬～10 月上旬になると平均気温が 20℃付近まで低下するため、菌の増殖が再び活発化する。初夏までに発病がみられた樹については秋以降の経過に注意し、再発病がみられた際は収穫後にコサイド 3000 を散布する。

・細菌病であることから、樹体内に一度細菌が侵入してしまうと根本的な治療は難しい。予防防除を重点的に行い、発病樹は伐採するなど早期に園地から除くこと。

・管理作業によっても伝染するため、せん定器具はこまめに消毒する。

・キウイフルーツは風に弱く傷害を受けやすいため、防風対策を徹底する。

【果樹全般】

●カメムシ類（チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ）

予報の根拠

・今年２月の越冬量調査において、落葉１㎡あたりのチャバネアオカメムシ越冬虫数は、県平均 0.5 頭（平年 1.3 頭）と平年より少なかった。

・５月上旬に実施した、かんきつ開花期における叩き落し調査では、本虫の寄生数／５か所は 0.5 頭（平年 1.3 頭）と平年より少なかった。

・県内４か所の予察灯における６月１～20 日の合計誘殺数の平均は、92.6 頭（平年 132 頭）と平年よりやや少なかった。なお、本虫の内訳は、チャバネアオカメムシが 40.0 頭（平年 64.8 頭）、ツヤアオカメムシが 52.3 頭（平年 66.1 頭）、クサギカメムシが 0.3 頭（平年 1.5 頭）であった。

・県内６か所のフェロモントラップにおける６月１～20 日の合計誘殺数の平均は、145 頭（平年 113 頭）と平年よりやや多かった。なお、本虫の内訳は、チャバネアオカメムシが 123 頭（平年 98.2 頭）、ツヤアオカメムシが 17.8 頭（平年 10.7 頭）、クサギカメムシが 4.0 頭（平年 4.0 頭）であった。

・ヒノキ・スギ球果の着果量（指数）は、県平均 7.1（平年 4.4）と平年より多かった。なお、本虫は球果を餌として増殖するため、着果量が多いと本虫は増えやすくなる。

・ヒノキ・スギ球果における本虫の平均寄生数は、10 結果枝あたり 0.4 頭（平年 0.4 頭）と平年並であった。

・７月中旬のヒノキ球果における球果１個あたりの本虫の吸汁痕数は、平均 0.01（平年 0.4）と平年より少なかった。なお、ヒノキ球果における吸汁痕数が 25 を超えると、本虫はヒノキから離脱し、餌を求めて果樹園に飛来するとされている。

・以上をまとめると、平年に比べて、越冬量は少なく、かんきつでの寄生数は少なく、予察灯への誘殺数はやや少なく、フェロモントラップへの誘殺数はやや多く、ヒノキ・スギ着果量は多く、ヒノキ・スギでの寄生数は平年並、ヒノキ球果での吸汁痕数は少なかった。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

・１か月予報を加味すると、７月の果樹園への成虫飛来数は平年よりやや多いと予想される。

防除対策

・ほ場での発生状況をよく観察し、発生が見られたら速やかに防除を行う。特に、ヒノキ、スギに近い果樹園では注意する。

・静岡県病害虫防除所ホームページ「害虫誘殺グラフ」では、果樹カメムシ類に関する各種情報（越冬量、予察灯及びフェロモントラップにおける発生状況、ヒノキ・スギ球果の着果量、同球果における寄生数、ヒノキ球果における吸汁痕数や羽化時期予測等）を随時提供しているので参照する。

【茶】

＜生育の概況等＞

６月上中旬の巡回調査では、二番茶摘採前～整枝後と、地域や茶園により異なった。

●炭疽病

予報の根拠

・６月上中旬の巡回調査では、平均発病葉数は 8.7 葉/1.25 ㎡(平年 3.9 葉/1.25 ㎡)と平年より多かった。特に川根地域 17.6 葉/1.25 ㎡(平年 2.0 葉/1.25 ㎡)、静岡市北部地域 10.4 葉/1.25 ㎡(平年 5.3 葉/1.25 ㎡)での発生が目立った。

・感染には新芽生育時に 10 時間以上の濡れが必要である。１か月予報では、気温は平年よりも高く、降水量はほぼ平年並であるため、本病の発生も平年並に推移すると考えられる。

防除対策

・降雨により胞子が飛散して感染するため、梅雨明けまでは感染機会が多くなる。本年は東海地方における梅雨入りが６月 21 日と平年よりも遅いため、６月下旬以降の感染に注意が必要である。防除は三番茶萌芽期から開葉期に実施し、例年発生が見られる茶園では萌芽期と２～３葉開葉期の２回防除を行う。なお、２回防除を実施する際には、１回目に予防効果の高い剤を使用し、２回目に治療効果の高い剤を使用する。

●もち病

予報の根拠

・６月上中旬の巡回調査では、平均発病葉数は 6.4 葉/1.25㎡(平年 7.7 葉/1.25 ㎡)と平年よりもやや少なかった。

・本病の生育適温は 16～20℃で、新芽生育時に降雨が多く、湿潤な日が続くと多発する。１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年よりも高いため本病の発生を特には助長しない。

防除対策

・高湿度条件下で胞子が飛散して感染するので、風通しの悪い山間地域茶園等では特に発生しやすい。二番茶期に発生の見られた茶園や山間地の茶園では、三番茶萌芽期から開葉期にかけて防除を行う

●輪斑病

予報の根拠

・６月上中旬の巡回調査では、平均発病葉数は 3.3 葉/1.25 ㎡(平年 1.7 葉/1.25 ㎡)と平年よりやや多かった。

・本病の発病には 25℃以上の高い気温が好適である。他の病害と異なり、降雨の多少は発生程度に影響しない。１か月予報によると、気温は平年よりも高いため、本病の発生を助長する。

防除対策

・摘採や整枝によってできた傷口が主な発病部位になるため、常発茶園では二番茶摘採後に速やかに防除を行う。なお、摘採直後に防除ができない場合は、整枝時に摘採面より２cm 程度深く刈り、その直後に薬剤散布を行う。

●チャハマキ、チャノコカクモンハマキ

予報の根拠

・６月上中旬の巡回調査では、チャハマキの平均寄生虫数は 0.18 頭/1.25 ㎡（平年 0.26 頭/1.25 ㎡）、チャノコカクモンハマキの平均寄生幼虫数は 0.02 頭/1.25 ㎡（平年 0.07 頭/1.25 ㎡）と、両種ともに平年よりやや少なかった。

・６月中旬までの県内各地の予察灯やフェロモントラップでの成虫誘殺状況では、誘殺数は平年並～多く、発生時期は平年並～早くなっている。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年並より高いため、発生を助長する。

防除対策

・第１世代成虫の発生は平年並～早く、第２世代幼虫を対象とした防除適期も平年並～早まっている。地域の予察灯やフェロモントラップでの成虫の誘殺状況に注意して適期防除を行う。なお成虫の誘殺数データは静岡県病害虫防除所ホームページ「害虫誘殺グラフ」で提供している。

●チャノホソガ

予報の根拠

・６月上中旬の巡回調査では、平均巻葉数は 1.2 葉/1.25 ㎡(平年 2.4 葉/1.25 ㎡)と平年より少なかった。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、発生を助長する。

防除対策

・新芽生育期と成虫発生期が合致すると発生が多くなる。６月中旬までのフェロモントラップにおける成虫誘殺数は地域により異なり、発生時期は平年並～やや早くなっている。

・地域の予察灯やフェロモントラップにおける誘殺虫数の推移や新芽への産卵状況に注意し、適期防除に努める。なお成虫の誘殺数データは静岡県病害虫防除所ホームページ「害虫誘殺グラフ」で提供している。

●チャノキイロアザミウマ

予報の根拠

・６月上中旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は 9.0 頭/4 カ所（平年 10.4 頭/4 カ所）と平年よりやや少なかった。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、発生を助長する。

防除対策

・例年、三番茶生育期に発生が増加するので、新芽の萌芽から開葉期に防除を実施する。

・更新園では、再生芽の生長期間が長いため本種の加害を受けやすい。発生状況に注意し、再生芽の萌芽から生育期に防除を実施する。

●チャノミドリヒメヨコバイ

予報の根拠

・６月上中旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は7.6頭/4カ所（平年5.1頭/4カ所）と平年より多かった。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、発生を助長する。

防除対策

・例年、三番茶生育期に発生が増加するので、新芽の開葉期に防除を実施する。

・更新園では、再生芽の生長期間が長いため本種の加害を受けやすい。発生状況に注意し、再生芽の生育期に防除を実施する。

●クワシロカイガラムシ

予報の根拠

・６月上中旬の巡回調査では、平均寄生株率は6.6%（平年10.3%）と平年より少なかった。

・アメダス平年値の気温データに基づく茶業研究センター（菊川市）の第２世代予想ふ化最盛日は、７月15日と予測されており（６月25日時点）、１か月予報では、気温は平年より高いことから、第２世代幼虫のふ化時期は平年より早い（平年７月21日）と予想される。また、降水量はほぼ平年並のため、発生を助長する。

防除対策

・地域のふ化最盛予想時期に、茶園内のふ化状況をよく観察して、適期防除に努める。なお、県内各地のふ化最盛予想日は静岡県病害虫防除所ホームページ「防除時期等予測」で情報提供している。

●ヨモギエダシャク

予報の根拠

・６月上中旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は0.28頭/4か所（平年0.13頭/4か所）と平年より多かった。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、発生を助長する。

防除対策

・７月に入ると成虫の発生が増加する。茶園内をよく観察し、薬剤感受性の高い若齢幼虫の時期に防除を行う。

<その他病害虫>

●炭疽病菌症

・本症状は、主に新芽の包葉や不完全葉の離脱した葉口から発症する。包葉や不完全葉の多くは新芽の萌芽期から２～３葉期に離脱するので、この時期に降雨が多いと発生が多くなる。また逆に、過乾燥も発症を助長する。

・昨年発生の多かった茶園では、三番茶芽の萌芽期から生育期に２回程度防除する。なお、QoI 剤は、耐性菌が発生しやすいので同一薬剤として扱い、連用を避ける。

【きく(施設)】

<生育の概況等>

生育は平年並である。

●黒斑病、褐斑病

予報の根拠

・６月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（過去５年間の平均発病株率0.3%）。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本病の発生を助長する（病原菌の生育適温：黒斑病24～28℃、褐斑病20～28℃）。

防除対策

・多湿によって発生が助長されるため、多雨時は特に注意する。本病は潜伏期間が長く、発病後の防除では効果が低いため、薬剤の予防散布を行う。

・発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に持ち出して処分する。土の上に落らた被害葉が伝染源となるため、被害葉をほ場に放置しない。

●アザミウマ類（クロゲハナアザミウマ、ネギアザミウマ、ミカンキイロアザミウマ）

予報の根拠

・６月中旬の巡回調査では、一部では場で多発していたが、平均被害株率は16.4%（過去５年間の平均17.0%）と平年並だった。

・１か月予報では、気温は平年より高いため、本種の増殖を助長する。

防除対策

・クロゲハナアザミウマやネギアザミウマは葉を食害する。発生初期に葉裏まで十分に防除を行う。

・開花期のきくの花は特にミカンキイロアザミウマの被害を受けやすいため、蕾の膨潤れ時から発生に注意する。

・施設開口部に防虫ネット（目合い0.4mm以下）を設置し、侵入を抑制する。

●アブラムシ類

予報の根拠

・６月中旬の巡回調査では、本種の発生は確認されなかった（過去５年間の平均寄生株率1.6%）。

・１か月予報では、気温は平年より高いため、本種の増殖を助長する。

防除対策

・アブラムシ類はウイルス病を媒介するため、寄生が認められる場合には速やかに薬剤散布を実施する。

・施設開口部に防虫ネット（目合い0.4mm以下）を設置し、侵入を抑制する。

●オオタバコガ

予報の根拠

・６月中旬の巡回調査では、チョウ目害虫による被害は確認されなかった（過去５年間の平均被害株率0.5%）。

・浜松市のキク産地２ヵ所（西区協和町及び伊左地町）におけるフェロモントラップの誘殺数は、協和町で平年より多く推移しており、伊左地町で平年並に推移している。また、磐田市のフェロモントラップでは平年よりやや少なく推移している。

・１か月予報では、気温は平年より高いため、本種の増殖を助長する。

防除対策

・例年７月以降に発生が増加するため、芽における被害の発生に注意し、初期防除に努める。

●ハダニ類

予報の根拠

・６月中旬の巡回調査では、平均被害株率は5.9%（過去５年間の平均2.4%）と平年より多かった。

・ １か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

・ 寄生が認められた場合は、少発生のうちに防除する。

・ ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、同一系統の農薬の連用は避けるほか、気門封鎖剤も利用する。なお、気門封鎖剤は卵への効果が低く残効性が期待できないため、５日間隔程度で連続散布する。

３．季節予報

●１か月予報　（東海地方　令和６年６月２０日　名古屋地方気象台発表）

【予報期間】　６月２２日から７月２１日

【予想される向こう１か月の天候】

特に注意を要する事項		期間の前半は、気温がかなり高くなる可能性があります。
向こう１か月	天候	平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。
	気温	平均気温は、高い確率８０%です。
１週目	気温	１週目は、高い確率８０%です。
２週目	気温	２週目は、高い確率６０%です。
３～４週目	気温	３～４週目は、高い確率５０%です。

【確　率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
１か月	気温	１０	１０	８０
１か月	降水量	３０	３０	４０
１か月	日照時間	４０	３０	３０
１週目	気温	１０	１０	８０
２週目	気温	１０	３０	６０
３～４週目	気温	１０	４０	５０

【予報の対象期間】

１か月　：　６月２２日（土）～　７月２１日（日）
１週目　：　６月２２日（土）～　６月２８日（金）
２週目　：　６月２９日（土）～　７月　５日（金）
３～４週目　：　７月　６日（土）～　７月１９日（金）

※ 利用上の注意

・気温・降水量は「低い（少ない）」「平年並」「高い（多い）」の３つの階級で予報します。階級の幅は、1991～2020年の30年間における各階級の出現率が等分（それぞれ33%）となるように決めてあります。（気候的出現率と呼びます）。

・晴れや雪などの天気日数は、平年の日数よりも多い（少ない）場合は「平年に比べて多い（少ない）」、また平年の日数と同程度に多い（少ない）場合には「平年と同様に多い（少ない）」と表現します。なお、単に多い（少ない）と表現した場合には対象期間の２分の１より多い（少ない）ことを意味します。

お問い合わせは
静岡県病害虫防除所　〒438-0803　磐田市富丘678-1
TEL 0538-36-1543　FAX 0538-33-0780
ＵＲＬhttps://www.pref.shizuoka.jp/sangyoshigoto/norinjimusho/f10/f6558/boujo/index.html

病害虫発生予察情報（8月予報）

令和６年７月30日
静岡県病害虫防除所長

１　予報概況

作物名	病害虫名	予報（８月の県平均平年値）	予報の根拠
稲	葉いもち・穂いもち	発生量：少 （葉いもち発病株率2.3%） （穂いもち発病株率0.04%）	７月中下旬葉いもち発生量：少　（－） 気象予報：気　温：高い　（－） 降水量：ほぼ平年並　（±）
	紋枯病	発生量：やや多 （発病株率6.7%）	７月中下旬発生量：並　（±） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：ほぼ平年並　（±）
	ごま葉枯病	発生量：多 （発病株率16.0%）	７月中下旬発生量：多　（＋） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：ほぼ平年並　（±）
	稲こうじ病	発生量：少 （発病株率0.3%）	昨年９月発生量：少　（－） 気象予報：気　温：高い　（－） 降水量：ほぼ平年並　（±）
	トビイロウンカ	発生量：並 （寄生虫数：0.05頭／株）	７月中下旬発生量：並（発生なし）（±） ７月予察灯誘殺数：並（発生なし）（±） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：ほぼ平年並　（±）
	斑点米カメムシ類	発生量：多	７月中下旬発生量：並　（±） ７月予察灯誘殺数：多　（＋） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：ほぼ平年並　（±）
	コブノメイガ	発生量：やや多 （被害株率2.4%）	７月中下旬発生量：並　（±） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：ほぼ平年並　（±）
	イチモンジセセリ （イネツトムシ）	発生量：やや多 （25株あたり寄生数0.4頭）	７月中下旬発生量：並　（±） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：ほぼ平年並　（±）
かんしょ	ナカジロシタバ	発生量：やや少 （寄生虫数0.1頭/㎡）	７月中旬発生量：少（発生なし）（－） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：ほぼ平年並　（±）
	イモキバガ （イモコガ）	発生量：並 （巻葉数9.7葉/㎡）	７月中旬発生量：やや少　（－） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：ほぼ平年並　（±）
	エビガラスズメ	発生量：並 （寄生虫数0.05頭/㎡）	７月中旬発生量：並（発生なし）（±） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：ほぼ平年並　（±）

作物名	病害虫名	予報（８月の県平均平年値）	予報の根拠
茶	炭疽病	発生量：並 （病葉数23.7葉/1.25㎡）	７月中下旬発生量：並　（±） 気象予報：気　温：高い　（±） 降水量：ほぼ平年並　（±）
	輪斑病	発生量：やや少 （病葉数5.0葉/1.25㎡）	７月中下旬発生量：少　（－） 気象予報：気　温：高い　（＋）
	新梢枯死症	発生量：やや少 （発症枝数5.8枝/1.25㎡）	７月中下旬発生量：少　（－） 気象予報：気　温：高い　（＋）
	カンザワハダニ	発生量：多 （寄生葉率3.3%）	７月中下旬発生量：多　（＋） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：ほぼ平年並　（±）
	チャハマキ	発生量：やや少 （寄生虫数0.5頭/1.25㎡） 発生時期：並～早い	７月中下旬発生量：少　（－） 第１世代成虫発生量：並　（±） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：ほぼ平年並　（±）
	チャノコカクモンハマキ	発生量：やや少 （寄生虫数0.6頭/1.25㎡） 発生時期：並～早い	７月中下旬発生量：少　（－） 第１世代成虫発生量：並　（±） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：ほぼ平年並（±）
	チャノホソガ	発生量：少 （巻葉数1.1葉/1.25m2）	７月中下旬発生量：少　（－） 気象予報：気　温：高い　（－） 降水量：ほぼ平年並　（±）
	チャノキイロアザミウマ	発生量：多 （叩き落とし虫数9.3頭/4カ所）	７月中下旬発生量：やや多　（＋） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：ほぼ平年並　（±）
	チャノミドリヒメヨコバイ	発生量：並 （叩き落とし虫数0.9頭/4カ所）	７月中下旬発生量：並　（±） 気象予報：気　温：高い　（±） 降水量：ほぼ平年並（±）
	ヨモギエダシャク	発生量：やや多 （叩き落とし虫数0.1頭/4カ所）	７月中下旬発生量：並　（±） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：ほぼ平年並（±）
	クワシロカイガラムシ	発生量：少 （寄生株率5.5%） 発生時期：早い	７月中下旬発生量：少　（－） 気象予報：気　温：高い　（±） 降水量：ほぼ平年並　（±）
きく（施設）	黒斑病・褐斑病	発生量：多 （発病株率：0.4%）	７月中旬発生量：やや多　（＋） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：ほぼ平年並（±）
	アザミウマ類	発生量：多 （被害株率：14.8%）	７月中旬発生量：やや多　（＋） 気象予報：気　温：高い　（＋）
	ハダニ類	発生量：多 （被害株率：4.2%）	７月中旬発生量：多　（＋） 気象予報：気　温：高い　（＋）
作物全般	ハスモンヨトウ	発生量：やや多	フェロモン誘殺数：非～やや少　（±～－） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：ほぼ平年並（±）
	オオタバコガ	発生量：多	フェロモン誘殺数：やや少～多　（－～＋） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：ほぼ平年並（±）

作物名	病害虫名	予報（８月の県平均平年値）	予報の根拠
温州みかん	黒点病	発生量：多 （発病度0.9）	７月中旬発生量：多　（＋） 気象予報：気　温：高い　（±） 降水量：ほぼ平年並　（±）
	かいよう病	発生量：多 （発病度（果）0.02）	７月中旬発生量：多　（＋） 気象予報：気　温：高い　（±） 降水量：ほぼ平年並　（±）
	ミカンハダニ	発生量：並 （寄生葉率5.5%）	７月中旬発生量：並　（±） ただし、一部は場で多　（＋） 気象予報：気　温：高い　（±） 降水量：ほぼ平年並　（±）
	チャノキイロアザミウマ	発生量：やや少 （寄生果率0.1%）	７月中旬発生量：少　（－） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：ほぼ平年並　（±）
中晩柑類	かいよう病	発生量：多 （発病度（果）0.4）	７月中旬発生量：多　（＋） 気象予報：気　温：高い　（±） 降水量：ほぼ平年並　（±）
なし	ハダニ類	発生量：やや少	７月下旬発生量：少　（－） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：ほぼ平年並　（±）
	ナシヒメシンクイ	発生量：並	７月下旬発生量：少　（－） フェロモン誘殺数：多　（＋） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：ほぼ平年並　（±）
かき	フジコナカイガラムシ	発生量：やや少 （寄生果率1.0%）	７月下旬発生量：少　（－） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：ほぼ平年並　（±）
	ハマキムシ類	発生量：並	７月下旬発生量：やや少　（－） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：ほぼ平年並　（±）
果樹全般	カメムシ類	飛来数：多	予察灯誘殺数：少　（－） フェロモントラップ誘殺数：やや多　（＋） ヒノキ・スギ着果量：多　（＋） ヒノキ・スギ寄生数：多　（＋） ヒノキ球果吸汁頻数：並　（±） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：ほぼ平年並　（±）

表の見方について

- 予報の発生量は平年（静岡県の過去10年間）との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の５段階で示しています。
- 予報の発生時期の記載がある場合は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年（静岡県の過去10年間）との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の５段階で示しています。
- 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況（調査時期と発生量）、気象庁の１か月予報（気温と降水量）を記入しています。その状況が多発要因の場合は（＋）、少発要因の場合は（－）を示し、＋－を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

農薬情報はこちらで検索！

静岡県農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準

https://www.s-boujo.jp/

静岡県病害虫防除所HPが新しくなりました。

静岡県病害虫防除所 HP

https://www.pref.shizuoka.jp/sangyoshigoto/norinsuisanmusho/1058658/boujo/index.html

2　予報の根拠と防除対策

【畑】

<生育の概況等>

巡回時の生育は、早期栽培が幼穂形成期～糊熟期、普通期栽培が分げつ期～幼穂形成期であった（調査期間：7月17～23日）。病害虫防除員からのアンケート調査によると、生育は平年並～早い傾向。

●斑いもち・褐いもち

予報の根拠

・7月中下旬の巡回調査では、平均発病株率は0.4%（平年1.9%）と平年より少なかった。

・本病の胞子形成から発芽、イネへの侵入、感染の成り立つ適温は25℃前後だが、イネの本病への抵抗力は20℃以下の低温期間が長くなるほど低下する。また降雨等によるイネの濡れ時間が長いほど胞子の侵入量が多くなる。1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本病の発生を特には助長しない。

防除対策

・育苗箱処理剤の残効は出穂期頃までなので、効果の切れた時期以降で、本病の発生に適した雷雨天で日照不足が続く場合は注意が必要である。

・上位1～3葉に病斑が見られる場合は、適期（穂ばらみ期～穂揃期）に必ず防除を実施する。特に、急性型病斑（病斑周辺部に褐色部分が少なく、病斑が暗緑色あるいはねずみ色）が多いときには、速やかに薬剤散布をする。

・常発地では薬剤の予防散布を行う。

・本県では MBI-D 剤耐性いもち病菌が発生している。また、近年、直県では QoI 剤耐性いもち病菌が発生し問題となっており、本県でも発生が懸念されるため、耐性菌の発生リスクが高い薬剤を使用する場合は、連用を避けるなど適切に使用する。詳細は日本植物病理学会殺菌剤耐性菌研究会ホームページの「殺菌剤使用ガイドライン」を参照。

●紋枯病

予報の根拠

・7月中下旬の巡回調査では、平均発病株率は0.7%（平年0.8%）と平年並であった。

・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本病の発生を助長する（本病原菌は生育適温28～32℃と高温を好む）。

防除対策

・水田等で越冬した菌核が一次伝染源となるため、前年発生したほ場では発生しやすい。発生が見られた場合はすみやかに薬剤防除を行う。

・病斑が上位葉鞘まで上がると減収の要因になる。特に過繁茂となっているほ場では多発しやすいため注意する。

●ごま葉枯病

予報の根拠

・7月中下旬の巡回調査では、平均発病株率は20.2%（平年3.7%）と平年より多かった。

・本病は近年全国的に発生面積が増加している。発病には土壌条件の影響が大きいが、気象条件については、25～30℃、湿度90%前後の結露しやすい状況が感染に好適である。また出穂期以降の高温はイネの本病に対する抵抗力が低下する。1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本病の発生を助長する。

防除対策

・土壌肥料成分では窒素およびカリの欠乏が発病を助長する。このほか可給態ケイ酸、鉄、マンガン、マグネシウムの欠乏と古灰の過剰が発病を助長するとされている。そのため肥料切れに注意し、必要に応じ穂肥などを施用する。

・出穂期以降に高温・多湿が続いた場合には、葉から飛散した胞子により穂枯れを起こすので、葉に病斑が見られる場合は穂ばらみ期～穂揃期にかけて薬剤散布を行う。

●苗こうじ病

予報の根拠

・昨年9月の巡回調査では、平均発病株率は0.6%（平年2.1%）と平年より少なかった。

・本病は穂ばらみ期頃の低温・多雨により発生が助長される。1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本病の発生を特には助長しない。

防除対策

・本病は収穫時に落下した病粒に含まれる多量の厚壁胞子が土壌中に残り、翌年の伝染源となる。このため、常発ほ場では注意が必要である。

・本病の薬剤防除は予防散布が基本であり、適期は穂ばらみ期頃である。常発ほ場では、適期に薬剤防除を実施する。

●トビイロウンカ

予報の根拠

・7月中下旬の巡回調査では、本種の寄生は認められなかった（平年最高寄生数0.002頭／株）。

・県内4ヶ所の予察灯におけるトビイロウンカの誘殺は確認されなかった。なお、成虫の誘殺数データは静岡県病害虫防除所ホームページ「害虫誘殺グラフ」で提供している。

・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・例年、8月以降に発生量が増加する。

・隣県の愛知県では、7月2日に本種の誘殺が確認されている。そのため、本県においても飛来している可能性があるため発生動向に十分注意すること。

・本虫は世代交代を繰り返すことで急激に増殖する。特に8～9月に高温が継続する場合は急増し、放が増えてからでは効果が高い薬剤を使用しても十分な殺虫効果が得られず坪枯れを引き起こす場合があるため、予防に重点を置いた防除を実施する。

・本虫に効果の高い育苗箱施用剤を使用していない場合は、ほ場で確認されていなくても既に寄生している可能性があることから、梅雨明け後～出穂前及びその10～14日後の計2回の防除を検討する。また、本虫に効果の高い育苗箱施用剤を使用している場合であっても、可能な限り1回目の防除を検討する。

・葉色に注意し、本田内の一部が坪状に黄化している場合は株元を観察し、成虫の寄生が確認された場合は直ちに薬剤防除を行う。

●斑点米カメムシ類（アカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメ、ミナミアオカメムシ、イネカメムシ等）

予報の根拠

・県内4ヶ所の予察灯における7月第3半旬時点の合計誘殺数は、アカヒゲホソミドリカスミカメ、アカスジカスミカメ、ミナミアオカメムシおよびイネカメムシともに平年より多かった。誘殺数データは静岡県病害虫防除所ホームページ「害虫誘殺グラフ」で提供している。

・7月中下旬の水田周辺における雑草のすくい取り調査では、県平均捕獲数は17.8頭／30回振り（平年19.7頭／30回振り）と平年並の発生であったが、志太榛原および中遠・西部普通期作型では、平年より多かった。また、全調査地点中76%（平年74%）の調査地点から斑点米カメムシ類が捕獲された。

・周辺雑草から捕獲したカメムシ類のうち、アカスジカスミカメが全捕獲数の81%、ホソハリカメムシが同4%を占め、イネカメムシは同2%を占めた。その他、アカヒゲホソミドリカスミカメ、クモヘリカメムシ等が捕獲された。

・一部でイネカメムシの発生が確認されている。本種は出穂前後に水田に侵入し、斑点米のほか、乳熟期までの吸汁加害により不稔籾を生じさせ減収を引き起こす。

・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・斑点米カメムシ類はイネ科やカヤツリグサ科雑草の種子で増殖するため、水田周囲の雑草を除去する。ただし、水稲の出穂開際の除草はカメムシ類の本田への侵入を助長する可能性があるため、出穂10日前までに除草を徹底する。

・イネカメムシはアカスジカスミカメ等の斑点米カメムシ類と異なり、越冬地より水田に直接飛来してくる。そのため、水田畦畔の除草による密度低減効果は鈍い点に注意すること。

・出穂後は本田内のカメムシ類の発生に注意し、確認された場合は薬剤防除を実施する。特に出穂期が周辺より早い水田はカメムシ類が集中するため、注意を要する。

・穂揃期（成虫侵入期（すべての茎のうち80%の茎で穂が出た状態））とその7～10日後（幼虫ふ化期）の2回薬剤散布を行うと効果が高い。粒剤は出穂期に散布する。

・イネカメムシの発生が目立つ場合は、不稔対策として出穂期（成虫侵入期（すべての茎のうち50%前後の茎で穂が出た状態））に、斑点米対策に出穂期から7～10日後（幼虫ふ化期）に薬剤散布を行うと良い。

・薬剤感受性の低下を避けるため、作用機構分類コードを参照し、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。薬剤については、静岡県農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準を確認する。

・農林水産省の蜜蜂被害事例調査により、「蜜蜂被害は、水稲のカメムシを防除する時期に多く、水稲のカメムシ防除に使用した殺虫剤（農薬）を直接浴びたことが原因である可能性が高い」ことが報告されたため、養蜂家との情報共有を行う等、蜜蜂への影響に留意し防除を行う。なお、詳細は農林水産省ホームページを参照する。

7月の畦畔・雑草地における斑点米カメムシ類の捕獲頭数（頭／30回振）

	田方平坦地	東部高冷地	志太榛原	中遠・西部 普通期	中遠 早期	県平均
本年度	7.0	0.4	19.1	38.9	8.2	17.8
平年	11.0	4.5	15.9	31.4	23.5	19.7

●コブノメイガ

・7月中下旬の巡回調査では、平均被害株率は0.27%（平年被害株率0.24%）と平年並であった。

・1か月予報では、気温は高く、降水量はほぼ平年並であるため、本種の発生をやや助長する。

・普通期栽培では出穂期頃に加害されると登熟歩合が低下するので、8月上～中旬に成幼虫の発生状況を確認する。上位葉を幼虫が食害している場合は直ちに薬剤を散布する。成虫が確認された場合は7～10日後に相当する若齢幼虫期に薬剤を散布する。

●イチモンジセセリ（イネツトムシ）

・7月中下旬の巡回調査では、平均寄生数は0.05頭／25株（平年0.02頭／25株）と平年並であった。

・1か月予報では、気温は高く、降水量はほぼ平年並であるため、本種の発生をやや助長する。

・普通期栽培で葉色の濃い本田では被害が集中するので、葉巻の発生に注意し、葉巻内に幼虫が見られる場合は薬剤防除を行う。

●フタオビコヤガ

・７月中下旬の巡回調査では、平均寄生数は5.09頭／25株（平年1.14頭／25株）と平年より多かった。
・１か月予報では、気温は高く、降水量はほぼ平年並であるため、本種の発生をやや助長する。
・出穂前後の加害が最も被害が大きいため、多発生の場合は直ちに薬剤を散布する。

【かんしょ】

<生育の概況等>

生育は平年に比べやや遅くなっている。

●ナカジロシタバ

予報の根拠

・７月中旬に行った巡回調査では、発生は認められなかった（平年寄生幼虫数0.3頭/㎡）。
・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・中～老齢幼虫は食害量が多いため、注意が必要である。
・幼虫が多数見られるようであれば直ちに薬剤防除を行う。

●イモキバガ（イモコガ）

予報の根拠

・７月中旬に行った巡回調査では、平均巻葉数は1.0葉/㎡（平年1.4葉/㎡）と平年よりやや少なかった。
・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・例年、８月は葉の繁茂に伴い巻葉数が増加する。多発生のほ場では、被害が拡大する前に防除を行う。

●エビガラスズメ

予報の根拠

・７月中旬に行った巡回調査では、発生は認められなかった（平年寄生幼虫数0.04頭/㎡）。
・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・中～老齢幼虫は１頭当たりの食害量が多いため、若齢幼虫のうちに防除を行う。

防除対策

・盛夏期は高温により本種の増殖は抑制され、土着天敵（カブリダニ類など）の活動が活発になることから、本種は減少する傾向にある。ただし、多発園（寡あたり雌成虫３～４頭を超える園地）では薬剤防除を行う。

●チャノキイロアザミウマ

予報の根拠

・７月中旬の巡回調査では、平均寄生果率は0.03%（平年0.2%）と平年より少なかった。また、果梗部での平均被害度は0.1（平年0.5）、果頂部での被害は認められなかった（平年0.02）。
・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・アメダス気象データを用いた予測によると、今後の気温が平年並で推移した場合、第５世代成虫の発生ピークは７月28日～８月13日、第６世代成虫の発生ピークは８月14日～９月１日と予想される（産地により発生時期が異なる）。なお、各地域における発生時期予測の詳細は、静岡県病害虫防除所ホームページ「防除時期等予測」を参照する。
・本種各世代において、飛来最盛日の１週間前～飛来最盛日までが薬剤防除適期である。
・樹冠占有面積率60%以下の園地で、反射率90%以上の光反射シートマルチを全面被覆すれば、薬剤防除と同等の効果がある。

<その他の病害虫>

●ゴマダラカミキリ

防除対策

・病害虫防除員からの情報によると、本種の多発園地が散見されている。成虫の飛来が多い園地では、卵やふ化幼虫を対象として、主幹から株元にかけて薬剤散布し、幼虫の食入を防止する。

【中晩柑類】

●かいよう病

予報の根拠

・７月中旬の巡回調査では、果実の発病度は1.0（平年0.2）、葉の発病度は1.8（平年0.5）と平年より多かった。
・１か月予報では、気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並のため、本病の発生を特には助長しない。ただし、台風などの強風を伴う雨によって助長される。

防除対策

・病原細菌の生育適温は20～30℃であり、病斑から降雨の際に雨滴とともに飛散し感染する。
・発病枝は伝染源となるため除去する。
・台風などの強風を伴う雨によって感染が著しく助長され、急激に多発する場合がある。防除においては気象情報と園地の発生状況に注意し、感染拡大を防ぐよう降雨前の予防に重点を置く。
・夏芽でのハモグリガの被害部は本病の発生を助長するため、ハモグリガの防除を行い、被害枝は除去する。

【温州みかん】

<生育の概況等>

生育は平年より数日早く、着果量は地域により異なっている（やや少ない～多い）。

●黒点病

予報の根拠

・７月中旬の巡回調査では、果実の発病度は2.4（平年0.2）と平年より多かった。
・１か月予報では、気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並のため、本病の発生を特には助長しない。ただし、台風などの強風を伴う雨によって助長される。

防除対策

・20～27℃の水滴中で胞子が発芽し、葉や果実に感染して黒点が出来る。降雨日の最低気温が22℃以上になると容易に感染する。
・枯枝は伝染源になるため園地から除去する。
・防除実施日以降の累積降水量が250㎜、または防除実施日から25～30日経過した時点が次の防除実施の目安となる。アメダスの気象データなどを確認し、秋雨地域の累積降水量が増えた場合は防除を早めて実施すること。

●かいよう病

予報の根拠

・７月中旬の巡回調査では、果実の発病度は0.14（平年0.02）、葉の発病度は0.6（平年0.1）と平年より多かった。
・１か月予報では、気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並のため、本病の発生を特には助長しない。ただし、台風などの強風を伴う雨によって助長される。

防除対策

・病原細菌の生育適温は20～30℃であり、病斑から降雨の際に雨滴とともに飛散し感染する。
・発病枝は伝染源となるため除去する。
・台風などの強風を伴う雨によって感染が著しく助長され、急激に多発する場合がある。防除においては気象情報と園地の発生状況に注意し、感染拡大を防ぐよう降雨前の予防に重点を置く。
・６月以降の銅剤散布は中晩柑類に比べ薬害が出やすいため注意する。
・夏芽でのハモグリガの被害部は本病の発生を助長するため、ハモグリガの防除を行い、被害枝は除去する。

●ミカンハダニ

予報の根拠

・７月中旬の巡回調査では、平均寄生葉率は8.3%（平年7.9%）と平年並であった。ただし、一部では多発園地も見受けられた。
・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生を特には助長しない。

【なし】

<生育の概況等>

生育は地域により異なり（数日遅い～数日早い）、果実の肥大は平年並～やや良いが、肥大が遅れている地域もある。

●ハダニ類

予報の根拠

・７月下旬の巡回調査では、平均寄生葉率は1.7%（平年2.9%）と平年より少なかった。
・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

防除対策

・発生園地では収穫前日数に注意して防除を行う。
・葉当たり雌成虫密度１～２頭（寄生葉率20～40%）が防除の目安である。

●ナシヒメシンクイ

予報の根拠

・７月下旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年平均被害果率0.02%）。
・浜松市内におけるフェロモントラップへの誘殺数は、平年より多く推移している。
・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・例年８月は成虫の発生が多いため、無袋栽培園では収穫時期に注意し、防除を行う。なお、誘殺データは静岡県病害虫防除所ホームページ「害虫誘殺グラフ」を参照する。

【かき】

<生育の概況等>

生育は平年並の地域が多く、着果量は地域により異なっている（少ない～多い）。

●フジコナカイガラムシ

予報の根拠

・７月下旬の巡回調査では、平均寄生果率は0.3%（平年0.7%）と平年より少なかった。
・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・発生がみられるほ場では直ちに防除する。なお、本種は果実とへたの間に寄生しており薬剤が届きにくいため、丁寧に散布を行う。

●ハマキムシ類（チャハマキ、チャノコカクモンハマキ）

予報の根拠

・７月下旬の巡回調査では、平均被害果率0.2%（平年0.6%）と平年よりやや少なかった。
・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・地域の予察灯やフェロモントラップにおける成虫の誘殺状況に注意し、適期に防除する。なお、誘殺データは静岡県病害虫防除所ホームページ「害虫誘殺グラフ」を参照する。

【果樹全般】

●果樹カメムシ類（チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ）

予報の根拠

・県内４か所の予察灯における７月１～20日の合計誘殺数の平均は、88.6頭（平年209頭）と平年より少なかった。なお、本虫の内訳は、チャバネアオカメムシが49.5頭（平年155頭）、ツヤアオカメムシが18.3頭（平年17.6頭）、クサギカメムシが20.8頭（平年36.3頭）であった。

・県内６か所のフェロモントラップにおける７月１～20日の合計誘殺数の平均は、352頭（平年318頭）と平年よりやや多かった。なお、本虫の内訳は、チャバネアオカメムシが338頭（平年310頭）、ツヤアオカメムシが4.9頭（平年4.7頭）、クサギカメムシが9.8頭（平年3.0頭）であった。

・ヒノキ・スギ球果の着果量（指数）は、県平均7.1（平年4.4）と平年より多かった。なお、本虫は球果を餌として増殖するため、着果量が多いと本虫は増えやすくなる。

・ヒノキ・スギ球果における本虫の平均寄生数は、10結果枝あたり6.3頭（平年2.3頭）と平年より多かった。

・７月中下旬のヒノキ球果における球果１個あたりの本虫の吸汁痕数は、平均1.4（平年1.3）と平年並であった。なお、ヒノキ球果における吸汁痕数が25を超えると、本虫はヒノキから離脱し、餌を求めて果樹園に飛来するとされている。

・以上をまとめると、平年に比べて、予察灯への誘殺数はやや少なく、フェロモントラップへの誘殺数はやや多く、ヒノキ・スギ着果量は多く、ヒノキ・スギでの寄生数は多く、ヒノキ球果での吸汁痕数は平年並であった。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本虫の発生を助長する。

・１か月予報を加味すると、８月の果樹園への成虫飛来数は平年より多いと予想される。

防除対策

・ほ場での発生状況をよく観察し、発生が見られたら速やかに地域一斉に防除を行う。特に、ヒノキ、スギに近い果樹園では飛来しやすいため注意する。

・ヒノキ球果での本虫吸汁痕数をもとにした予測式（畑、2003）によるヒノキからの離脱予測日（果樹園への飛来予測日）は、９月５～10日頃（地域により異なる）と予想される。ただし、吸汁痕数が最も多い地点での飛来予測日は８月29日頃と予想される。また、高温等により本虫が急増し、ヒノキ・スギ球果を吸い尽くすと、新たな餌を求めて果樹園へ早期に飛来する可能性もあるため注意する。

・静岡県病害虫防除所ホームページ「害虫誘殺グラフ」では、本虫に関する各種情報（予察灯及びフェロモントラップにおける発生状況、ヒノキ・スギ球果の着果量、球果における寄生数、ヒノキ球果での吸汁痕数、果樹園への飛来予測日等）を随時提供しているので参照する。

【茶】

＜生育の概況等＞

７月中下旬の巡回調査時では、三番茶芽が生育中の茶園と、二番茶後に浅刈りを行った茶園が多く認められた。また、芽の生育も茶園によりばらつきがみられた。防除員からの情報では生育は平年並～やや遅れている茶園が多かった。

●炭疽病

予報の根拠

・７月中下旬の巡回調査では、平均発病葉数は17.5葉/1.25㎡（平年15.5葉/1.25㎡）と平年並であった。

・本病の感染には新芽生育時に10時間以上の濡れが必要である。１か月予報では、気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並のため、本病の発生を特には助長しない（分生子の発芽適温22～27℃）。

防除対策

・新芽開葉期に半日以上続く降雨があった場合は、早めに防除を行う。なお、萌芽期～１葉開葉期には予防剤（ダコニール1000、フロンサイドSCなど）を使用することでDMI剤の連用を可能な限り避ける。

●輪斑病

予報の根拠

・７月中下旬の巡回調査では、平均発病葉数は9.9葉/1.25㎡（平年18.8葉/1.25㎡）と平年より少なかった。

・本病の発病は25℃以上の高い気温が好適である。１か月予報では、気温は平年より高いため、本病の発生を助長する。なお降雨の多少は本病の発生程度に影響しない。

防除対策

・摘採や整枝によってできた傷口が発病を助長するため、常発園では、整枝等の作業を行った際には、翌日までに薬剤による防除を行う。

●新梢枯死症

予報の根拠

・７月中下旬の巡回調査では、平均発症枝数は0.9枝/1.25㎡（平年2.0枝/1.25㎡）と平年より少なかった。なお、本症状の原因として輪斑病菌が関与しているものは半数程度であることが判明しており、残りは多雨による水腐れや高温等による生理的な要因と考えられる。

・１か月予報では、気温は平年より高いため、本症状の発生を助長する。

防除対策

・三番茶芽の萌芽期から生育期に、２回程度薬剤を散布する。なお、QoI剤は、耐性菌が発生しやすいので同一薬剤として扱い、連用を避ける。

●カンザワハダニ

予報の根拠

・７月中下旬の巡回調査では、樹冠面での平均寄生葉率は1.0%（平年0.5%）と平年より多かった。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・降水量が少なく推移すると多発する恐れがあるため、茶園を観察して発生に注意し、早期防除に努める。

●チャハマキ、チャノコカクモンハマキ

予報の根拠

・７月中下旬の巡回調査では、平均寄生虫数はチャハマキが0.08頭/1.25㎡（平年0.65頭/1.25㎡）、チャノコカクモンハマキが0.02頭/1.25㎡（平年0.54頭/1.25㎡）で、両種ともに平年より少なかった。

・予察灯及びフェロモントラップにおける第１世代成虫誘殺数は、平年並の調査地点が多かった。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

・本年は第１世代成虫発生時期が平年並～早かった。このため、第２世代成虫発生盛期は平年並～早い見込みで、第３世代幼虫の発生時期は平年並～早いことが予想される。

防除対策

・地域の予察灯やフェロモントラップでの成虫の誘殺状況に注意して適期防除を行う。なお成虫の誘殺数データは静岡県病害虫防除所ホームページ「害虫誘殺グラフ」で提供している。

●チャノホソガ

予報の根拠

・７月中下旬の巡回調査では、平均巻葉数は0.6葉/1.25㎡（平年1.1葉/1.25㎡）と平年より少なかった。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが気温は平年より高いため、高温により本種の発生はあまり助長されない。

防除対策

・新芽生育期と成虫発生期が合致すると発生が多くなる。

・二番茶後に浅刈りした茶園が多く、そのような茶園では新芽の生育時期が例年とは異なる。そのため、地域の予察灯やフェロモントラップにおける誘殺虫数の推移に注意し、成虫の発生盛期と新芽の生育時期が合致する場合は、新芽への産卵状況に注意し、適期防除に努める。なお成虫の誘殺数データは静岡県病害虫防除所ホームページ「害虫誘殺グラフ」で提供している。

●チャノキイロアザミウマ

予報の根拠

・７月中下旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は17.6頭/4カ所（平年11.0頭/4カ所）と平年よりやや多かった。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・例年、８月の新芽生育期は発生が増加するので、新芽の萌芽から開葉期に防除を実施する。また、二番茶摘採後に浅刈りした茶園では、新芽の生育時期が通常の茶園とは異なるので、新芽の生育状況に注意し、新芽萌芽から生育期に防除を実施する。

●チャノミドリヒメヨコバイ

予報の根拠

・７月中下旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は2.4頭/4カ所（平年2.8頭/4カ所）と平年並だった。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが気温は平年より高いため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

・近年、８月の発生量は７月に比べ同等かやや少ない傾向である。ただし、新芽生育期は発生が増加するので、新芽の開葉期に防除を実施する。また、二番茶摘採後に浅刈りした茶園では、新芽の生育時期が通常の茶園とは異なるので、新芽の生育状況に注意し、新芽開葉期に防除を実施する。

●ヨモギエダシャク

予報の根拠

・７月中下旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は0.16頭/4カ所（平年0.11頭/4カ所）と平年並だった。また、茶業研究センターの予察灯における第１世代成虫の誘殺数は平年並だった。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・例年８月中旬頃から予察灯への成虫誘殺数が増加する。茶園内をよく観察し、薬剤感受性の高い若齢幼虫の時期に防除を行う。

●クワシロカイガラムシ

予報の根拠

・７月中下旬の巡回調査では、平均寄生株率は0.4%（平年0.8%）と平年より少なかった。

・アメダスの気温データに基づく茶業研究センター（菊川市）の第３世代予想ふ化最盛日は、７月30日の計算によると平年より12日早い９月１日と予想される。

防除対策

・地域のふ化最盛予想時期に、茶園内のふ化状況をよく観察し、適期防除を行う。アメダス地点の予想ふ化最盛日については静岡県病害虫防除所ホームページ「防除時期等予測」で提供している。なお、７月に防除した茶園では、系統の異なる薬剤を使用して防除する。

＜その他の病害虫＞

●マダラカサハラハムシ

・一番茶時期に被害が発生したような常発地域では、新成虫が発生する８月中下旬頃の防除を徹底する。薬剤については、「農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準」を参照する。

【いちご】

<その他の病害虫>

●炭疽病

・本病の生育適温は25℃前後であり、高温・多湿条件下で多発生しやすい。

・発病株からその周囲へと伝染しやすいため、ほ場の見回りを徹底し発病株や発病が疑われる株の早期発見に努める。発病株はビニール袋に入れほ場外へ出し、殺菌処理をしてから残さを処分する。

・本病原菌は水滴の飛散によって伝染するため、株元かん水など水の跳ね返りを防ぐ形でかん水を行う。また、薬剤散布も同様の伝染条件を作り出す可能性があるため、殺虫剤のみの散布は注意して行うこと。

・発病株や発病が疑われる株は、定植苗には使用せず、ほ場へ持ち込まないこと。

・発病後は薬剤による治療が困難であるため、定期的な防除による予防を心がける。激しい雨や台風など水滴が飛散しやすい状況の前後、複株からの切り離しなど株を傷つけるような作業後は重点的に防除を行う。

・薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統（FRACコード）の異なる薬剤をローテーション散布する。

●うどんこ病

・７月以降、高温期は本病の生育が停滞し発生が終息したように見えるが、最高気温が30℃を下回りだすと再び生育し始め、発生が順次増加する。多発すると防除が困難になりやすいため、育苗中から予防防除を徹底し本ぼへの持ちこみを防ぐ。

●コガネムシ類

・予察灯における７月１～20日の誘殺数は、磐田市内２か所で平年並～やや多く、浜松市浜名区内１か所で平年より少なく推移している。

・成虫が苗床に産卵し、その幼虫が根を食害することで生育が妨げられて欠株となる。ポット育苗時や本ぼ定植前等に幼虫を対象として薬剤防除を実施する。

●ハダニ類

・発生がみられるほ場では、薬剤散布を行う。育苗期に防除を徹底し、ハダニ類を本ぼへ持ち込まないように注意する。

【きく（施設）】

<生育の概況等>

生育は平年より遅くなっている。

●黒斑病、褐斑病

予報の根拠

・７月中旬の巡回調査では、平均発病株率は0.8%（平年0.3%）と平年よりやや多かった。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが気温は平年より高いため、本病の発生を助長する（生育適温：黒斑病24～28℃、褐斑病20～26℃）。

防除対策

・本病は高温多湿によって発生が助長される。発生しやすい条件が続く場合は薬剤の予防散布を行う。

・発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に持ち出して処分する。

●アザミウマ類（クロゲハナアザミウマ、ミカンキイロアザミウマ）

予報の根拠

・７月中旬の巡回調査では、平均被害株率は21.8%（過去５年間の平均16.4%）と例年よりやや多かった。

・１か月予報では、気温は平年より高いため、アザミウマ類の増殖を助長する。

防除対策

・開花期のきくは特にミカンキイロアザミウマの被害を受けやすいため、蕾の膨らみ時から発生に注意する。

●ハダニ類

予報の根拠

・７月中旬の巡回調査では、平均被害株率は13.2%（過去５年間の平均3.5%）と例年より多かった。

・１か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

・ 蕾生が認められた場合は、少発生のうちに防除する。

・ ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、同一系統の薬剤の連用は避けるほか、気門封鎖剤も利用する。なお、気門封鎖剤は卵への効果が低く残効性が期待できないため、５日間隔程度で連続散布する。

【作物全般】

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

・県内３ヵ所（静岡市、御前崎市、磐田市）のフェロモントラップの調査によると、誘殺数は平年並～少なく推移している。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・初期発生に注意し若齢のうちに防除を行う。施設栽培では施設の開口部に防虫網を設置し侵入を防ぐ。なお、成虫の誘殺数データは静岡県病害虫防除所ホームページで提供している。

●オオタバコガ

予報の根拠

・フェロモントラップにおける誘殺数は、磐田市では平年よりやや少なく推移しており、浜松市のキク産地２ヶ所（中央区協和町及び伊佐地町）では平年より多く推移している。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並であるが、気温は高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・例年８～９月は発生が増加するため、被害の発生に注意し、初期防除に努める。

３　季節予報

●１か月予報　（東海地方　令和６年７月２５日　名古屋地方気象台発表）

【予報期間】　７月２７日から８月２６日

【予想される向こう１か月の天候】

特に注意を要する事項		期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。
向こう１か月	天候	平年に比べ晴れの日が多いでしょう。
	気温	平均気温は、高い確率８０％です。
	日照時間	日照時間は、平年並または多い確率ともに４０％です。
１週目	気温	１週目は、高い確率８０％です。
２週目	気温	２週目は、高い確率８０％です。
３～４週目	気温	３～４週目は、高い確率７０％です。

【確　率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多％
１か月	気温	１０	１０	８０
１か月	降水量	３０	４０	３０
１か月	日照時間	２０	４０	４０
１週目	気温	１０	１０	８０
２週目	気温	１０	１０	８０
３～４週目	気温	１０	２０	７０

【予報の対象期間】

１か月　：　７月２７日（土）～　８月２６日（月）

１週目　：　７月２７日（土）～　８月　２日（金）

２週目　：　８月　２日（土）～　８月　９日（金）

３～４週目　：　８月　９日（土）～　８月２３日（金）

※ 利用上の注意

・気温・降水量は「低い（少ない）」「平年並」「高い（多い）」の３つの階級で予報します。階級の幅は、1991～2020年の30年間における各階級の出現率が等分（それぞれ33%）となるように決めております。（気候的出現率と呼びます）。

・曇りや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い（少ない）場合は「平年に比べて多い（少ない）」、また平年の日数と同程度に多い（少ない）場合には「平年と同様に多い（少ない）」と表現します。なお、単に多い（少ない）と表現した場合には対象期間の２分の１より多い（少ない）ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病害虫防除所　〒438-0803　磐田市富丘678-1
TEL 0538-36-1543　FAX 0538-33-0780
ＵＲＬ　https://www.pref.shizuoka.jp/sangyoshigoto/norinjimusho/1056558/boujo/index.html

病害虫発生予察情報（９月予報）

令和６年８月28日
静岡県病害虫防除所長

１　予報概況

作物名	病害虫名	予報（９月の県平均平年値）	予報の根拠
稲	いもち病（穂いもち）	発生量：少（発病株率 0.1%）	８月上中旬の葉いもち発生量：少 （－） ８月上中旬の葉いもち発生量：少（発生なし）（－） 気象予報：気　温：高い （－） 降水量：多い （＋）
	紋枯病	発生量：やや多（発病株率 11.3%）	８月上中旬発生量：やや少 （－） 気象予報：気　温：高い （＋） 降水量：多い （＋）
	トビイロウンカ	発生量：少（寄生数 0.7 頭／株）	８月上中旬発生量：少 （－） ８月の成虫誘殺数：少（誘殺なし）（－） 気象予報：気　温：高い （＋） 降水量：多い （－）
	斑点米カメムシ類	発生量：多	８月上中旬発生量：多 （＋） ８月の成虫誘殺数：並～多 （±～＋） 気象予報：気　温：高い （＋） 降水量：多い （－）
	コブノメイガ	発生量：多（被害株率 6.2%）	８月上中旬発生量：多 （＋） 気象予報：気　温：高い （＋） 降水量：多い （－）
温州みかん	かいよう病	発生量：多（発病度（果）0.02）	８月発生量：多 （＋） 気象予報：気　温：高い （＋） 降水量：多い （＋）
	黒点病	発生量：多（発病度 1.0）	８月発生量：多 （＋） 気象予報：気　温：高い （＋） 降水量：多い （＋）
	ミカンハダニ	発生量：やや多（寄生葉率 2.0%）	８月発生量：やや多 （＋） ただし、東部：多 （＋） 気象予報：気　温：高い （＋） 降水量：多い （－）
	チャノキイロアザミウマ	発生量：並（寄生果率 0.1%）	８月発生量：やや少 （－） 気象予報：気　温：高い （＋） 降水量：多い （±）
中晩柑類	かいよう病	発生量：多（発病度（果）0.5）	８月発生量：多 （＋） 気象予報：気　温：高い （＋） 降水量：多い （＋）
かき	ハマキムシ類	発生量：並（被害葉率 1.2%）	８月中旬発生量：やや少 （－） フェロモントラップ誘殺数：並～やや少（±～－） 気象予報：気　温：高い （＋） 降水量：多い （－）

作物名	病害虫名	予報（９月の県平均平年値）	予報の根拠
果樹全般	果樹カメムシ類	飛来数：多	予察灯誘殺数：多 （＋） フェロモントラップ誘殺数：多 （＋） ヒノキ・スギ着果量：多 （＋） ヒノキ寄生数：多 （＋） ヒノキ球果吸汁痕数：多 （＋） 気象予報：気　温：高い （＋） 降水量：多い （±）
茶	炭疽病	発生量：やや少（病葉数 29.1 葉／1.25㎡）	８月発生量：少 （－） 気象予報：気　温：高い （±） 降水量：多い （＋）
	チャノキイロアザミウマ	発生量：多（叩き落とし虫数 4.8 頭／4 カ所）	８月発生量：多 （＋） 気象予報：気　温：高い （＋） 降水量：多い （±）
	チャノミドリヒメヨコバイ	発生量：並（叩き落とし虫数 1.1 頭／4 カ所）	８月発生量：やや少 （－） 気象予報：気　温：高い （＋） 降水量：多い （±）
	チャノホソガ	発生量：少（巻葉数 1.0 葉／1.25㎡）	８月発生量：少 （－） 気象予報：気　温：高い （±） 降水量：多い （±）
	ヨモギエダシャク	発生量：やや多（叩き落とし虫数 0.1 頭／4 カ所）	８月発生量：並 （±） 気象予報：気　温：高い （＋） 降水量：多い （±）
	カンザワハダニ	発生量：多（寄生葉率 2.7%）	８月発生量：多 （＋） 防除員からの報告：やや多～多 （＋） 気象予報：気　温：高い （＋） 降水量：多い （－）
	クワシロカイガラムシ	発生量：少（寄生株率 1.7%） 発生時期：やや早い	８月発生量：少 （－） 気象予報：気　温：高い （±） 降水量：多い （－）
ねぎ（白ねぎ）	疫病	発生量：やや少（発病株率1.1%）	８月中旬発生量：少（発生なし）（－） 気象予報：気　温：高い （＋） 降水量：多い （±）
	黒斑病・葉枯病	発生量：やや少（発病株率4.7%）	８月中旬発生量：少（発生なし）（－） 気象予報：気　温：高い （＋） 降水量：多い （＋）
	シロイチモジヨトウ	発生量：多（寄生株率1.6%）	８月中旬発生量：多 （＋） 気象予報：気　温：高い （＋） 降水量：多い （±）
	ネギハモグリバエ	発生量：やや少（寄生株率 40.6%）	８月中旬発生量：少 （－） 気象予報：気　温：高い （＋） 降水量：多い （±）
	ネギアザミウマ	発生量：多（寄生株率 13.5%）	８月中旬発生量：多 （＋） 気象予報：気　温：高い （＋） 降水量：多い （±）

作物名	病害虫名	予報（９月の県平均平年値）	予報の根拠
いちご	炭疽病	発生量：多（10 月発病株率 1.9%）	８月上旬発生量：並 （±） 気象予報：気　温：高い （＋） 降水量：多い （＋）
	うどんこ病	発生量：少（10 月発病株率 1.4%）	８月上旬発生量：少（発生なし）（－） 気象予報：気温：高い （－） 降水量：多い （±）
	ハダニ類	発生量：多（10 月寄生株率 12.9%）	８月上旬発生量：並 （±） ただし、東部・中津：多 （＋） 気象予報：気　温：高い （＋） 降水量：多い （±）
	ハスモンヨトウ	発生量：やや多（10 月寄生株率 0.6%）	８月上旬発生量：並 （±） ８月誘殺数：並～やや少 （±～－） 気象予報：気　温：高い （＋） 降水量：多い （±）
作物全般	オオタバコガ	発生量：やや多	フェロモントラップ誘殺数：並～やや少（±～－） 気象予報：気　温：高い （＋） 降水量：多い （－）

表の見方について

- 予報の発生量は平年（静岡県の過去 10 年間）との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の５段階で示しています。
- 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年（静岡県の過去 10 年間）との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の５段階で示しています。
- 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況（調査時期と発生量）、気象庁の１か月予報（気温と降水量）を記入しています。その状況が多発要因の場合は（＋）、少発要因の場合は（－）を示し、＋－を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

農薬情報はこちらで検索！

静岡県農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準

https://www.s-boujo.jp/

静岡県病害虫防除所HPが新しくなりました。

静岡県病害虫防除所 HP

https://www.pref.shizuoka.jp/sangyoshigoto/norinimusho/1058658/boujo/index.html

２　予報の根拠と防除対策

【稲】

＜生育の概況等＞

巡回時の生育は早期栽培が概ね乳熟期～成熟期、普通期栽培が概ね出穂期～乳熟期であった（調査期間：８月８～16 日）。病害虫防除員からのアンケート調査によると、生育は平年より早い傾向。

◎いもち病（葉いもち）

予報の根拠

- ８月上中旬の巡回調査では、県全体の葉いもちの平均発病株率は 0.5%（平年 2.3%）と平年より少なかった。
- ８月上中旬の巡回調査では、穂いもちの発病は確認されなかった（平年平均発病株率 0.04%）。
- 本病は葉いもちを主要な伝染源とし、出穂以降、穂の各部に付着した病原菌により発病する。低温および降雨は本病の発生を助長する。１か月予報では、降水量は平年より多いが気温は平年より高いため、本病の発生を特には助長しない。

防除対策

- 育苗箱処理剤の残効は出穂期頃までなので、効果の切れた時期以降で、本病の発生に適した雲雨天で日照不足が続く場合は注意が必要である。
- 葉いもちの急性型病斑（病斑周辺部に褐色部分が少なく、病斑が暗緑色あるいはねずみ色）が多いときには、速やかに薬剤散布をする。
- 現在、上位葉に発生している葉いもちは、穂いもちの発生を助長する。そのため、葉いもちが多発しているほ場では、穂いもちの防除を適期（穂ばらみ期～穂揃期）に２回行う。
- さらに多発が予想される場合は穂揃期に追加防除を行う。
- 常発地では適期に薬剤の予防散布を行う。
- 本県では MBI-D 剤耐性いもち病菌が発生している。また、近年、他県では QoI 剤耐性いもち病菌が発生し問題となっており、本県でも発生が懸念されるため、耐性菌の発生リスクが高い薬剤を使用する場合は、連用を避けるなど適切に使用する。詳細は日本植物病理学会殺菌剤耐性菌研究会ホームページ「殺菌剤使用ガイドライン」を参照。

◎紋枯病

予報の根拠

- ８月上中旬の巡回調査では、平均発病株率は 5.2%（平年 6.7%）と平年よりやや少なかった。
- １か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する（本病は生育適温 28～32℃と高温を好む）。

防除対策

- 水田等で越冬した菌核が一次伝染源となるため、前年発生がみられたほ場では発生しやすい。そのようなほ場では発生に注意し、発生が見られた場合は速やかに薬剤防除を行う。
- 病斑が上位葉鞘まで上がると減収の要因になる。特に過繁茂となっているほ場では多発しやすいため、そのようなほ場では今後の発生に注意する。

●トビイロウンカ

予報の根拠

・８月上中旬の巡回調査では、平均寄生数が０.０２頭（平年０.０５頭／株）と平年より少なかった。

・県内４ヶ所の予察灯では、８月は第４半旬まで誘殺が確認されておらず、平年より少なく推移している。

・１か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の増殖をやや助長する。

防除対策

・９月の気温が高い場合には急増することがあるので注意する。葉色に注意し、水田内で坪状に葉が黄化している場合は株元を観察し、成幼虫の寄生が確認された場合は直ちに薬剤防除を行う。

●斑点米カメムシ類（イネカメムシ、アカスジカスミカメ、ホソハリカメムシ、クモヘリカメムシ、ミナミアオカメムシ等）

予報の根拠

・８月上中旬の水田におけるすくい取り調査では、平均捕獲数は２.３頭／３０回振り（平年１.５頭）と平年より多かった。

・県内４ヶ所の予察灯における８月１～15日の合計誘殺数は、アカヒゲホソミドリカスミカメ、アカスジカスミカメおよびイネカメムシの誘殺数は平年並～多く推移しており、ミナミアオカメムシの誘殺数は平年並に推移している。なお、誘殺数データは静岡県病害虫防除所ホームページ「害虫誘殺グラフ」で提供している。

・１か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の増殖をやや助長する。

防除対策

・出穂後は、水田内のカメムシ類の発生に注意し、確認された場合は薬剤防除を実施する。

・穂揃期（成虫侵入期（すべての茎のうち80%の茎で穂が出た状態））とその７～10日後（幼虫ふ化期）の２回薬剤散布を行うと効果が高い。粒剤は出穂期に散布する。

・イネカメムシの発生が目立つ場合は、不粒対策として出穂期（成虫侵入期（すべての茎のうち50%前後の茎で穂が出た状態））に、斑点米対策に出穂期から７～10日後（幼虫ふ化期）に薬剤散布を行うと良い。

・薬剤感受性の低下を避けるため、作用機構分類コードを参照し、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。薬剤については、静岡県農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準を確認する。

・農林水産省の蜜蜂被害事例調査により、「蜜蜂被害は、水稲のカメムシを防除する時期に多く、水稲のカメムシ防除に使用した殺虫剤（農薬）を直接浴びたことが原因である可能性が高い」ことが報告されたため、養蜂家との情報共有を行う等、蜜蜂への影響に留意し防除を行う。なお、詳細は農林水産省ホームページを参照する。

●コブノメイガ

・８月上中旬の巡回調査では、平均被害株率は９.３%（平年２.４%）と平年より多かった。

・１か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の増殖をやや助長する。

・出穂期頃の水稲が加害されると登熟歩合が低下するので、成幼虫の発生状況を確認する。上位葉を幼虫が食害している場合は直ちに薬剤を散布する。成虫の発生ピークから７~10日後に相当する若齢幼虫期に薬剤を散布する。

●チャノキイロアザミウマ

予報の根拠

・８月の巡回調査では、平均寄生果率０.０３%（平年０.０６%）、果梗部被害度０.３（平年１.０）、果頂部被害度０（平年０.１）と、いずれも平年よりやや少なかった。

・１か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・アメダス気象データを用いた予測によると、今後の気温が平年並で推移した場合、各世代成虫の発生ピークは、第６世代で８月１４~２９日（既にピークを迎えた産地もある）、第７世代で８月３１～９月１９日、第８世代で９月２０日～１０月１８日と予想される（産地により発生時期が異なる）。なお、各地域における発生時期予測の詳細は、静岡県病害虫防除所ホームページ「防除時期等予測」を参照する。

・本種各世代において、飛来最盛日の１週間前～飛来最盛日までが薬剤防除適期である。

・普通温州園では寄生果率１０%を目安に防除を行う。

【中晩柑】

●かいよう病

予報の根拠

・８月の巡回調査では、果実の平均発病度は１.６（平年０.４）、葉の発病度は２.４（平年０.４）と平年より多かった。

・１か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

・病原細菌の生育適温は２０~３０℃であり、病斑から降雨の際に雨滴とともに飛散し感染する。

・台風などの強風を伴う降雨によって感染が著しく助長され、急激に多発する場合がある。台風の接近が増える時期となるため、気象情報とほ場の発生状況に注意し、感染拡大を防ぐよう降雨前の予防的な防除に重点を置く。

・ミカンハモグリガの被害部は本病の発生を助長するため、本種の防除を行う。

・発病枝は伝染源となるので、できるだけ除去する。特に発病した夏秋枝は除去する。

【かき】

<生育の概況等>

生育や果実の肥大は産地によりばらついている。また、日焼け果の発生が多い。

●ハマキムシ類

予報の根拠

・８月中旬の巡回調査では平均被害葉率は０.２%（平年０.５%）と平年よりやや少なかった。

・浜松市内のフェロモントラップにおける８月以降の誘殺数は、平年並～やや少なく推移している。

・１か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・地域の予察灯やフェロモントラップにおける成虫の誘殺状況に注意し、適期に防除する。なお、誘殺データは静岡県病害虫防除所ホームページ「害虫誘殺グラフ」を参照する。

【温州みかん】

<生育の概況等>

生育は数日早く、果実の肥大は平年並～やや悪い産地が多い。また、日焼け果の発生が多い。

●かいよう病

予報の根拠

・８月の巡回調査では、果実の発病度は０.３８（平年０.０２）、葉の発病度は０.５（平年０.１）と平年より多かった。

・１か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

・病原細菌の生育適温は２０~３０℃であり、病斑から降雨の際に雨滴とともに飛散し感染する。

・台風などの強風を伴う雨によって感染が著しく助長され、急激に多発する場合がある。台風の接近が増える時期となるため、気象情報とほ場の発生状況に注意し、感染拡大を防ぐよう降雨前の予防的な防除に重点を置く。

・６月以降の薬剤散布は中晩柑類に比べ薬害が出やすいため注意する。

・ミカンハモグリガの被害部は本病の発生を助長するため、本種の防除を行う。

・発病枝は伝染源となるので、できるだけ除去する。特に発病した夏秋枝は除去する。

●黒点病

予報の根拠

・８月の巡回調査では、平均発病度は６.４（平年０.９）と平年より多かった。

・１か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

・２０~２７℃の水滴中で胞子が発芽し、葉や果実に感染して黒点が出来る。降雨日の最低気温が２２℃以上になると容易に感染する。

・防除実施の間隔は、２５~３０日または累積降水量２５０~３００mmを目安とする。アメダスの気象データなどから栽培地域での累積降水量を確認し防除を実施すること。

・９月以降の後期感染を防止するため、台風の前など、適宜防除を実施する。ただし、早生品種の防除は収穫前日数に注意して行うこと。

●ミカンハダニ

予報の根拠

・８月の巡回調査では、平均寄生葉率は７.４%（平年５.５%）と平年よりやや多かった。ただし、地域別では、東部地域で１５.０%（平年４.７%）、中部地域で６.８%（平年８.２%）、西部地域で０.３%（平年４.５%）と東部地域での発生が多かった。

・１か月予報では、気温は平年より高いが、降水量は平年より多いため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

・着色期以降に発生すると果実が着色不良となり商品価値が低下するため、発生がみられた場合は薬剤防除を行う。

<その他の病害虫>

●フジコナカイガラムシ

・８月中旬の巡回調査では、本種の寄生は認められなかった（平年の平均寄生果率１.０%）。

・本種は果実とその間に寄生しており薬剤が届きにくいため、丁寧に散布を行う。

【果樹全般】

●果樹カメムシ類（チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ）

予報の根拠

・県内４か所の予察灯における８月１～２０日の合計誘殺数の平均は、１５８６頭（平年１５２頭、平年比１０.４倍）と平年より多かった。なお、本虫の内訳は、チャバネアオカメムシが９２６頭（平年３６６頭）、ツヤアオカメムシが３２５頭（平年６６.８頭）、クサギカメムシが３３５頭（平年１２１頭）であった。

・県内６か所のフェロモントラップにおける８月１～２０日の合計誘殺数の平均は、２９５頭（平年１６７頭、平年比１.８倍）と平年より多かった。なお、本虫の内訳は、チャバネアオカメムシが２９２頭（平年１５９頭）、ツヤアオカメムシが０.８頭（平年５.８頭）、クサギカメムシが２.９頭（平年２.１頭）であった。

・ヒノキ・スギ球果の着果量（指数）は、県平均７.１（平年４.４、平年比１.６倍）と平年より多かった。なお、本虫は球果を餌として増殖するため、着果量が多いと本虫は増えやすくなる。

・８月のヒノキ球果における平均寄生数は、１０結果枝あたり１３.１頭（平年３.１頭、平年比４.２倍）と平年より多かった。

・８月のヒノキ球果における球果１個あたりの本虫の吸汁痕数は、平均１５.２（平年１０.１、平年比１.５倍）と平年より多かった。なお、ヒノキ球果における吸汁痕数が２５を超えると、本虫はヒノキから離脱し、餌を求めて果樹園に飛来するとされている。

・果樹関係の病害虫防除員１８名からの報告によると、本虫の発生について９名が「多い」または「やや多い」と回答した。また、一部の果樹園で本虫の飛来を確認したとの情報が複数寄せられている。

・以上をまとめると、予察灯への誘殺数、フェロモントラップへの誘殺数、ヒノキ・スギ着果量、ヒノキでの寄生数、ヒノキ球果での吸汁痕数は、いずれも平年より多かった。

・１か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

・１か月予報を加味すると、９月の果樹園への成虫飛来数は平年より多いと予想される。

防除対策

・ヒノキ球果での本虫吸汁痕数をもとにした予測式（塚、2003）によるヒノキからの離脱予測日（果樹園への飛来予測日）は、９月５~１０日頃（地域により異なる）と予想される。ただし、吸汁痕数が最も多い地点での飛来予測日は８月２９日頃と予想される。また、高温等により本虫が急増し、ヒノキ・スギ球果を残し尽くすと、新たな餌を求めて果樹園へ早期に飛来する可能性もあるため注意する。

・本虫の飛来に細心の注意を払い、ほ場で少数でも発生を確認したら、本虫が集合フェロモンを放出し大量飛来を招く前に直ちに薬剤防除を行う。また、成虫の移動範囲は広いため、地域での一斉防除が効果的である。なお、ヒノキ・スギ林の隣接地域（特に中山間地）や台風・暴風雨後の園地では、急激に発生が増加する場合があるので注意する。

・静岡県病害虫防除所ホームページ「害虫誘殺グラフ」では、本虫に関する各種情報（予察灯及びフェロモントラップにおける発生状況、ヒノキ・スギ球果の着果量、球果における寄生数、ヒノキ球果での吸汁痕数、果樹園への飛来予測日等）を随時提供しているので参照する。

【茶】

＜生育の概況等＞

秋芽の生育は萌芽前の地域が多いが、茶園の管理によりばらつきがある。

●炭疽病

予報の根拠

・８月の巡回調査では、平均発病葉数は７.２葉/1.25 ㎡(平年 23.７葉/1.25 ㎡) と平年よりも少なかった。

・１か月予報では、気温は平年より高いが、降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する（分生子の発芽適温 22～27℃）。

防除対策

・本病の感染には、新芽生育期に降雨による胞子の飛散と 10 時間以上の葉の濡れが必要であり、本病の潜伏期間はおよそ 20 日と長い。秋芽生育初期に半日以上続く降雨があった場合には、早め（萌芽期～２葉期）に防除を行う。秋冬番茶を摘採する茶園で伝染源が多いほ場では、速やかに感染後の有効期間が長い浸透性殺菌剤を散布する。一方、生育中期以降に降雨があった場合は、たとえ感染しても秋冬番茶の摘採や、秋の整枝作業で、新芽の上部は症状が出る前に刈られるので、防除の必要はない。

●チャノキイロアザミウマ

予報の根拠

・８月の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は 23.３頭/4 カ所（平年 9.３頭/4 カ所）と平年より多かった。

・１か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

防除対策

・９月に秋冬番茶を摘採する茶園では、秋芽の萌芽期～開葉初期に防除を行う。

●チャノミドリヒメヨコバイ

予報の根拠

・８月の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は 0.８頭/4 カ所（平年 0.９頭/4 カ所）と平年よりやや少なかった。

・１か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

防除対策

・９月に秋冬番茶を摘採する茶園では、秋芽の萌芽期～開葉初期に防除を行う。

●チャノホソガ

予報の根拠

・８月の巡回調査では、平均巻葉数は 0.２葉/1.25 ㎡（平年 1.１葉/1.25 ㎡）と平年より少なかった。

・１か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、発生を特には助長しない。

防除対策

・新芽生育期と成虫発生期が合致すると発生が多くなる。

・地域の予察灯やフェロモントラップにおける誘殺虫数の推移や新芽への産卵状況に注意し、秋冬番茶を摘採する茶園では適期防除に努める。なお成虫の誘殺数データは静岡県病害虫防除所ホームページ「害虫誘殺グラフ」で提供している。

●ヨモギエダシャク

予報の根拠

・８月の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は 0.１頭/４カ所（平年 0.１頭/4 カ所）と平年並だった。

・１か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

防除対策

・平年は９月に幼虫の発生が見られる。茶園内で局所的に発生するので茶園をよく観察し、薬剤感受性の高い若齢幼虫の時期に防除を行う。

●カンザワハダニ

予報の根拠

・８月の巡回調査では、樹冠面の平均寄生葉率は 10.０%（平年 3.３%）と平年より多かった。また、報告のあった防除員 12 名中８名が、多あるいはやや多の回答だった。

・１か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高い。茶園の乾燥が続くと、天敵のカブリダニ類の増殖が抑制され、本種の発生が助長される恐れがある。

防除対策

・９月に秋冬番茶を摘採する茶園や、発生の認められている茶園では、天敵への影響が少ない薬剤を選択し、直ちに防除を行う。

・降雨が少ない場合は急激に増殖する恐れがある。茶園の発生に注意し、早期に防除を実施する。

●クワシロカイガラムシ

予報の根拠

・８月の巡回調査では、平均寄生株率は２.８%（平年 5.５%）と平年より少なかった。

・１か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、発生を特には助長しない。

・アメダスの気温データに基づく茶業研究センター（菊川市）の第３世代予想ふ化最盛日は、８月 27 日の計算によると平年より４日早い９月８日と予想される。

防除対策

・地域のふ化最盛予想時期に、茶園内のふ化状況をよく観察し、適期防除を行う。アメダス地点の予想ふ化最盛日については静岡県病害虫防除所ホームページ「害虫誘殺グラフ」で提供している。なお、７月に防除した茶園では、系統の異なる薬剤を使用して防除する。

＜その他の病害虫＞

●褐色円星病

・本病は、春先になって葉果が始まってからの防除では効果がない。一番茶摘採期に発生の多かった茶園や二番茶残葉に譲斑症状が多数見られる茶園では、秋芽の生育期～硬化期に必ず１～２回防除する。

●炭疽病

・つゆひかり等の感受性品種では、春先に発病して枯死した枝や茶葉内に病原細菌が残存して越夏している。この菌が秋以降、台風の風雨による傷などで増殖し、冬の発病につながるので、台風の通過前後に薬剤散布を実施し、菌密度を下げておく。

●チャノホコリダニ

・８月中旬～９月にかけて乾燥が続くと、秋芽にチャノホコリダニが多発することがある。秋冬番茶を摘採する茶園では、発生に注意し、早めに防除する。

【ねぎ】

＜生育の概況等＞

生育は平年並で推移している。

●疫病

予報の根拠

・８月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率 0.04%）。

・１か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する（病原菌生育適温 28～30℃）。

防除対策

・多湿な環境で発生が多いため、例年発生が認められるほ場では、溝を切るなどしてほ場排水を良くする。

・窒素肥料の多用は本病を助長するため、施用量に気をつける。

●黒斑病・葉枯病

予報の根拠

・８月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率 3.5%）。

・１か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

・肥料切れや草勢の衰えは発病を助長するので、適切に施肥を行う。

・風ずれやネギアザミウマの食害は本病の発生を助長するため、防風ネットの設置やアザミウマの防除に努める。

・薬剤防除は、予防散布または発病初期の防除に努める。

●シロイチモジヨトウ

予報の根拠

・８月中旬の巡回調査では、平均寄生株率 4.9%（平年 1.4%）と平年よりも多かった。

・１か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

防除対策

・例年９月に発生が増加することから、ほ場をよく観察し、薬剤感受性が高い若齢幼虫のうちに防除する。

・すでに発生が増加しているほ場では、早めに薬剤散布を行う。

●ネギハモグリバエ

予報の根拠

・８月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は 8.6%（平年 28.0%）と平年より少なかった。

・１か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

防除対策

・新系統の発生により、葉が真っ白くなる被害が散見されている。多発すると生育が遅れるため、本種の発生に注意し早期に防除を行う。

●ネギアザミウマ

予報の根拠

・８月中旬の巡回調査では、平均寄生株率 31.4%（平年 22.0%）と平年より多かった。

・１か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

防除対策

・多発すると生育が遅れるため、発生が増加する前に防除を行う。すでに、発生が増加しているほ場では早めに防除を行う。

・本種はネギえそ条斑病の原因となるアイリス黄斑ウイルス（IYSV）を伝搬する。罹病株はタマネギやエシャレット等、他のネギ類への伝染源となるため、見つけ次第ほ場の外に持ち出し、土中に埋める等の処分をする。

【いちご】

＜生育の概況等＞

苗の生育はほぼ平年並～やや遅く推移している。

●炭疽病

予報の根拠

・８月上旬の育苗ほの巡回調査では、平均発病株率は１.３%（平年 1.７%）と平年並であった。ただし、一部ほ場では多発していたため、注意する。

・１か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

・本病の生育適温は 25℃前後であり、高温・多湿条件下で多発生しやすい。

・発病株からその周囲へと伝染しやすいため、ほ場の見回りを徹底し発病株や発病が疑われる株の早期発見に努める。発病株はビニール袋に入れほ場外へ出し、穂苗処理をしてから残さを処分する。

・本病原菌は水滴の飛散によって伝染するため、株元潅水など水の跳ね返りを防ぐ形で潅水を行う。また、薬剤散布も同様の伝染条件を作り出す可能性があるため、殺虫剤のみの散布は注意して行うこと。

・発病株や発病が疑われる株は、定植苗には使用せず、本ぼへ持ち込まないこと。

・発病後は薬剤による治癒が困難であるため、定期的な防除による予防を心がける。激しい雨や台風など水滴が飛散しやすい状況の前後、親株からの切り離しなど株を傷つけるような作業後は重点的に防除を行う。なお、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行うこと。

●うどんこ病

予報の根拠

・８月上旬の育苗ほの巡回調査では、発生は認められなかった(平年平均発病株率 1.3%）。

・１か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本病の発生を特には助長しない。

防除対策

・胞子の発芽適温は 20℃前後であるため高温期の発病は抑制される。そのため本病の発生が停滞、終息したように見えるが、９月以降の気温の低下とともに再び発生が増加するため注意する。

・６～７月に発生がみられたほ場では薬剤散布による予防を継続し、発病葉の除去を行う。病原を本圃に持ち込まぬよう、無病苗の定植に努める。

●ハダニ類

予報の根拠

・８月上旬の育苗ほの巡回調査では、平均寄生株率は 7.3%（平年 7.7%）と平年並であった。地域別では、東部地域で 12.8%（平年 3.4%）、中部地域で 0.4%（平年 14.6%）、中遠地域で 8.0%（平年 5.1%）と東部及び中遠地域での発生が多かった。

・１か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・育苗期の防除を徹底し、ハダニ類を本ぼへ持ち込まないよう注意する。

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

・８月上旬の育苗ほの巡回調査では、平均寄生株率は 0.2%（平年 0.1%）と平年並であった。

・県内３か所のフェロモントラップにおける８月１～20 日の誘殺数は、平年並～やや少なかった。

・１か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・初期発生に注意し、若齢のうちに防除する。施設の開口部に防虫網を設置し侵入を防ぐ。

<その他の病害虫>

●コガネムシ類

・県内３か所の予察灯における８月１～20 日の誘殺数は、平年より多く推移している。

・成虫が苗床に産卵し、その幼虫が根を食害することで生育が妨げられて欠株となる。ポット育苗時や本ぼ定植前等に幼虫を対象として薬剤防除を実施する。

・定植時には根への幼虫の寄生に注意し、本ぼへ幼虫を持ち込まないよう注意する。

【作物全般】

●オオタバコガ

予報の根拠

・県内３ヵ所のフェロモントラップにおける８月１日～20 日の誘殺数は磐田市富丘では平年並に推移しているが、浜松市中央区旭和町および中央区伊左地町では平年よりやや少なく推移している。

・１か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の増殖をやや助長する。

防除対策

・本種は幼虫の成長に伴い、植物体へ食入するため、薬剤の防除効果が低下するので、注場を観察し早期発見および初期防除に努める。

３　季節予報

●１か月予報　（東海地方　令和６年８月２２日　名古屋地方気象台発表）

【予報期間】　８月２４日から９月２３日

【予想される向こう１か月の天候】

特に注意を要する事項		２週目は、気温がかなり高くなる可能性があります。
向こう１か月	天候	平年と同様に晴れの日が多いでしょう。
	気温	平均気温は、高い確率８０％です。
	降水量	降水量は、多い確率５０％です。
１週目	気温	１週目は、高い確率５０％です。
２週目	気温	２週目は、高い確率８０％です。
３～４週目	気温	３～４週目は、高い確率７０％です。

【確　率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多％
１か月	気温	１０	１０	８０
１か月	降水量	２０	３０	５０
１か月	日照時間	４０	３０	３０
１週目	気温	１０	４０	５０
２週目	気温	１０	１０	８０
３～４週目	気温	１０	２０	７０

【予報の対象期間】

１か月　：　８月２２日（土）～　９月２３日（月）
１週目　：　８月２２日（土）～　８月２９日（金）
２週目　：　８月３０日（土）～　９月　６日（金）
３～４週目　：　９月　７日（土）～　９月２０日（金）

※ 利用上の注意

・気温・降水量は「低い（少ない）」「平年並」「高い（多い）」の３つの階級で予報します。階級の幅は、1991～2020 年の 30 年間における各階級の出現率が等分（それぞれ 33%）となるように決めてあります。（気候的出現率と呼びます）。

・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い（少ない）場合は「平年に比べて多い（少ない）」、また平年の日数と同程度に多い（少ない）場合には「平年と同様に多い（少ない）」と表現します。なお、単に多い（少ない）と表現した場合には対象期間の２分の１より多い（少ない）ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病害虫防除所　〒438-0803　磐田市富丘678-1
TEL 0538-36-1543　FAX 0538-33-0780
ＵＲＬ　https://www.pref.shizuoka.jp/sangyoshigoto/norinjimusho/f10586558/koujoAndex.html

病害虫発生予察情報（10月予報）

令和６年９月26日
静岡県病害虫防除所長

１　予報概況

作物名	病害虫名	予報 （10月の県平均平年値）	予報の根拠
稲	トビイロウンカ	発生量：少	９月中旬発生量：少　（－） ９月の成虫誘殺数：少　（－） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：多い　（－）
温州みかん	青かび・緑かび病	発生量：多 （落果発病数1.0果／樹）	気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：多い　（＋）
	黒点病	発生量：多 （発病度1.4）	９月上中旬発生量：多　（＋） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：多い　（＋）
	かいよう病	発生量：多 （発病度（果）0.04）	９月上中旬発生量：多　（＋） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：多い　（＋）
	ミカンハダニ	発生量：やや少 （寄生葉率1.4%）	９月上中旬発生量：少　（－） 但し、一部ほ場で多 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：多い　（－）
中晩柑類	かいよう病	発生量：多 （発病度（果）0.5）	９月上中旬発生量：多　（＋） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：多い　（＋）
果樹全般	果樹カメムシ類	飛来数：多	予察灯誘殺数：多　（＋） フェロモントラップ誘殺数：多　（＋） ヒノキ・スギ着果量：多　（＋） ヒノキ寄生数：多　（＋） ヒノキ球果吸汁痕数：多　（＋） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：多い　（±）
茶	チャハマキ	発生量：やや多 （寄生虫数0.5頭/1.25㎡）	９月上中旬発生量：並　（±） 但し、一部ほ場で多 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：多い　（±）
	チャノコカクモンハマキ	発生量：やや少 （寄生虫数0.3頭/1.25㎡）	９月上中旬発生量：少　（－） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：多い　（±）
	カンザワハダニ	発生量：少 （寄生葉率1.3%）	９月上中旬発生量：少　（－） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：多い　（－）

作物名	病害虫名	予報 （10月の県平均平年値）	予報の根拠
トマト	葉かび病・すすかび病	発生量：並 （発病株率11.6%）	９月中旬発生量：少　（－） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：多い　（＋）
	黄化葉巻病	発生量 黄化葉巻病：やや少 （発病株率1.0%）	９月中旬発生量：少　（－） ｼﾙｾｷｽｶｺﾅｼﾗﾐ類発生量：多　（＋） 気象予報：気　温：高い　（＋）
	タバココナジラミ	コナジラミ類：多 （寄生株率11.6%）	９月中旬発生量：多　（＋） 気象予報：気　温：高い　（＋）
だいこん	コナガ	発生量：やや多 （寄生株率0.1%）	９月ﾄﾗｯﾌﾟ捕獲数：並　（±） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：多い　（±）
ねぎ（白ねぎ）	黒斑病・葉枯病	発生量：やや少 （発病株率3.8%）	９月中旬発生量：少　（－） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：多い　（＋）
	ネギアザミウマ	発生量：並 （寄生株率12.8%）	９月中旬発生量：少　（－） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：多い　（±）
	シロイチモジヨトウ	発生量：多 （寄生株率1.2%）	９月中旬発生量：並　（±） ﾌｪﾛﾓﾝﾄﾗｯﾌﾟ誘殺数：多　（＋） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：多い　（±）
	ネギハモグリバエ	発生量：やや少 （被害株率44.5%）	９月中旬発生量：少　（－） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：多い　（±）
いちご	炭疽病	発生量：多 （発病株率1.9%）	８月上旬発生量：並　（±） ９月発生量：やや少～やや多　（－～＋） 気象予報：気　温：高い　（＋）
	ハダニ類	発生量：多 （寄生株率12.9%）	８月上旬発生量：並　（±） ただし、東部・中速：多　（＋） ９月発生量：並～やや多（±～＋） 気象予報：気　温：高い　（＋）
作物全般	ハスモンヨトウ	発生量：多	９月ﾄﾗｯﾌﾟ誘殺数：少～多　（－～＋） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：多い　（±）
	オオタバコガ	発生量：多	８月21日～９月20日の成虫誘殺数： 少～やや多（－～＋） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：多い　（±）

表の見方について

- 予報の発生量は平年（静岡県の過去10年間）との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の５段階で示しています。
- 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年（静岡県の過去10年間）との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の５段階で示しています。
- 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況（調査時期と発生量）、気象庁の１か月予報（気温と降水量）を記入しています。その状況が多発要因の場合は（＋）、少発要因の場合は（－）を示し、＋－を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

農薬情報はこちらで検索！

静岡県農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準

https://www.s-boujo.jp/

静岡県病害虫防除所HPが新しくなりました。

静岡県病害虫防除所HP

https://www.pref.shizuoka.jp/sangyoshigoto/norinjimusho/1058658/boujo/index.html

２　予報の根拠と防除対策

【稲】

◉トビイロウンカ

予報の根拠

・９月中旬の巡回調査では、本種の寄生は確認されなかった（平年0.65頭／株）。
・県内４カ所の予察灯における９月１～10日の誘殺数は平年よりやや少なく推移している。
・１か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

・気温が高い場合に急増することがある。被害や成虫の寄生を確認した場合は薬剤防除を実施する。

【温州みかん】

＜生育の概況等＞

生育は数日早く、果実の肥大は平年並の産地が多い。

◉青かび・緑かび病

予報の根拠

・１か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

・病原菌の生育適温は25～27℃である。土壌中に胞子の形で存在し、土ぼこりとともに果実表面に付着、傷口から感染する。台風などの強風雨は胞子が跳ね上がるため、樹上での発生を助長する。
・樹上果、摘果果実ともに発病果を放置すると胞子形成が進み発生が増加していく。ほ場の見回りを行い、発病果は発見し次第速やかにほ場外に持ち出して処分する。
・収穫時のハサミ傷や収穫コンテナに混入した枯れ枝や小石などによる傷は、感染を助長し貯蔵中の発病が増加する。果実の運搬や選果が手荒で果皮に傷が付く場合でも同様であるため、丁寧な収穫作業を行う。
・果実が過熟にならないよう適期に収穫し、雨の日や雨の翌日など果実に水滴が残っているようなときには収穫を避ける。

◉黒点病

予報の根拠

・９月上中旬の巡回調査では、平均発病度は7.3（平年1.0）と平年より多かった。
・１か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

・本病は風雨によって伝染し多雨は発生を助長するため、秋雨による果実への感染についても注意する。
・枯れ枝で胞子が作られるため、樹冠内部の枯れ枝やほ場の内外に放置された剪定枝、切株などが伝染源となる。本病は近年多発傾向であるため、伝染源の除去と処分を徹底しほ場内、周囲に放置しないこと。
・防除実施の間隔は、25～30日または累積降水量が250～300㎜を目安とする。アメダスの気象データなどから栽培地域での累積降水量を確認し防除を実施すること。
・後期感染を防止するため、台風の前など適宜防除を実施する。ただし、収穫前日数に注意すること。

●かいよう病

予報の根拠

・９月上中旬の巡回調査では、果実の発病度は0.47(平年0.02)と平年より多かった。

・１か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

・台風などの強風を伴う雨によって感染が著しく助長され、急激に多発する場合がある。気象情報とほ場の発生状況に注意し、感染拡大を防ぐよう降雨前の予防的な防除に重点を置く。

・ミカンハモグリガの被害枝は本病の発生を助長するため、除去する。

・発病枝は伝染源となるので、できるだけ除去する。特に発病した夏秋枝は除去する。

・展着剤散布は中晩柑類に比べ薬害が出やすいため注意する。

●ミカンハダニ

予報の根拠

・９月上中旬の巡回調査では、平均寄生葉率は1.4%(平年2.0%)と平年よりやや少なかったが、一部ほ場では多発していた。

・１か月予報によると、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

・カメムシの防除により、本種の天敵が抑制される可能性がある。

防除対策

・着色期以降に発生すると果実が着色不良となり商品価値が低下するため、発生がみられた場合は薬剤防除を行う。

＜その他の病害虫＞

●褐色腐敗病

・病原菌は土壌中に存在し、雨による泥のはね上がりなどで着生子が果実に侵入する。

・主な伝染は水媒介であり、連続降雨や強風雨によって感染が著しく助長されるため降雨前に防除を行う。

・感染成立時間は 25℃で１時間と極めて短く、感染が拡大しやすいため、過去に発生したほ場では特に注意が必要である。

・ほ場の排水溝の整備、通風を良くするなど地表面の乾燥に努める。上壌からの雨滴の跳ね返りを防止するためにマルチ栽培や樹冠下に敷ワラ、敷草を行う、果実を地表面から離すために結果枝のつり上げや下枝に支柱を立てるなど耕種的防除に努める。

防除対策

・県全域で果樹園等への本虫の飛来が確認されている。今後も本虫の飛来に細心の注意を払い、ほ場で少数でも発生を確認したら、本虫が集合フェロモンを放出し大量飛来を招く前に直ちに薬剤防除を行う。また、成虫の移動範囲は広いため、地域での一斉防除が効果的である。なお、ヒノキ・スギ林の隣接地域（特に中山間地）や台風・暴風雨後の園地では、急激に発生が増加する場合があるので注意する。

・静岡県病害虫防除所ホームページ「害虫誘殺グラフ」では、本虫に関する各種情報（予察灯及びフェロモントラップにおける発生状況、ヒノキ・スギ球果の着果量、球果における寄生数、ヒノキ球果での吸汁痕数等）を随時提供しているのでご参照する。

【茶】

＜生育の概況等＞

９月上中旬の巡回調査時では、いずれの茶園も秋芽生育期であった。秋冬番の摘採はまだ始まっていなかった。

●チャハマキ

予報の根拠

・９月上中旬の巡回調査では、１ほ場で発生が多かったことから、平均寄生虫数0.32頭/1.25㎡(平年0.14頭/1.25㎡)と平年より多かった。なお、このほ場を除外した平均寄生虫数は0.06頭/1.25㎡だった。

・１か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・被害が見られた茶園では、摘採・整枝後早めに防除を行う。

●チャノコカクモンハマキ

予報の根拠

・９月上中旬の巡回調査では、平均寄生虫数0.06頭/1.25㎡(平年0.33頭/1.25㎡)と平年より少なかった。

・１か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・被害が見られた茶園では、摘採・整枝後早めに防除を行う。

●カンザワハダニ

予報の根拠

・９月上中旬の巡回調査では、摘採面の平均寄生葉率は0.1%（平年2.7%）と平年より少なかった。

・天敵のカブリダニ類の発生は、茶園４カ所の叩き落とし調査で平均0.6頭(平年0.4頭)と平年並だった。

・１か月予報では、気温は平年より高いが、降水量は平年より多いため、天敵の働きにより本種の発生はあまり助長されない。

防除対策

・既に発生の多い茶園では、整枝後に防除を行う。今後の発生状況をよく観察し、発生が見られたら防除を実施する。

【中晩柑類】

●かいよう病

予報の根拠

・９月上中旬の巡回調査では、果実の平均発病度は1.26（平年0.5）と平年より多かった。

・１か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

・台風などの強風を伴う雨によって感染が著しく助長され、急激に多発する場合がある。気象情報とほ場の発生状況に注意し、感染拡大を防ぐよう降雨前の予防的な防除に重点を置く。

・ミカンハモグリガの被害枝は本病の発生を助長するため、除去する。

・発病枝は伝染源となるので、できるだけ除去する。特に発病した夏秋枝は除去する。

【果樹全般】

●果樹カメムシ類（チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ）

予報の根拠

・県内４か所の予察灯における９月１～15日の合計誘殺数の平均は、5740頭（平年496頭、平年比11.6倍）と平年より多かった。なお、本虫の内訳は、チャバネアオカメムシが3536頭（平年306頭）、ツヤアオカメムシが2118頭（平年172頭）、クサギカメムシが85.5頭（平年17.8頭）であった。

・県内６か所のフェロモントラップにおける９月１～15日の合計誘殺数の平均は、236頭（平年79.7頭、平年比3.0倍）と平年より多かった。なお、本虫の内訳は、チャバネアオカメムシが206頭（平年58.1頭）、ツヤアオカメムシが28.6頭（平年19.9頭）、クサギカメムシが0.7頭（平年1.7頭）であった。

・ヒノキ・スギ球果の着果量（指数）は、県平均7.1（平年4.4、平年比1.6倍）と平年より多かった。なお、本虫は球果を餌として増殖するため、着果量が多いと本虫は増えやすくなる。

・９月上中旬のヒノキ球果における平均寄生数は、10結果枝あたり12.3頭（平年5.2頭、平年比2.4倍）と平年より多かった。なお、９月の寄生数は、８月（13.1頭）よりも少なかったが、これは本虫の成虫がヒノキから離脱し、果樹園等に飛来しているためと推測される。

・９月上中旬のヒノキにおける球果１個あたりのカメムシ類の吸汁痕数は、平均20.7（平年15.7）と平年より多かった。なお、ヒノキ球果における吸汁痕数が20に近づくと、本虫はヒノキから離脱すると推測される。９月上中旬時点で調査地点の５割で平均吸汁痕数が20を超えていたため、既に餌を求めて果樹園等に飛来していると考えられる。

・果樹園係の病害虫防除員15名からの報告によると、本虫の発生について10名が「多い」、３名が「やや多い」と回答した。これら多数の報告は県全域で多く、特に、防除が遅れたことで本虫が集合フェロモンを放出し大量飛来を招いていろほ場が散見されている。

・以上をまとめると、予察灯への誘殺数、フェロモントラップへの誘殺数、ヒノキ・スギ着果量、ヒノキでの寄生数、ヒノキ球果での吸汁痕数は、いずれも平年より多かった。

・１か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

・１か月予報を加味すると、10月の果樹園への成虫飛来数は平年より多いと予想される。

＜その他の病害虫＞

●褐色円星病

・夏～秋に感染し緑斑症状を示した葉が、翌春になって落葉を引き起こす。よって、春になってからの防除では手遅れである。今春、多発したほ場で９月以降に殺菌剤を散布していない場合には、10月中に１回防除を行っておくと良い。

●ナガチャコガネ

・一番茶で本種による被害が見られた茶園では、10月下旬から11月にかけて畝間から雨落ち部を掘り、幼虫が地表面近くに上がってきたのを確認した上で、薬剤の土壌灌注処理を行う。

・薬剤処理は、降雨後に行うと効果的である。

【トマト】

＜生育の概況等＞

生育はやや早い～やや遅い傾向で、産地によりばらつきがある。

●灰かび病・すすかび病

予報の根拠

・９月中旬の東部および中遠地区での巡回調査では、平均発病株率0.6%（平年5.8%）と平年より少なかった。

・１か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する（菌の生育適温は葉かび病20～25℃、すすかび病26～28℃で、どちらも多湿条件で発病が多くなる）。

防除対策

・本病は潜伏期間が２週間程度と長く、多発してからでは薬剤の効果が劣るため、発病が認められたら直ちに薬剤を散布する。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。

・多湿にならないように換気につとめ、過度のかん水を避ける。

・被害葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に持ち出して処分する。特に多発生ほ場では摘み取り作業を徹底する。

・本県では、秋期はすすかび病の発生が多い傾向がある。

●萎化病等病

予報の根拠

・９月中旬の東部および中遠地区での巡回調査では、本病の発生は確認されなかった（平年0.7%）。

・１か月予報では、気温は平年より高いため、本病を媒介するタバココナジラミの増殖を助長する。このため、本病の発生も助長される。

防除対策
・本病はタバココナジラミによって媒介されるため、タバココナジラミの防除を徹底する。防除対策については、タバココナジラミの項を参照すること。
・発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取り、ハウス外の土中に埋めるか、ビニール袋に入れて腐らせる等して適切に処分する。
・脇芽や摘果などの残さは放置すると野良生えとなり、媒介虫や本病の伝染源となるので、ほ場付近には放置しない。

●タバココナジラミ

予報の根拠
・コナジラミ類の平均寄生株率は8.3%（平年4.7%）と平年より多かった。
・1か月予報では、気温は平年より高いため増殖を助長する。

防除対策
・施設開口部に防虫ネット（目合い0.4mm以下）を設置し、侵入を抑制する。
・成虫の寄生や黄色粘着板の捕獲数に注意し、発生が増加する場合は薬剤防除を実施する。

【だいこん】

●コナガ

予報の根拠
・フェロモントラップ調査における9月1～15日までの誘殺数は平年並に推移している。
・1か月予報では、降水量は平年より多く、気温は平年より高いが、本種の生育適温は22.5～27.5℃のため、本種の増殖をやや助長する。

防除対策
・ほ場内の発生に注意し、初期防除に努める。

<その他の病害虫>

●軟腐病・黒腐病・黒斑細菌病

・高温・多雨の条件で発生が多くなる。1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する。
・生育の衰えは発生を助長するため、排水に注意し、適切な管理に努める。
・病原細菌は、暴風雨等による傷口から侵入するので、暴風雨前または直後に防除を行う。特に、葉柄基部から侵入した場合は根部に影響を与え、商品価値を落とすこともあるため注意する。

●モザイク病（アブラムシ類）

・モザイク病の発生がみられた場合は、早めに発病株を抜き取り土中に埋めるか、ビニール袋に入れて腐らせる等して適切に処分するとともに、アブラムシ類の防除を行う。

【ねぎ（白ねぎ）】

<生育の概況等>

生育は平年並～平年より約2週間遅れている。

●黒斑病・葉枯病

予報の根拠
・9月中旬の巡回調査では、本病の平均発病株率は0.8%（平年4.8%）と平年より少なかった。
・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、黒斑病は発生が助長される（黒斑病菌の分生子の発芽・形成適温 24～27℃、葉枯病多発気温 15～20℃）。

防除対策
・本病は多湿条件で多発するため、植え溝の両端に排水用の溝を切るなどして、ほ場排水を良くする。また、肥料の過不足により発生しやすいため肥培管理を適切に行う。
・薬剤防除は、予防散布や発生初期の散布が効果的である。このため、各薬剤の使用回数に注意し防除する。

●ネギアザミウマ

予報の根拠
・9月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は8.0%（平年13.5%）と平年より少なかった。また、被害程度を示す被害度は、8.7（平年17.4）と平年より低かった。
・1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策
・例年、10月は本種の発生程度が高まる。多発するとネギの生育が遅れるため、発生初期に防除する。発生の多いほ場では早めに防除を行う。

●シロイチモジヨトウ

予報の根拠
・9月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は1.0%（平年1.6%）と平年並だった。
・静岡県磐田市（農林技術研究所内）のフェロモントラップによる誘殺数は、9月第4半旬時点で113頭（平年41頭）とほぼ平年より多かった。
・1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策
・ほ場内を観察し、葉に卵塊（数粒～数十粒の卵の塊で灰白色の毛に覆われている）を見つけた場合は、早急に除去する。
・多発ほ場では、定期的に薬剤防除を実施する。

●ネギハモグリバエ

予報の根拠
・9月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は6.8%（平年40.6%）と平年より少なかった。
・1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策
・本種が多発すると生育が遅れるため、発生が見られるほ場では早期に防除する。

【レタス（非結球レタスを除く）】

<その他の病害虫>

●ビッグベイン病

・本病は土壌伝染性のため、常発地では土壌消毒を行う。
・本病の発生が確認された地域からは土壌の移動をしない。
・発病ほ場で使用した農機具は十分水洗いし、消毒する。

●斑点細菌病

・本病は降雨により発病が助長されるため、降雨後はなるべく早く薬剤を散布して予防に努める。
・発病葉は摘み取って、ほ場外に持ち出して処分する。

●べと病

・初発生を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。特に、育苗期に本病と疑われる症状があった場合や、周辺でべと病が多発している場合など、感染源が多いと思われるほ場では注意する。
・育苗期の防除を徹底し、発病株を本ぼに定植しないよう苗を厳選する。
・発病葉は摘み取って、ほ場外に持ち出して処分する。

●モザイク病（アブラムシ類）

・感染時期が早いほど被害が大きいため、ウイルスを伝播するアブラムシ類の薬剤防除は、特に育苗期や定植後の生育前半に徹底して行う。
・発生がみられた場合は、早めに発病株を抜き取り土中に埋めるか、ビニール袋に入れて腐らせる等して適切に処分する。

●ナモグリバエ

・常発地域では、育苗期後半または定植時に薬剤を処理する。
・定植後は初期発生に注意し、発生を確認した場合は薬剤防除を行う。

【いちご】

<生育の概況等>

苗の生育は平年並～遅く推移している。

●炭疽病

予報の根拠
・8月の育苗ほの巡回調査では、平均発病株率は1.3%（平年1.7%）と平年並だった。
・病害虫防除員の報告より、9月発生量は県内主要産地においてやや少ない～やや多い。
・1か月予報では、気温は平年より高いため、本病の発生を助長する。

防除対策
・本病の生育適温は25℃前後であり、高温・多湿条件下で多発生しやすい。
・発病株からその周囲へと伝染しやすいため、ほ場の見回りを徹底し発病株や発病が疑われる株の早期発見に努める。発病株はビニール袋に入れほ場外へ出し、殺菌処理をしてから残さを処分する。
・本病原菌は水滴の飛散によって伝染するため、株元かん水など水の跳ね返りを防ぐ形でかん水を行う。また、薬剤散布も同様の伝染条件を作り出す可能性があるため、殺虫剤のみの散布は注意して行うこと。
・発病後は薬剤による治癒が困難であるため、定期的な防除による予防を心がける。激しい雨や台風など水滴が飛散しやすい状況の前後、親株からの切り離しなど株を傷つけるような作業後は重点的に防除を行う。なお、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行うこと。

●ハダニ類

予報の根拠
・8月上旬の育苗ほの巡回調査では、平均寄生株率は7.3%（平年7.7%）と平年並であった。地域別では、東部地域で12.8%（平年3.4%）、中部地域で0.4%（平年14.6%）、中遠地域で8.0%（平年5.1%）と東部及び中遠地域での発生が多かった。
・病害虫防除員の報告によると、主要産地における9月の発生量は平年並～やや多かった。
・1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策
・寄生が認められた場合は少発生のうちに防除する。
・天敵製剤を利用する場合は、事前に防除を徹底し、天敵導入時にはハダニ類の密度が低くなるようにする。ハダニ類が低密度に維持された条件下での天敵放飼が重要である。

【作物全般】

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

・フェロモントラップ調査における９月１～20 日の誘殺数は、静岡市駿河区西大谷では、平年より多く推移しており、磐田市富丘および御前崎市合戸では、平年より少なく推移している。例年 10 月が発生のピークとなる。

・いちご病害虫防除員の報告によると、６名中３名が発生量をやや多いもしくは多いと回答した。

・１か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

・初期発生に注意し、若齢幼虫のうちに防除を行う。施設栽培の場合は開口部に防虫網を設置し侵入を防ぐ。

●オオタバコガ

予報の根拠

・フェロモントラップ調査における８月 21 日～９月 20 日の合計誘殺数は、浜松市中央区協和町では平年よりやや多く推移しており、磐田市富丘および浜松市中央区伊左地町では平年より少なく推移している。

・１か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

・本種は幼虫の成長に伴い、植物体へ食入するため、薬剤の防除効果が低下するので、ほ場を観察し早期発見および初期防除に努める。

３　季節予報

●１か月予報　（東海地方　令和６年９月１９日　名古屋地方気象台発表）

【予報期間】　９月２１日から１０月２０日

【予想される向こう1か月の天候】

特に注意を要する事項		期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。
向こう１か月	天候	天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。
	気温	平均気温は、高い確率８０％です。
	降水量	降水量は、多い確率５０％です。
	日照時間	日照時間は、少ない確率５０％です。
１週目	気温	１週目は、高い確率８０％です。
２週目	気温	２週目は、高い確率８０％です。
３～４週目	気温	３～４週目は、高い確率７０％です。

【確　率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多％
１か月	気温	１０	１０	８０
１か月	降水量	２０	３０	５０
１か月	日照時間	５０	３０	２０
１週目	気温	１０	１０	８０
２週目	気温	１０	１０	８０
３～４週目	気温	１０	２０	７０

【予報の対象期間】

１か月　：　９月２１日（土）～１０月２０日（日）
１週目　：　９月２１日（土）～　９月２７日（金）
２週目　：　９月２８日（土）～１０月　４日（金）
３～４週目　：１０月　５日（土）～１０月１８日（金）

※ 利用上の注意

・気温・降水量は「低い（少ない）」「平年並」「高い（多い）」の３つの階級で予報します。階級の幅は、1991～2020 年の 30 年間における各階級の出現率が等分（それぞれ 33%）となるように決めてあります。（気候的出現率と呼びます）。

・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い（少ない）場合は「平年に比べて多い（少ない）」、また平年の日数と同程度に多い（少ない）場合には「平年と同様に多い（少ない）」と表現します。なお、単に多い（少ない）と表現した場合には対象期間の２分の１より多い（少ない）ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病害虫防除所　〒438-0803　磐田市富丘 678-1
TEL 0538-36-1543　FAX 0538-33-0780
ＵＲＬ　https://www.pref.shizuoka.jp/sangyoshigoto/norinsuisho/1058628/0-soto/index.html

病害虫発生予察情報（11 月予報）

令和６年 10 月 29 日
静岡県病害虫防除所長

１　予報概況

作物名	病害虫名	予報 （11 月の県平均平年値）	予報の根拠
温州 みかん	ミカンハダニ	発 生 量：多 （寄生葉率 2.2%）	10 月中旬発生量：多　（＋） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：多い　（－）
トマト	葉かび病・ すすかび病	発 生 量：並 （発病株率 10.3%）	10 月中旬発生量：少　（－） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：多い　（＋）
	黄化葉巻病	発生量：並 （発病株率 1.4%）	10 月中旬発生量：少　（－） 防除員からの報告：やや少～多（－～＋） 気象予報：気　温：高い　（＋）
	コナジラミ類	発生量：多 （寄生株率 13.3%）	10 月中旬発生量：多　（＋） 気象予報：気　温：高い　（＋）
	ハスモンヨトウ	発生量：多 （寄生株率 0.1%）	10 月中旬発生量：多　（＋） ﾌｪﾛﾓﾝﾄﾗｯﾌﾟ誘殺数：少～多　（－～＋） 防除員からの報告：やや多　（＋） 気象予報：気　温：高い　（＋）
だいこん	黒斑細菌病	発 生 量：やや多 （発病株率 0.4%）	10 月下旬発生量：並（発生なし）（±） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：多い　（＋）
	白さび病	発 生 量：並 （発病株率 0.1%）	10 月下旬発生量：並（発生なし）（±） 気象予報：気　温：高い　（－） 降水量：多い　（＋）
	モザイク病 （アブラムシ類）	モザイク病発生量：並 （発病株率 0.4%） アブラムシ類発生量：少 （寄生株率 0.9%）	10 月下旬発生量 モザイク病：並（発生なし）（±） アブラムシ類：少（発生なし）（－） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：多い　（　－）
	コナガ	発 生 量：やや少 （寄生株率 0.2%）	10 月下旬発生量：少（発生なし）（－） ﾌｪﾛﾓﾝﾄﾗｯﾌﾟ誘殺数：並　（±） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：多い　（±）
	ナモグリバエ	発 生 量：やや少 （寄生株率 3.7%）	10 月下旬発生量：少　（－） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：多い　（±）
	ヨトウムシ類	発 生 量：多 （寄生株率 3.7%）	10 月下旬発生量：多　（＋） ﾌｪﾛﾓﾝﾄﾗｯﾌﾟ誘殺数（ハスモンヨトウ） ：少～多　（－～＋） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：多い　（±）

作物名	病害虫名	予報 （11 月の県平均平年値）	予報の根拠
いちご	うどんこ病	発 生 量：少 （発病株率 1.2%）	10 月 発 生 量：少（発生なし）（－） 気象予報：気　温：高い　（－）
	炭疽病	発 生 量：並 （発病株率 1.4%）	10 月 発 生 量：少　（－） 気象予報：気　温：高い　（＋）
	アブラムシ類	発 生 量：多 （寄生株率 4.7%）	10 月 発 生 量：やや多　（＋） ただし、一部ほ場で多 気象予報：気　温：高い　（＋）
	ハダニ類	発 生 量：やや多 （寄生株率 16.0%）	10 月 発 生 量：並　（±） ただし、一部ほ場で多 気象予報：気　温：高い　（＋）
	ハスモンヨトウ	発 生 量：多 （寄生株率 0.3%）	10 月 発 生 量：多　（＋） ﾌｪﾛﾓﾝﾄﾗｯﾌﾟ誘殺数：少～多　（－～＋） 防除員からの報告：やや多～多　（＋） 気象予報：気　温：高い　（＋）
作物全般	オオタバコガ	発 生 量：多	ﾌｪﾛﾓﾝﾄﾗｯﾌﾟ誘殺数：多　（＋） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：多い　（±）

表の見方について

- 予報の発生量は平年（静岡県の過去 10 年間）との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の５段階で示しています。
- 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年（静岡県の過去 10 年間）との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の５段階で示しています。
- 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況（調査時期と発生量）、気象庁の1ヶ月予報（気温と降水量）を記入しています。その状況が多発要因の場合は（＋）、少発要因の場合は（－）を示し、＋－を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

農薬情報はこちらで検索！

静岡県農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準

https://www.s-boujo.jp/

静岡県病害虫防除所 HP が新しくなりました。

静岡県病害虫防除所 HP

https://www.pref.shizuoka.jp/sangyoshigoto/norinjimusho/1058658/boujo/index.html

作物名	病害虫名	予報 （11 月の県平均平年値）	予報の根拠
キャベツ	黒腐病	発 生 量：やや少 （発病株率 1.9%）	10 月下旬発生量：少（発生なし）（－） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：多い　（＋）
	菌核病	発 生 量：やや少 （発病株率 0.2%）	10 月下旬発生量：少（発生なし）（－） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：多い　（＋）
	コナガ	発 生 量：多 （寄生株率 0.1%）	10 月下旬発生量：多　（＋） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：多い　（±）
	オオタバコガ	発 生 量：多 （寄生株率 0.2%）	10 月下旬発生量：多　（＋） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：多い　（±）
	ハスモンヨトウ	発 生 量：多 （寄生株率 0.02%）	10 月下旬発生量：多　（＋） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：多い　（±）
	アブラムシ類	発 生 量：やや少 （寄生株率 0.7%）	10 月下旬発生量：少（発生なし）（－） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：多い　（－）
ねぎ （白ねぎ）	さび病	発 生 量：やや少 （発病株率 1.3%）	10 月中旬発生量：少（発生なし）（－） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：多い　（＋）
	黒斑病・葉枯病	発 生 量：やや少 （発病株率 3.3%）	10 月中旬発生量：少　（－） 気象予報：気　温：高い　（±） 降水量：多い　（＋）
	シロイチモジ ヨトウ	発 生 量：多 （寄生株率 0.2%）	10 月中旬発生量：多　（＋） トラップ誘殺数：少～多　（－～＋） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：多い　（±）
	ネギアザミウマ	発 生 量：並 （寄生株率 12.8%）	10 月中旬発生量：並　（±） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：多い　（－）
	ネギハモグリ バエ	発 生 量：やや多 （被害株率 23.5%）	10 月中旬発生量：並　（±） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：多い　（±）
レタス （非結球レタスを除く）	斑点細菌病	発 生 量：並 （発病株率 0.1%）	10 月中下旬発生量：並（発生なし）（±） 気象予報：気　温：高い　（－） 降水量：多い　（＋）
	べと病	発 生 量：並 （発病株率 0.2%）	10 月中下旬発生量：並（発生なし）（±） 気象予報：気　温：高い　（－） 降水量：多い　（＋）
	ハスモンヨトウ	発 生 量：多 （寄生株率 0.1%）	10 月中下旬発生量：多　（＋） ﾌｪﾛﾓﾝﾄﾗｯﾌﾟ誘殺数：少～多　（－～＋） 防除員からの報告：やや多～多　（＋） 気象予報：気　温：高い　（＋） 降水量：多い　（±）

２　予報の根拠と防除対策

【温州みかん】

＜生育の概況＞

生育は平年並～数日早く、果実の肥大は平年並の産地が多い。

●ミカンハダニ

予報の根拠

・10 月中旬の巡回調査では、平均寄生葉率は 3.6%（平年 1.4%）と平年より多かった。地域別では、東部地域で寄生が認められず（平年 0.8%）、中部地域で 1.0%（平年 2.6%）、西部地域で 9.7%（平年 1.5%）と西部地域での発生が多かった。
・１か月予報によると、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。
・カメムシの防除により、カブリダニ類等の天敵類が抑制され、ミカンハダニの発生が助長される可能性がある。

防除対策

・着色期以降に発生すると果実が着色不良となり商品価値が低下するため、発生がみられた場合は収穫前日数に注意して薬剤防除を行う。

＜その他の病害虫＞

●黒点病

・10 月中旬の巡回調査では、果実の平均発病度は 11.0（平年 1.4）と平年より多かった。
・近年、本県では多発傾向にある。
・樹冠内部の枯れ枝や園の内外に放置された剪定枝、切株などで本病の胞子が作られ、伝染源となる。このため、枯れ枝の切除を徹底し、耕種的防除を適切に実施する。

●黄かび・黒かび病

・10 月中旬の巡回調査では、平均樹上発病果数は 0.03 個/樹（平年 0.3 個/樹）と平年より少なかった。落果発病果数は 0.5 個/樹（平年 0.9 個/樹）と平年より少なかった。
・樹上発病果や発病した摘果果実は、園内の菌密度を高めるため、園外に持ち出して処分する。
・本病は果実表面の傷から病原菌が侵入するため、果実に傷がつかないよう注意して収穫作業を行う。防除を行う場合は、収穫前日数に注意して薬剤の選択をする。
・果実が過熟にならないよう適期に収穫し、雨の日や雨の翌日など果実に水滴が残っているようなときには収穫を避ける。

●褐色腐敗病

・10 月中旬の巡回調査では、平均樹上発病果数は 0.07 個/樹（平年値なし、昨年 0.1 個/樹）、落果発病果数は 2.1 個/樹（平年値なし、昨年 0.4 個/樹）であった。
・本病原菌は土壌中に生息しており、降雨による泥はねなどで樹上の発病が増加する。
・樹上発病果や落果発病果は、園内の菌密度を高めるため、園外に持ち出して処分する。

【かんきつ全般】
<その他の病害虫>
●かいよう病
・10月中旬の温州みかんの巡回調査では、果実の平均発病度は0.38（平年0.04）と平年より多かった。
・10月中旬の中晩柑類の巡回調査では、果実の平均発病度は1.7（平年0.5）と平年より多かった。
・11月以降に感染は起こらないが、冬期に発病枝葉の切除、防風垣・防風ネットの整備を徹底し、翌春の新梢への感染拡大を防ぐ。

【茶】
<その他の病害虫>
●チャハマキ・チャノコカクモンハマキ
・予察灯及びフェロモントラップにおける成虫誘殺数は、10月下旬時点で第5世代の発生が認められ、平年よりも多く推移している。
・被害が見られた茶園では、整枝後に早めに防除を行う。
●ナガチャコガネ
・被害のみられたほ場では、幼虫は10月下旬～11月下旬にかけて地表近くに上がってくる。うね間から雨落ち部を掘り、幼虫が地表から20cmまでの浅さに見られたら、薬剤の土壌かん注を実施する。

【トマト】
<生育の概況>
生育はやや早い～遅く、地域や生産者によりばらつきがある。
●灰かび病・すすかび病
予報の根拠
・10月中旬の巡回調査では、平均発病株率は2.4%（平年11.6%）と平年より少なかった。
・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する（生育適温は、葉かび病20～25℃、すすかび病26～28℃程度で、どちらも多湿条件で発病が多くなる）。
防除対策
・本病は潜伏期間が2週間程度と長く、多発してからでは薬剤の効果が劣るため、発病が認められたら直ちに薬剤を散布する。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
・多湿にならないように換気につとめ、過度のかん水を避ける。
・発病葉は感染源となるため速やかに摘み取って、ほ場外に廃棄する。
・本県では、定植後から11月頃までにはすすかび病が多く、次第に葉かび病が優占する傾向が見られる。

●疫病
予報の根拠
・10月中旬の巡回調査では、平均発病株率は0.2%（平年1.0%）と平年より少なかった。
・病害虫防除員からは、4名中2名から本虫の発生が「やや多い」もしくは「多い」との報告があった。
・1か月予報では、気温は平年より高いため、本病を媒介するタバココナジラミの増殖を助長する。このため、本病の発生も助長される。
防除対策
・本病はタバココナジラミによって媒介されるため、タバココナジラミの防除を徹底する。防除対策については、コナジラミ類の項を参照すること。
・発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取り、ハウス外の土中に埋めるか、ビニール袋に入れて腐らせる等して適切に処分する。
・脇芽や摘果などの残さは放置すると野良生えとなり、媒介虫や本病の伝染源となるので、ほ場付近には放置しない。
●コナジラミ類
予報の根拠
・10月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は17.0%（平年11.6%）と平年より多かった。
・1か月予報では、気温は平年より高いため増殖を助長する。
防除対策
・施設開口部に防虫ネット（目合い0.4mm以下）を設置し、侵入を抑制する。
・成虫の寄生や黄色粘着板の捕獲数に注意し、発生が確認された場合は薬剤防除を実施する。
●ハスモンヨトウ
予報の根拠
・10月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は1.5%（平年0.2%）と平年より多かった。
・フェロモントラップ調査における9月21日～10月20日の合計誘殺数は、静岡市においては平年より多く、磐田市及び御前崎市においては平年並～少なく推移している。
・1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。
防除対策
・例年、11月末まで幼虫が発生するので、ほ場での発生に注意し、防除効果の高い若齢幼虫期の防除に努める。
・発生状況及び防除対策については、「技術情報第3号（作物全般 ハスモンヨトウ）」も参照すること。

【だいこん】
<生育の概況>
高温の影響により、生育は平年並～やや遅い。
●黒斑細菌病
予報の根拠
・10月下旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発生なし）。
・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する（本病の発病適温は25～30℃、降雨は本病の発生を助長する）。
防除対策
・病原細菌は、畝風雨等による傷口から侵入するので、畝風雨前または直後に防除を行う。
・降雨が続くときや初発生を確認した場合、速やかに薬剤防除を実施する。
・生育の衰えは本病の発生を助長するため、肥料切れと排水に注意し、適切な管理に努める。
・葉柄基部から侵入した場合は、根部に影響を与え商品価値を落とすこともあるため特に注意する。
●白さび病
予報の根拠
・10月下旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発生なし）。
・1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本病の発生を特には助長しない（本病の分生子は発芽最適温度が10℃と低温を好む。また多雨により発生が助長される）。
防除対策
・白さび病が多発するとワッカ症を併発することがある。ワッカ症を防ぐには、葉での発病が少ないうちに薬剤散布を行うことが必要である。
・発病残渣は翌年の伝染源となるため、ビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。
●モザイク病（アブラムシ類）
予報の根拠
・10月下旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発生なし）。
・本病の媒介虫であるアブラムシ類の寄生は確認されなかった（平年0.4%）。
・1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、アブラムシ類の発生をやや助長する。このため、本病の発生もやや助長されると考えられる。
防除対策
・雨が降らない日が続くとアブラムシ類が急増する場合があるので、ほ場内の発生に注意し、確認された場合は薬剤防除を実施する。
・発病株は伝染源となるため速やかに抜き取り、ビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。

●コナガ
予報の根拠
・10月下旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年寄生株率0.1%）。
・フェロモントラップによる9月16日～10月20日までの誘殺数は、平年並みに推移している。
・1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。
防除対策
・ほ場内の発生に注意し、確認された場合は薬剤防除を実施する。
●ナモグリバエ
予報の根拠
・10月下旬の巡回調査では、寄生は確認されなかった（平年2.0%）。
・1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。
防除対策
・葉表の白点（産卵痕）や線描き状の食害痕が多数見られる場合は、防除を実施する。
●ヨトウムシ類
予報の根拠
・10月下旬の巡回調査では、平均寄生株率は8.0%（平年0.5%）と平年より多かった。
・ハスモンヨトウのフェロモントラップ調査における9月21日～10月20日の合計誘殺数は、静岡市においては平年より多く、磐田市及び御前崎市においては平年並～少なく推移している。
・1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。
防除対策
・例年、11月末まで幼虫が発生するので、ほ場での発生に注意し、防除効果の高い若齢幼虫期の防除に努める。
・ハスモンヨトウの発生状況及び防除対策については、「技術情報第3号（作物全般 ハスモンヨトウ）」も参照すること。

【キャベツ】
<生育の概況>
生育は平年並～遅れている。
●黒腐病
予報の根拠
・10月下旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率2.1%）。
・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する。
防除対策
・本病は細菌病で、発病後防除を実施しても進展が止まりにくいことから、予防散布に努める。特に強風雨の前後に薬剤散布を実施すると防除効果が高い。
・被害残さは感染源となるため、ほ場外で土中に埋めるなどして適切に処分する。

●菌核病

予報の根拠

・10月下旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率0.02%）。本病は例年生育後半に被害が増加する（12月の平年発病株率0.4%）。

・本病は、降雨があり、20℃前後の気温が続くと発生しやすい。1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

・例年発病がみられるほ場では予防的に薬剤防除を行うとともに、被害茎葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外で土中深く（地下50cm以上）に埋めるなど適切に処分する。黒腐病と異なり、浅く埋めただけでは病原菌は死滅しない。

●コナガ

予報の根拠

・10月下旬の巡回調査では、平均寄生株率0.4%（平年0.1%）と平年より多かった。

・1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

・結球前の新芽が加害されると芯止まりや品質の低下を招くので、結球前に防除を行う。

・薬剤に対する抵抗性が発達しやすいため、同系統剤の連用を避けローテーション散布を心がける。特にピレスロイド系およびジアミド系殺虫剤は薬剤感受性が低下している可能性があるので薬剤の選定には十分注意する。

●オオタバコガ

予報の根拠

・10月下旬の巡回調査では、平均寄生株率2.7%（平年0.6%）と平年よりも多かった。

・トラップ調査の情報などは、【作物全般】のオオタバコガの項を参照する。

・1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

・幼虫が結球部を加害するため、結球内に侵入後では薬剤の効果が上がりにくい。例年、発生が見られるほ場では、早めに定期的な防除を行なう。

・薬剤に対する抵抗性の発達を防ぐために、同一系統の薬剤を連用しないようにする。

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

・10月下旬の巡回調査では、平均寄生株率1.6%（平年0.5%）と平年よりも多かった。

・1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

・発生が見られたほ場では、薬剤の効果が高い若齢幼虫のうちに防除する。若齢幼虫は葉裏を加害するため、葉裏にも十分薬液がかかるように散布する。

・発生状況及び防除対策については、「技術情報第3号（作物全般 ハスモンヨトウ）」も参照すること。

●アブラムシ類

予報の根拠

・10月下旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年寄生株率0.9%）。

・1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・本虫は風通しの悪い場所に多く発生することから、例年発生が認められるほ場では発生に注意し、早期に薬剤防除を実施する。

・下葉の葉裏に寄生が多いので、寄生部位に薬液が届くように丁寧に散布する。

【ねぎ（白ねぎ）】

＜生育の概況＞

夏期の高温の影響で、生育が遅れている地域がある。

●さび病

予報の根拠

・10月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率0.1%）。本病は、例年11月以降発生が増加する（11月の平年発病株率1.3%）。

・本病は多湿を好み、発病適温は15～20℃である。1か月予報では、気温は平年より高いが、降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

・肥料の過不足は発病を助長するので、施肥を適正に行う。

・発病が見られたほ場では早期に薬剤防除を行う。また、被害葉は感染源となるため速やかに摘み取りほ場外で土中に埋めるなどして適切に処分する。

●黒斑病・葉枯病

予報の根拠

・10月中旬の巡回調査では、上位3葉の平均発病株率は1.0%（平年3.6%）と平年より少なかった。

・黒斑病は多湿を好み、分生子の発芽適温は24～27℃である。また、葉枯病の多発気温は15～20℃である。1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

・肥料の過不足は発病を助長するので、施肥を適正に行う。

・曇雨天が続く場合には発病する前に予防散布を実施する。

●シロイチモジヨトウ

予報の根拠

・10月中旬の巡回調査では、平均寄生株率2.8%（平年1.2%）と平年より多かった。

・10月中旬の農林技術研究所（磐田市）における予察灯の誘殺数は平年より少なく、フェロモントラップの誘殺数は平年より多く推移している。

・1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

・例年11月には発生が減少する。但し、卵塊（数粒～数十粒の卵の塊で灰白色の毛に覆われている）や若齢幼虫を見つけた場合は、早急に除去する。被害が続くようであれば、早めに薬剤防除を実施する。

●ネギアザミウマ

予報の根拠

・10月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は12.2%（平年12.8%）と平年並だった。

・1か月予報では、気温は平年より高いが、降水量は平年より多いため、本種の発生をあまり助長しない。

防除対策

・多発した場合は薬剤防除を実施する。

●ネギハモグリバエ

予報の根拠

・10月中旬の巡回調査では、平均被害株率は39.4%（平年44.5%）と平年並だった。

・1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・例年、気温の低下に伴って11月には発生が減少するが、食害により葉が真っ白くなる被害が認められた多発注場では、複数回にわたり薬剤防除を実施する。

【レタス（非結球レタスを除く）】

＜生育の概況＞

生育は平年並べやや早い。

●斑点細菌病

予報の根拠

・10月中下旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発生なし）。

・1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本病の発生を特には助長しない（本病は比較的低温で、多湿の条件を好む）。

防除対策

・病原細菌は、暴風雨等による傷口から侵入するので、暴風雨前または直後に速やかに防除を行う。

・降雨が続くときや初発生を確認した場合、速やかに薬剤防除を実施する。

・本病は主に結球期以降に発生するが、結球前も葉面の病原細菌数を減らしておく必要があるため、結球期に入る前に薬剤の予防散布をすることが大切である。

●べと病

予報の根拠

・10月中下旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発生なし）。

・1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本病の発生を特には助長しない（多湿は本病の発生を助長する。また、病原菌の生育適温は10～15℃で比較的低温を好む）。

防除対策

・予防散布に努める。初発生を確認した場合は、速やかに薬剤防除を実施する。

・罹病残さはほ場外に処分する。

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

・10月中下旬の巡回調査では、平均寄生株率は5.2%（平年0.02%）と平年より多かった。

・フェロモントラップ調査における9月21日～10月20日の合計誘殺数は、静岡市においては平年より多く、磐田市及び御前崎市においては平年並～少なく推移している。

・病害虫防除員からは、2名中1名から本虫の発生が「多い」、1名から「やや多い」との報告があった。

・1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

・例年、11月末まで幼虫が発生するので、ほ場での発生に注意し、防除効果の高い若齢幼虫期の防除に努める。

・発生状況及び防除対策については、「技術情報第3号（作物全般 ハスモンヨトウ）」も参照すること。

【いちご】

＜生育の概況＞

花芽の分化は平年より遅れている地域が多い。

●うどんこ病

予報の根拠

・10月の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率1.4%）。

・1か月予報では、気温は平年より高いため本病の発生を助長しない。

防除対策

・胞子の発芽適温は20℃前後であり、気温の低下に伴い発生が増加しやすい。

・多発生すると防除が困難になりやすいため、発病が少しでも見られた場合は早急に防除する。特に育苗期に発生がみられたほ場では、予防散布による防除を徹底する。

●炭疽病

予報の根拠

・10月の巡回調査では、平均発病株率は1.2%（平年1.9%）と平年より少なかった。

・1か月予報では、気温は平年より高いため、本病の発生を助長する。

防除対策

・本病の生育適温は28℃前後であり、高温・多湿条件下で多発生しやすい。

・開花～着果期頃、株に負担がかかると潜在感染株では萎凋症状が急速に進展する場合がある。

・発病株から周囲へと伝染するため、ほ場の見回りを徹底し発病株や、発病が疑われる株の早期発見に努める。発病株は培土ごと除き、ビニール袋に入れてほ場外へ出し、殺菌処理後に残さを処分する。

・本病原菌は水滴の飛散によって伝染するため、株元かん水など水の跳ね返りを防ぐ形でかん水を行う。また、薬剤散布も同様の伝染条件を作り出す可能性があるため、殺虫剤のみの散布は注意して行う。

・定期的な予防散布による防除を実施する。作用機構コード（FRAC）が「M」で始まる保護殺菌剤を中心としたローテーション散布を行い、感受性低下の疑われる薬剤（MBC殺菌剤（FRAC：1）、DMI殺菌剤（FRAC：3）、Qoi殺菌剤（FRAC：11））の散布は行わない。作用機構コード（FRAC）については静岡県病害虫防除基準（URL：https://www.s-boujo.jp）等を参照する。

●アブラムシ類

予報の根拠

・10月の巡回調査では、平均寄生株率は5.2%（平年4.1%）と平年よりやや多く、一部ほ場では多発していた。

・1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

・ビニール被覆後は増殖に好適な条件となるので、発生に注意し初期防除に努める。

・天敵を利用するほ場では、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択して防除する。

●ハダニ類

予報の根拠

・10月の巡回調査では、平均寄生株率は13.3%（平年12.9%）と平年並であったが、一部ほ場で多発していた。

・1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

・寄生が認められた場合は、少発生のうちに防除する。

・天敵製剤を利用する場合は、事前に防除を徹底し、ハダニ類が低密度に維持された条件下で放飼する。

3　季節予報

●1か月予報　（東海地方　令和６年１０月２４日　名古屋地方気象台発表）

【予報期間】　１０月２６日から１１月２５日

【予想される向こう１か月の天候】

特に注意を要する事項		向こう１か月程度は気温の高い状態が続き、期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。
向こう１か月	天候	平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。
	気温	平均気温は、高い確率８０％です。
	降水量	降水量は、多い確率６０％です。
	日照時間	日照時間は、少ない確率５０％です。
１週目	気温	１週目は、高い確率８０％です。
２週目	気温	２週目は、高い確率７０％です。
３～４週目	気温	３～４週目は、高い確率６０％です。

【確　率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多％
１か月	気温	１０	１０	８０
１か月	降水量	１０	３０	６０
１か月	日照時間	５０	４０	１０
１週目	気温	１０	１０	８０
２週目	気温	１０	２０	７０
３～４週目	気温	１０	３０	６０

【予報の対象期間】

１か月　　：１０月２６日（土）～１１月２５日（月）

１週目　　：１０月２６日（土）～１１月　１日（金）

２週目　　：１１月　２日（土）～１１月　８日（金）

３～４週目　：１１月　９日（土）～１１月２２日（金）

※ 利用上の注意

・気温・降水量は「低い（少ない）」「平年並」「高い（多い）」の３つの階級で予報します。階級の境は、1991～2020年の30年間における各階級の出現率が等分（それぞれ33%）となるように決めてあります。（気候的出現率と呼びます）。

・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い（少ない）場合は「平年に比べて多い（少ない）」、また平年の日数と同程度に多い（少ない）場合には「平年と同様に多い（少ない）」と表現します。なお、単に多い（少ない）と表現した場合には対象期間の２分の１より多い（少ない）ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病害虫防除所　〒438-0803　磐田市富丘678-1

TEL 0538-36-1543　FAX 0538-33-0780

ＵＲＬ　https://www.pref.shizuoka.jp/sangyoshigoto/norinjimusho/1058658/boujo/index.html

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

・10月の巡回調査では、平均寄生株率は2.3%（平年0.6%）と平年より多かった。ただし、地域別では、東部地域で0.2%（平年0.2%）、中部地域で6.0%（平年0.9%）、中遠地域で0.7%（平年0.6%）と中部地域での発生が多かった。

・フェロモントラップ調査における9月21日～10月20日の合計誘殺数は、静岡市においては平年より多く、磐田市及び御前崎市においては平年並～少なく推移している。

・いちご病害虫防除員からの報告によると、6名中5名が本種の発生が「多い」または「やや多い」と回答した。

・1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

・気温の低下に伴い施設内への成虫の侵入は少なくなるが、発生を認めた場合は若齢幼虫のうちに防除する。

・発生状況及び防除対策については、「技術情報第３号（作物全般 ハスモンヨトウ）」も参照すること。

【作物全般】

●オオタバコガ

予報の根拠

・フェロモントラップ調査における9月21日～10月20日の合計誘殺数は、浜松市中央区協和町、伊左地町および磐田市のいずれも平年より多く推移している。

・1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・例年、11月中は成虫が発生するため、施設では開口部に防虫ネットを設置し、侵入を抑制する。

・本種は幼虫の成長に伴い、植物体へ食入するため、薬剤の防除効果が低下する。そのため、ほ場を観察し早期発見および初期防除に努める。

病害虫発生予察情報（12 月予報）

令和６年 11 月 27 日
静岡県病害虫防除所長

1　予報概況

作物名	病害虫名	予報 （12 月の県平均平年値）	予報の根拠
温州みかん	青かび・緑かび病	発 生 量：多	11 月中旬発生量：多　（＋） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±） 降水量：ほぼ平年並　（±）
	ミカンハダニ	発 生 量：並	11 月中旬発生量：並　（±） ただし、一部ほ場で多 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±） 降水量：ほぼ平年並　（±）
トマト	葉かび病・すすかび病	発 生 量：やや少 （発病株率 12.1%）	11 月中旬発生量：少　（－） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±） 降水量：ほぼ平年並　（±）
	灰色かび病	発 生 量：やや少 （発病株率 2.8%）	11 月中旬発生量：少（発生なし）（－） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±） 降水量：ほぼ平年並　（±）
	黄化葉巻病	発生量：並 （発病株率 2.5%）	11 月中旬発生量：少　（－） コナジラミ類発生量：多　（＋） 防除員からの報告：やや多　（＋） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±）
	コナジラミ類	発生量：多 （寄生株率 13.2%）	11 月中旬発生量：多　（＋） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±）
	ハスモンヨトウ	発生量：やや多 （寄生株率 0.03%）	11 月中旬発生量：やや多　（＋） フェロモントラップ 誘殺数：多　（＋） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±）
だいこん	黒斑細菌病	発 生 量：やや多 （発病株率 3.5%）	11 月中旬発生量：やや多　（＋） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±） 降水量：ほぼ平年並　（±）
	白さび病	発 生 量：少 （発病株率 2.5%）	11 月中旬発生量：少（発生なし）（－） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±） 降水量：ほぼ平年並　（±）
	モザイク病 （アブラムシ類）	モザイク病発生量：少 （発病株率 1.7%） アブラムシ類発生量：少 （寄生株率 3.8%）	11 月中旬発生量 モザイク病：少（発生なし）（－） アブラムシ類：少　（－） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±） 降水量：ほぼ平年並　（±）
	コナガ	発 生 量：少 （寄生株率 0.7%）	11 月中旬発生量：少（発生なし）（－） フェロモントラップ 誘殺数： 並～やや多（±～＋） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±） 降水量：ほぼ平年並　（±）
	ナモグリバエ	発 生 量：少 （寄生株率：7.0%）	11 月中旬発生量：少（発生なし）（－） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±） 降水量：ほぼ平年並　（±）

作物名	病害虫名	予報 （12 月の県平均平年値）	予報の根拠
レタス（非結球レタスを除く）	斑点細菌病	発 生 量：少 （発病株率 0.7%）	11 月中下旬発生量：少（発生なし）（－） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±） 降水量：ほぼ平年並　（±）
	べと病	発 生 量：並 （発病株率 0.9%）	11 月中下旬発生量：並　（±） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±） 降水量：ほぼ平年並　（±）
いちご	うどんこ病	発 生 量：少 （発病株率 1.4%）	11 月中旬発生量：少（発生なし）（－） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±）
	炭疽病	発 生 量：多 （発病株率 1.2%）	11 月中旬発生量：多　（＋） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±）
	アブラムシ類	発 生 量：少 （寄生株率 2.8%）	11 月中旬発生量：少　（－） ただし、一部ほ場で多 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±）
	ハダニ類	発 生 量：やや少 （寄生株率 18.6%）	11 月中旬発生量：やや少　（－） ただし、一部ほ場で多 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±）
	アザミウマ類	発 生 量：多 （寄生株率 2.6%）	11 月中旬発生量：多　（＋） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±）
	ハスモンヨトウ	発 生 量：多 （寄生株率 0.1%）	11 月中旬発生量：多　（＋） フェロモントラップ 誘殺数：多　（＋） 防除員からの報告：やや多～多（＋） 気象予報：気　温：ほぼ平年並（±）

表の見方について

・予報の発生量は平年（静岡県の過去 10 年間）との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の５段階で示しています。

・予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年（静岡県の過去 10 年間）との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の５段階で示しています。

・予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況（調査時期と発生量）、気象庁の１か月予報（気温と降水量）を記入しています。その状況が多発要因の場合は（＋）、少発要因の場合は（－）を示し、＋－を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

農薬情報はこちらで検索！

静岡県農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準
https://www.s-boujo.jp/

静岡県病害虫防除所 HP が新しくなりました。

静岡県病害虫防除所 HP
https://www.pref.shizuoka.jp/sangyoshigoto/norinjimusho/1058658/boujo/index.html

作物名	病害虫名	予報 （12 月の県平均平年値）	予報の根拠
キャベツ	黒腐病	発 生 量：少 （発病株率 3.6%）	11 月中旬発生量：少　（－） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±） 降水量：ほぼ平年並　（±）
	菌核病	発 生 量：並 （発病株率 0.4%）	11 月中旬発生量：並　（±） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±） 降水量：ほぼ平年並　（±）
	コナガ	発 生 量：少 （寄生株率 0.2%）	11 月中旬発生量：少（発生なし）（－） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±） 降水量：ほぼ平年並　（±）
	オオタバコガ	発 生 量：少 （寄生株率 0%）	11 月中旬発生量：少（発生なし）（－） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±） 降水量：ほぼ平年並　（±）
	タマナギンウワバ	発 生 量：並 （寄生株率 0.4%）	11 月中旬発生量：並　（±） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±） 降水量：ほぼ平年並　（±）
	アブラムシ類	発 生 量：少 （寄生株率 0.7%）	11 月中旬発生量：少（発生なし）（－） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±） 降水量：ほぼ平年並　（±）
たまねぎ	腐敗病	発 生 量：多 （発病株率 0.6%）	11 月中旬発生量：多　（＋） 防除員からの報告：多　（＋） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±） 降水量：ほぼ平年並　（±）
	ネギアザミウマ	発 生 量：少 （寄生株率 27.6%）	11 月中旬発生量：少　（－） 被害度：低い　（－） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±） 降水量：ほぼ平年並　（±）
ねぎ（白ねぎ）	さび病	発 生 量：少 （発病株率 3.4%）	11 月中旬発生量：少（発生なし）（－） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±） 降水量：ほぼ平年並　（±）
	黒斑病・葉枯病	発 生 量：少 （発病株率 1.8%）	11 月中旬発生量：少　（－） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±） 降水量：ほぼ平年並　（±）
	ネギアザミウマ	発 生 量：少 （寄生株率 9.0%）	11 月中旬発生量：少　（－） 被害度：並　（±） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±） 降水量：ほぼ平年並　（±）
	ネギハモグリバエ	発 生 量：少 （寄生株率 1.5%）	11 月中旬発生量：少　（－） 気象予報：気　温：ほぼ平年並　（±） 降水量：ほぼ平年並　（±）

2　予報の根拠と防除対策

【温州みかん】

＜生育の経過＞

県果樹研究センター及び県伊豆農業研究センターによると、青島温州において果実肥大は平年並～やや悪く、着色は平年よりやや早い。

◎青かび・緑かび病

予報の根拠

・11 月中旬の巡回調査では、平均樹上発病果数は 3.7 個/樹（平年 0.7 個/樹）、落果発病果数は 16.0 個/樹（平年 4.7 個/樹）と平年より多かった。

・１か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並のため、本病の発生を特には助長しない。

防除対策

・樹上発病果や発病した摘果果実は、園内の菌密度を高めるため、園外に持ち出して処分する。

・防除を行う場合は、収穫前日数に注意して薬剤を選択する。

・本病は果実表面の傷から病原菌が侵入するため、果実に傷がつかないよう注意して収穫作業を行う。

・果実が過熟にならないよう適期に収穫し、雨の日や雨の翌日など果実に水滴が残っているようなときには収穫を避ける。

・収穫後は入庫時の手指を徹底するとともに、貯蔵中は点検を行い発病果の除去をする。

◎ミカンハダニ

予報の根拠

・11 月中旬の巡回調査では、平均寄生葉率は 2.1%（平年 2.2%）と平年並だったが、一部ほ場では多発していた。

・１か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並のため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

・発生が多い園地では、収穫前日数に注意して薬剤防除を行う。

・剪定後、越冬虫を対象にマシン油乳剤を散布する。ただし、寒害を受けやすい園地では３月に散布する。

【かんきつ全般】

＜その他の病害虫＞

◎黒点病

・近年、本県では多発傾向にある。樹冠内部の枯れ枝や園の内外に放置された剪定枝、切株などで本病の胞子が作られ伝染源となる。このため、整枝、剪定を適正に行い、樹冠内部の採光、通風を良好な状態に保つ。また伝染源となる枯枝の剪定と剪定枝の処分を行い、耕種的防除を適切に実施する。

◎かいよう病

・本病の越冬病斑は重要な伝染源となるため、園内からの除去を徹底する。発生園では冬期に発病枝葉の切除、防風垣・防風ネットの整備を徹底し、翌春の新梢への感染拡大を防ぐ。

◎カイガラムシ類

・剪定後、越冬虫を対象にマシン油乳剤を散布する。ただし、寒害を受けやすい園地では３月に散布する。

【トマト】

＜生育の概況＞

生育はやや遅い～やや早い傾向。

●灰かび病・すすかび病

予報の根拠

・11月中旬の巡回調査では、本病の平均発病株率は2.5%（平年10.3%）と平年より少なかった。ただし病害虫防除員からは、一部地域で平年よりやや多いとの報告があった。

・1か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並のため、本病の発生を助長しないが、例年12月以降はハウスの密閉による多湿で、発生が増加するため注意する（本病の生育適温は、葉かび病20～25℃、すすかび病26～28℃程度であり、特に多湿条件下で発生が多くなる）。

防除対策

・葉かび病については、葉かび病抵抗性品種（Cf-9）を侵すレース2.9の発生が県内で確認されている。本県では12月以降は葉かび病の発生が増加する傾向があるため、葉かび病抵抗性品種を栽培しているほ場でも、薬剤の予防散布を行い、葉かび病の発生に注意する。

・本病は潜伏期間が2週間程度と長く、多発してからでは薬剤の効果が劣るため、発病が認められたら直ちに薬剤を散布する。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、作用性の異なる薬剤をローテーション散布する。

・多湿にならないように換気につとめ、過度のかん水を避ける。

・発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に搬去し、適切に処分する。特に多発生は場では摘み取り作業を徹底する。

●斑色かび病

予報の根拠

・11月中旬の巡回調査では、本病の発生は認められなかった（平年平均発病株率0.9%）。ただし病害虫防除員からは、一部地域で平年よりやや多いとの報告があった。

・1か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並のため、本病の発生を特には助長しないが、例年、12月以降はハウスの密閉による多湿で、発生が増加するため注意する（本病の生育適温は23℃程度であり、特に多湿条件下で発生が多くなる）。

防除対策

・株の整枝、ハウス内湿度の上昇、株の錯綜により発生が増加するので、不要な下葉を除去するとともに、日中の換気を早めに行い、施設内の除湿に努める。

・予防に重点をおいた薬剤散布を行う。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、作用性の異なる薬剤をローテーション散布する。

・発病した果実や葉葉は伝染源となるため速やかに取り除き、ほ場外に搬去し、適切に処分する。

・多湿にならないように換気につとめ、過度のかん水を避ける。

●黄化萎ちょう病

予報の根拠

・11月中旬の巡回調査では、平均発病株率は0.5%（平年1.4%）と平年より少なかった。

・病害虫防除員からは、4名中2名から本病の発生が「やや多い」との報告があった。

・1か月予報では、気温はほぼ平年並のため、本病を媒介するタバココナジラミの増殖を助長しないが、コナジラミ類の平均害生株率が平年より高いため、本病の発生は助長される。

防除対策

・本病はタバココナジラミによって媒介されるため、タバココナジラミの防除を徹底する。防除対策については、コナジラミ類の項を参照すること。

・発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取り、ハウス外の土中に埋めるか、ビニール袋に入れて腐らせる等して適切に処分する。

・脇芽や摘果などの残さは放置すると野良生えとなり、媒介虫や本病の伝染源となるので、ほ場付近には放置しない。

・多発ほ場においては、耐病性品種の利用を検討する。なお、耐病性品種でも感染し、ウイルス密度が高まると発病するため、タバココナジラミの防除を徹底すること。

●コナジラミ類

予報の根拠

・11月中旬の巡回調査では、平均害生株率は16.8%（平年13.3%）と平年より多かった。

・1か月予報では、気温はほぼ平年並のため、本種の発生を助長しない。

防除対策

・施設開口部に防虫ネット（目合い0.4mm以下）を設置し、侵入を抑制する。

・成虫の害生や黄色粘着板の捕獲数に注意し、発生が確認された場合は薬剤防除を実施する。

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

・11月中旬の巡回調査では、平均害生株率は0.7%（平年0.1%）と平年よりやや多かった。

・フェロモントラップ調査における10月21日～11月20日の合計誘殺数は、3地点（静岡市、磐田市および御前崎市）すべてで平年より多く推移している。

・1か月予報では、気温はほぼ平年並のため、本種の発生を助長しない。

防除対策

・気温の低下に伴い施設内への成虫の侵入は少なくなるが、発生を認めた場合は若齢幼虫のうちに防除する。

・発生状況及び防除対策については、「技術情報第3号（作物全般 ハスモンヨトウ）」も参照する。

【だいこん】

＜生育の概況＞

生育は平年並～やや早い。

●黒斑細菌病

予報の根拠

・11月中旬の巡回調査では、本病の平均発病株率は1.1%（平年0.4%）と平年よりやや多かった。

・1か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並のため、本病の発生を特には助長しない（本病の発病適温は25～30℃、降雨は本病の発生を助長する）。

防除対策

・生育の衰えは本病の発生を助長するため、肥料切れと排水に注意し、適切な管理に努める。

・病原細菌は、強風雨等による傷口から侵入するので、強風雨の前か直後に防除を行う。

・降雨が続くときや初発生を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。

・特に、葉柄基部から侵入した場合は根部に影響を与え、商品価値を落とすこともあるため注意する。

●白さび病

予報の根拠

・11月中旬の巡回調査では、本病の発生は認められなかった（平年発病株率0.1%）。

・1か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並のため、本病の発生を特には助長しない（本病は多湿を好み、分生子の発芽最適温度は10℃程度である）。

防除対策

・白さび病が多発するとワッカ症を併発することがあるため、は種時期の遅い作型では、集ての発病が少ないうちに予防散布を行うことが必要である（予防散布の防除歩期は間引き後7～30日）。

・発病残渣は翌年の伝染源となるため、ほ場外に搬去し、適切に処分する。

・排水を良好にするなどして多湿にならないように努める。

●モザイク病（アブラムシ類）

予報の根拠

・11月中旬の巡回調査では、モザイク病の発生は認められなかった（平年発病株率0.4%）。

・本病の媒介虫であるアブラムシ類の平均害生株率は0.2%（平年0.9%）と平年より少なかった。

・1か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並のため、アブラムシ類の発生を助長しない。このため、本病の発生も助長されない。

防除対策

・雨が降らない日が続くとアブラムシ類が急増する場合があるので、ほ場内の発生に注意し、確認された場合は薬剤防除を実施する。

・被害株も伝染源となるため、速やかに抜き取り、ほ場外で適切に処分する。

●コナガ

予報の根拠

・11月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年害生株率0.2%）。

・フェロモントラップによる本種の誘殺状況は、牧之原市で平年並に、浜松市で平年よりやや多く推移している。

・1か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並のため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

・ほ場内の発生に注意し、確認された場合は薬剤防除を実施する。

●ナモグリバエ

予報の根拠

・11月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年害生株率3.7%）。

・1か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並のため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

・葉表の白点（産卵痕）や絵描き状の食害痕が多数見られる場合は、薬剤防除を実施する。

＜その他の病害虫＞

●ヨトウムシ類

・11月中旬の巡回調査では、平均害生株率は6.4%（平年0.3%）と平年より多かった。

・1か月予報では、降水量・気温ともにほぼ平年並のため、本種の発生を特には助長しない。

・気温の低下とともに幼虫の発生は減少するが、本年はフェロモントラップへの成虫誘殺数が平年に比べ多いため、幼虫の発生が認められたら早めに防除する。

【キャベツ】

＜生育の概況＞

生育は平年並～遅れている。

●黒腐病

予報の根拠

・11月中旬の巡回調査では、平均発病株率は0.2%（平年1.9%）と平年より少なかった。

・1か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並であるため、本病の発生を特には助長しない。

防除対策

・本病は、例年12月まで発生が見られるため、強風雨の前後に薬剤散布を行い、予防や感染の拡大防止に努める。

・被害残さは感染源となるため、ほ場外に持ち出し、適切に処分する。

●菌核病

予報の根拠

・11月中旬の巡回調査では、平均発病株率は0.2%（平年0.2%）と平年並だった。

・本病は気温20℃前後で雨の多い年に発生が多い。1か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並であるため、本病の発生を特には助長しない。

防除対策
・本病は例年12月まで発生が見られるため、薬剤の予防散布や被害の拡大防止に努める。
・被害残さは感染源となるため、ほ場外に持ち出し、適切に処分する。

●コナガ

予報の根拠
・11月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年害虫株率0.1%）。
・1か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並のため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策
・発生を確認したら早めに防除を行う。幼虫は葉裏に生息するので、薬剤が葉裏にかかるように散布する。

●オオタバコガ

予報の根拠
・11月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年害虫株率0.2%）。
・1か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並のため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策
・結球内部に入ってしまうと薬剤が届かないため、発生が見られたら早めに防除を行う。

●タマナギンウワバ

予報の根拠
・11月中旬の巡回調査では、平均害虫株率0.4%（平年0.5%）と平年並だった。
・1か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並のため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策
・幼虫の発育が進むと食害量が多くなるため、発生が見られたら早めに防除を行う。幼虫は葉裏を加害するため、防除の際は葉裏にも薬液が十分かかるように散布する。

●アブラムシ類

予報の根拠
・11月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年害虫株率0.7%）。
・1か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並のため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策
・本種は風通しの悪い場所に多く発生することから、例年発生が認められる場では発生に注意し、早めに防除を行う。

<その他の病害虫>

●ハスモンヨトウ

・11月中旬の巡回調査では、平均害虫株率が1.0%（平年0.02%）と平年よりも多かった。本種は気温の低下とともに幼虫の発生は減少するが、本年はフェロモントラップへの成虫誘殺数が平年に比べ多いため、幼虫の発生が認められたら早めに防除する。

防除対策
・肥料の過不足は発病を助長するので、施肥を適正に行う。
・薬剤防除は予防散布や発生初期の散布が効果的である。殺菌剤を連用する場合は、系統の異なる剤を選択し、散布する。

●黒斑病・葉枯病

予報の根拠
・11月中旬の巡回調査では、平均発病株率1.4%（平年3.3%）と平年より少なかった。
・黒斑病の分生子発芽・形成適温は24～27℃で、降雨が多いと発生が増加する。また、葉枯病の多発気温は15～20℃である。1か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並であるため、本病の発生を特には助長しない。

防除対策
・肥料切れで葉勢が低下すると発病しやすくなるので、適切に施肥を行う。
・薬剤散布は予防散布や発病初期の散布が効果的である。殺菌剤を連用する場合は、系統の異なる剤を選択し、散布する。

●ネギアザミウマ

予報の根拠
・11月中旬の巡回調査では、平均害虫株率は8.2%（平年12.8%）と平年より少なかった。被害程度を示す被害度は15.6（平年14.8）と平年並だった。
・1か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並のため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策
・12月に入り気温が下がると本種の活動が抑制され被害が目立たなくなるが、睡冬の年は冬期も増殖して被害を及ぼす恐れがあるため発生に注意する。成幼虫が葉の付け根等に集合、寄生しているため、発生状況を確認して防除を行う。

●ネギハモグリバエ

予報の根拠
・11月中旬の巡回調査では、平均害虫株率は7.8%（平年23.5%）と平年より少なかった。
・1か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並のため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策
・今後は気温の低下に伴い発生は減少するが、発生の見られるほ場は早めに防除する。
・本種は蛹が土壌中で越冬するため、多発生したほ場では、次作の定植前に土壌消毒を実施すると防除効果が高い。

<その他の病害虫>

●シロイチモジヨトウ、ハスモンヨトウ

・11月中旬の巡回調査では、シロイチモジヨトウの平均寄生株率が1.8%（平年0.2%）、ハスモンヨトウの平均寄生株率が0.6%（同0.04%）とどちらも平年より多かった。両種は気温の低下とともに幼虫の発生は減少するが、本年はフェロモントラップへの成虫誘殺数が平年に比べ多いため、幼虫の発生が認められたら早めに防除する。

【たまねぎ】

<生育の概況>

生育は、平年に比べ遅れている。

●腐敗病

予報の根拠
・11月中旬の巡回調査では、平均発病株率は19.2%（平年0.1%）と平年より多かった。
・病害虫防除員から本病の発生が平年より多いとの報告があった。
・1か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並であるため、本病の発生も平年と同様に増加すると考えられる。

防除対策
・本病は細菌病であり、強風雨等による傷口から侵入するため、強風雨の前後に薬剤散布を行い、予防や感染の拡大防止に努める。
・ネギアザミウマの食害も本病の感染を助長するため、発生に注意し、本種の防除を実施する。
・発病株は感染源となるため、速やかに抜き取り、ほ場外に持ち出し適切に処分する。
・防除対策については「技術情報第4号（たまねぎ 腐敗病）」も参照すること。

●ネギアザミウマ

予報の根拠
・11月中旬の巡回調査では、平均害虫株率は0.2%（平年19.7%）と平年より少なかった。被害程度を示す被害度は0.4（平年10.0）と平年よりも低かった。
・1か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並のため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策
・12月に入り気温が下がると、本種の活動が抑制され被害が目立たなくなるが、睡冬の年は冬期も増殖して被害を及ぼす恐れがあるため発生に注意する。成幼虫が葉の付け根等に集合、寄生しているため、発生状況を確認して防除を行う。

<その他の病害虫>

●シロイチモジヨトウ

・11月中旬の巡回調査では、平均害虫株率が0.6%（平年0.4%）と平年よりもやや多かった。本種は気温の低下とともに幼虫の発生は減少するが、本年はフェロモントラップへの成虫誘殺数が平年に比べ多いため、幼虫の発生が認められたら早めに防除する。

【ねぎ（白ねぎ）】

<生育の概況>

生育は平年より遅くなっている。

●さび病

予報の根拠
・11月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率1.3%）。
・1か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並であるため、本病の発生を特には助長しないが、例年12月は発生が増加するため注意する（本病の発病適温は10～22℃、降雨は本病の発生を助長する）。

【レタス（非結球レタスを除く）】

<生育の概況>

生育は平年よりやや早い。

●菌核病

予報の根拠
・11月中下旬の巡回調査では、本病の発生は認められなかった（平年発病株率0.1%）。
・1か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並のため、本病の発生を特には助長しない（本病は比較的低温で多湿条件を好むため、トンネル被覆後に結露するような高湿度になると発生が多くなる）。

防除対策
・発病は主に結球期以降であるが、結球前に薬剤の予防散布をして葉面の病原菌密度を下げることが重要である。
・降雨が続くときや初発を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。
・トンネル被覆後は、過湿にならないよう換気に努める。

●べと病

予報の根拠
・11月中下旬の巡回調査では、本病の平均発病株率は0.4%（平年0.2%）とほぼ平年並だった。
・1か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並のため、本病の発生を特には助長しない（本病は生育適温10～15℃であり、多湿条件を好むため、トンネル被覆後に結露するような高湿度になると発生が多くなる）。

防除対策
・初発を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。
・罹病残さは、ほ場外に処分する。
・トンネル被覆後は、過湿にならないよう換気に努める。

<その他の病害虫>

●ビッグベイン病

・11月中下旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率0.1%）。
・本病は土壌中に生息する菌によって媒介される土壌伝染性のウイルス病である。その ため、発病株の見られるほ場の土を、靴や農機具などにつけて他のほ場に持ち運ばないように注意する。

●ハスモンヨトウ

・11月中下旬の巡回調査では、平均害虫株率は1.3%（平年0.1%）と平年より多かった。
・フェロモントラップ調査における10月21日～11月20日の合計誘殺数は、3地点（静岡市、磐田市および御前崎市）すべてで平年より多く推移している。
・1か月予報では、降水量、気温ともにほぼ平年並のため、本種の発生を特には助長しない。
・本種は気温の低下とともに幼虫の発生は減少するが、本年はフェロモントラップへの成虫誘殺数が平年に比べ多いため、幼虫の発生が認められたら早めに防除する。

【いちご】

<生育の概況>

花芽の生育は平年より遅れている地域が多い。

●うどんこ病

予報の根拠

・11月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率1.2%）。

・1か月予報では、気温はほぼ平年並のため、本病の発生を特には助長しない。

防除対策

・胞子の発芽適温は20℃前後であり、施設内は本病の発生に好適な環境となるため予防に努める。

・多発生すると防除が困難になりやすいため、発病が少しでも見られた場合は早急に防除する。12月以降は果実への発生も多くなるため、発病果の早期発見と除去を徹底する。

●炭疽病

予報の根拠

・11月中旬の巡回調査では、平均発病株率は2.7%（平年1.4%）と平年より多かった。

・地域別の発病株率は、東部地域では0.6%（平年1.9%）、中部地域では3.0%（平年0.7%）、中遠地域では4.4%（平年1.6%）と、中部及び中遠地域での発生が多かった。

・1か月予報では、気温はほぼ平年並のため、本病の発生を特には助長しない。

防除対策

・発病株から周囲へと伝染するため、ほ場の見回りを徹底し発病株や、発病が疑われる株の早期発見に努める。発病株は培土ごと除き、ビニール袋に入れてほ場外へ出し、殺菌処理後に残さを処分する。

・本病原菌は水滴の飛散等によって伝染する。薬剤散布も伝染を助長する可能性があるため、殺虫剤のみの散布、感受性低下の疑われる剤（MBC殺菌剤（FRAC:1）、DMI殺菌剤（FRAC:3）、QoI殺菌剤（FRAC:11））の散布は避ける。

・発生状況及び防除対策については、「技術情報第5号（いちご 炭疽病）」も参照する。

●アブラムシ類

予報の根拠

・11月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は2.9%（平年4.7%）と平年より少なかったが、一部ほ場では多発していた。

・1か月予報では、気温はほぼ平年並のため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

・ほ場をよく観察し、初期防除に努める。

・天敵製剤を利用するほ場では、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択して防除する。

●ハダニ類

予報の根拠

・11月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は14.2%（平年16.0%）と平年よりやや少なかったが、一部ほ場では多発していた。

・1か月予報では、気温はほぼ平年並のため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

・寄生が認められた場合は、少発生のうちに防除する。

・ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、天敵や気門封鎖剤を利用する。なお、気門封鎖剤は卵への効果が低く残効性が期待できないため、5日間隔程度で連続散布する。

・天敵製剤を利用する場合は、ハダニ類及び天敵の発生状況をよく観察する。ハダニ類の発生が多い場合には、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択して防除する。

●アザミウマ類

予報の根拠

・11月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は5.6%（平年2.0%）と平年より発生が多かった。

・地域別の寄生株率は、東部地域で発生なし（平年0.3%）、中部地域で7.4%（平年4.1%）、中遠地域で9.4%（平年1.5%）と、中部及び中遠地域での発生が多かった。

・1か月予報では、気温はほぼ平年並のため、本種の発生を特には助長しない。ただし、本年は11月までの気温が平年より高く推移しており、施設内への本虫の侵入が助長されている。今後、既に施設内に侵入した個体が増殖し、果実被害の発生が予想されるため注意する。

防除対策

・本虫は花を好んで寄生する。苗における発生状況をよく観察し、本虫の寄生が認められた場合は少発生のうちに防除する。また、必要のない花は摘み取る。

・施設内外の雑草や花き類は、本虫の発生源となるため除去する。

・天敵製剤を利用するほ場では、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択して防除する。

・発生状況及び防除対策については、「技術情報第6号（いちご アザミウマ類）」も参照する。

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

・11月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は0.7%（平年0.3%）と平年より多かった。また、被害株率は8.9%（平年値なし、昨年9.0%）であった。

・フェロモントラップ調査における10月21日～11月20日の合計誘殺数は、3地点（静岡市、磐田市および御前崎市）すべてで平年より多く推移している。

・病害虫防除員からの報告によると、6名全員が本種の発生を「やや多い」または「多い」と回答した。

・1か月予報では、気温はほぼ平年並のため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

・気温の低下に伴い施設内への成虫の侵入は少なくなるが、発生を認めた場合は若齢幼虫のうちに防除する。

・発生状況及び防除対策については、「技術情報第3号（作物全般 ハスモンヨトウ）」も参照する。

3　季節予報

●1か月予報　（東海地方　令和６年１１月２１日　名古屋地方気象台発表）

【予報期間】　１１月２３日から１２月２２日

【予想される向こう1か月の天候】

向こう１か月	天候	平年と同様に晴れの日が多いでしょう。
１週目	気温	１週目は、平年並または高い確率ともに４０％です。

【確　率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多％
１か月	気温	３０	３０	４０
１か月	降水量	４０	３０	３０
１か月	日照時間	３０	３０	４０
１週目	気温	２０	４０	４０
２週目	気温	３０	３０	４０
３～４週目	気温	３０	４０	３０

【予報の対象期間】

１か月　　：１１月２３日（土）～１２月２２日（日）
１週目　　：１１月２３日（土）～１１月２９日（金）
２週目　　：１１月３０日（土）～１２月　６日（金）
３～４週目　：１２月　７日（土）～１２月２０日（金）

※ 利用上の注意

・気温・降水量は「低い（少ない）」「平年並」「高い（多い）」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1991～2020年の30年間における各階級の出現率が等分（それぞれ33%）となるように決めております。（気候的出現率と呼びます）。

・晴れや雪などの天気日数は、平年の日数よりも多い（少ない）場合は「平年に比べて多い（少ない）」、また25年の日数と同程度に多い（少ない）場合には「平年と同様に多い（少ない）」と表現します。なお、単に多い（少ない）と表現した場合には対象期間の2分の1より多い（少ない）ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病害虫防除所　〒438-0803　磐田市富丘678-1
TEL 0538-36-1543　FAX 0538-33-0760
ＵＲＬ　https://www.pref.shizuoka.jp/sangyoshigoto/norinjimusho/1058658/boujo/index.html

病害虫発生予察情報（1月予報）

令和６年 12 月 24 日
静岡県病害虫防除所長

1　予報概況

作物名	病害虫名	予報（1月の県平均平年値）	予報の根拠
トマト	葉かび病・すすかび病	発生量：少（発病株率 9.7%）	12月中旬発生量:少 (ー) 気象予報：気　温：低い (ー) 降水量：少ない (ー)
	灰色かび病	発生量：少（発病株率 3.8%）	12月中旬発生量:少（発生なし） (ー) 気象予報：気　温：低い (ー) 降水量：少ない (ー)
	黄化葉巻病	黄化葉巻病発生量：少（発病株率 2.2%）	12月中旬発生量:少 (ー) コナジラミ類発生量：やや少 (ー) 気象予報：気　温：低い (ー)
	コナジラミ類	発生量：やや少（寄生株率 11.4%）	12月中旬発生量:やや少 (ー) 防除員からの報告：やや多 (＋) 気象予報：気　温：低い (ー)
だいこん	白さび病	発生量：少（発病株率 7.5%）	12月上旬発生量:少（発生なし） (ー) 気象予報：気　温：低い (＋) 降水量：少ない (ー)
	モザイク病（アブラムシ類）	モザイク病発生量：並（発病株率 2.1%） アブラムシ類発生量：多（寄生株率 6.4%）	12月上旬発生量 モザイク病:少 (ー) アブラムシ類:多 (＋) 気象予報：気　温：低い (ー) 降水量：少ない (±)
	コナガ	発生量：並（寄生株率 0.5%）	12月上旬発生量:やや多 (＋) ﾌｪﾛﾓﾝﾄﾗｯﾌﾟ誘殺数:少～並 (ー～±) 気象予報：気　温：低い (ー) 降水量：少ない (±)
	ナモグリバエ	発生量：少（寄生株率：15.6%）	12月上旬発生量:少（発生なし） (ー) 気象予報：気　温：低い (ー) 降水量：少ない (±)
キャベツ	菌核病	発生量：少（1月平年値なし）	12月中旬発生量:少 (ー) 気象予報：気　温：低い (ー) 降水量：少ない (ー)
たまねぎ	灰色腐敗病	発生量：少（発病株率０%）	12月中旬発生量:並（発生なし） (ー) 気象予報：気　温：低い (ー) 降水量：少ない (ー)
	腐敗病	発生量：やや多（発病株率 1.2%）	12月中旬発生量:多 (＋) 気象予報：気　温：低い (ー) 降水量：少ない (ー)
	ネギアザミウマ	発生量：少（寄生株率 27.8%）	12月中旬発生量:少 (ー) 気象予報：気　温：低い (ー) 降水量：少ない (＋)

作物名	病害虫名	予報（1月の県平均平年値）	予報の根拠
ねぎ（白ねぎ）	さび病	発生量：少（1月平年値なし）	12月中旬発生量:少 (ー) 気象予報：気　温：低い (ー) 降水量:少ない (ー)
	べと病	発生量：少（1月平年値なし）	12月中旬発生量:少（発生なし） (ー) 気象予報：気　温：低い (ー) 降水量:少ない (ー)
レタス（非結球レタスを除く）	べと病	発生量：少（発病株率 1.5%）	12月中旬発生量:少（発生なし） (ー) 気象予報：気　温：低い (＋) 降水量:少ない (ー)
	斑点細菌病	発生量：少（発病株率 2.0%）	12月中旬発生量:少（発生なし） (ー) 気象予報：気　温：低い (＋) 降水量:少ない (ー)
いちご	灰色かび病	発生量：少（発病株率 0.5%）	12月上中旬発生量:少 (ー) 気象予報：気　温：低い (ー) 降水量:少ない (ー)
	うどんこ病	発生量：少（発病株率 1.1%）	12月上中旬発生量:少 (ー) 気象予報：気　温：低い (ー)
	炭疽病	発生量：多（発病株率 1.2%）	12月上中旬発生量:多 (＋) 防除員からの報告：やや多 (＋) 気象予報：気　温：低い (ー)
	アブラムシ類	発生量：少（寄生株率 1.6%）	12月上中旬発生量:少 (ー) 防除員からの報告：やや多 (＋) 気象予報：気　温：低い (ー)
	ハダニ類	発生量：並（寄生株率 14.0%）	12月上中旬発生量:並 (±) ただし、一部ほ場で多 防除員からの報告：やや多～多 (＋) 気象予報：気　温：低い (ー)
	アザミウマ類	発生量：並（寄生株率 2.5%）	12月上中旬発生量:並 (±) 防除員からの報告：やや多 (＋) 気象予報：気　温：低い (ー)

表の見方について

・予報の発生量は平年（静岡県の過去 10 年間）との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の５段階で示しています。

・予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年（静岡県の過去 10 年間）との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の５段階で示しています。

・予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況（調査時期と発生量）、気象庁の１ヶ月予報（気温と降水量）を記入しています。その状況が多発要因の場合は（＋）、少発要因の場合は（ー）を示し、＋ーを総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

農薬情報はこちらで検索！

静岡県農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準
https://www.s-boujo.jp/

静岡県病害虫防除所 HP が新しくなりました。

静岡県病害虫防除所 HP
https://www.pref.shizuoka.jp/sangyoshigoto/norinjimusho/1058658/boujo/index.html

2　予報の根拠と防除対策

【トマト】

＜生育の概況＞

生育は平年並～やや遅い。

●葉かび病・すすかび病

予報の根拠

・12月中旬の巡回調査では、平均発病株率は4.3%（平年 12.1%）と平年より少なかった。

・１か月予報では、気温は平年より低く、降水量は平年より少ないため、本病の発生を助長しない。ただし、例年12月以降はハウスの密閉による多湿で、発生が増加するため注意する（本病の生育適温は、葉かび病20～25℃、すすかび病27℃程度であり、特に多湿条件下で発生が多くなる）。

防除対策

・葉かび病については、葉かび病抵抗性品種（Cf-9）を侵すレース 2.9 の発生が県内で確認されている。

・本県では 12 月以降は葉かび病の発生が増加する傾向があるため、葉かび病抵抗性品種を栽培しているほ場でも薬剤の予防散布を行い、葉かび病の発生に注意する。

・本病は潜伏期間が２週間程度と長く、多発してからでは薬剤の効果が劣るため、発病が認められたら直ちに薬剤を散布する。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。

・多湿にならないように換気につとめ、過度のかん水を避ける。

・発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に搬出し、適切に処分する。特に多発生ほ場では摘み取り作業を徹底する。

●灰色かび病

予報の根拠

・12月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発病株率 2.8%）。

・１か月予報では、気温は平年より低く、降水量は平年より少ないため、本病の発生を助長しない。ただし、例年 12 月以降はハウスの密閉による多湿で、発生が増加するため注意する（本病の生育適温は 23℃程度であり、特に多湿条件下で発生が多くなる）。

防除対策

・株の繁茂やハウス内湿度の上昇により発生が増加するので、不要な下葉を除去するとともに、日中の換気を早めに行い、施設内の除湿に努める。

・予防に重点をおいた薬剤散布を行う。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。

・発病した果実や葉は伝染源となるため速やかに取り除き、ほ場外に搬出する。

・多湿にならないように換気につとめ、過度のかん水を避ける。

●黄化病害虫

予報の根拠

・12月中旬の巡回調査では、平均発病株率は0.3%（平年2.5%）と平年より少なかった。
・コナジラミ類は、平均寄生株率は10.0%（平年13.2%）と平年よりやや少なかった。
・1か月予報では、気温は平年より低いため、媒介虫であるタバココナジラミの増殖を助長しない。このため、本病の発生も助長しない。

防除対策

・本病はタバココナジラミによって媒介されるため、タバココナジラミの防除を徹底する。防除対策については、コナジラミ類の項を参照すること。
・発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取り、ハウス外の土中に埋めるか、ビニール袋に入れて蒸らせる等して適切に処分する。
・脇芽や摘果などの残さは放置すると野良生えとなり、媒介虫や本病の伝染源となるので、ほ場付近には放置しない。
・多発ほ場においては、耐病性品種の利用を検討する。なお、耐病性品種でも感染し、ウイルス密度が高まると発病するため、タバココナジラミの防除を徹底すること。

●コナジラミ類

予報の根拠

・12月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は10.0%（平年13.2%）と平年よりやや少なかった。
・病害虫防除員からは、４名中３名から本種の発生が「やや多い」との報告があった。
・1か月予報では、気温は平年より低いため、本種の発生を助長しない。

防除対策

・施設開口部に防虫ネット（目合い0.4mm以下）を設置し、侵入を抑制する。
・成虫の寄生や黄色粘着板の捕殺数に注意し、発生が確認された場合は薬剤防除を実施する。

【だいこん】

<生育の概況>

生育は平年並～やや遅い。

●白さび病

予報の根拠

・12月上旬の巡回調査では、発病は確認されなかった（平年発病株率2.5%）。
・1か月予報では、気温は平年より低いが、降水量は平年より少ないため、本病の発生を特には助長しない（本病は多湿を好み、分生子の発芽最適温度は10℃程度である）。

防除対策

・発病残さは翌年の伝染源となるため、ほ場に放置しない。
・排水を良好にするなどして多湿にならないように努める。

●モザイク病（アブラムシ媒）

予報の根拠

・12月上旬の巡回調査では、平均発病株率0.4%（平年1.7%）と平年より少なかった。
・本病の媒介虫であるアブラムシ類は、平均寄生株率24.9%（平年3.8%）と平年より多かった。
・1か月予報では、降水量は平年より少ないが、気温は平年より低いため、本病を媒介するアブラムシ類の増殖を助長しないが、アブラムシ類の平均寄生株率が平年より高いため、本病の発生が助長される。

防除対策

・雨が降らない日が続くとアブラムシ類が急増する場合があるので、ほ場内の発生に注意し、確認された場合は薬剤防除を実施する。
・被害株も伝染源となるため、速やかに抜き取り、適切に処分する。

●コナガ

予報の根拠

・12月上旬の巡回調査では、平均寄生株率は1.1%（平年0.7%）と平年よりやや多かった。
・11月21日～12月15日までのフェロモントラップによる本種の誘殺数は、浜松市では平年並に推移しており、牧之原市では平年より少なく推移している。
・1か月予報では、気温は平年より低いため、発生を助長しない。

防除対策

・発生が多い場合は、薬剤を葉裏にかかるように散布する。

●ナモグリバエ

予報の根拠

・12月上旬の巡回調査では、寄生が確認されなかった（平年寄生株率7.0%）。
・1か月予報では、気温は平年より低いため、本種の発生を助長しない。

防除対策

・上位葉に白点（産卵痕）や線描き状の食害痕が多数見られる場合は、防除を実施する。

【キャベツ】

<生育の概況>

収穫期に入っていて、生育は平年並～遅れている。

●黒腐病

予報の根拠

・12月中旬の巡回調査では、平均発病株率0.2%（平年0.4%）と平年より少なかった。
・1か月予報では、気温は平年より低く、降水量は平年より少ないため、本病の発生を助長しない。

防除対策

・収穫期に入っているほ場では防除の必要はないが、今後収穫予定のほ場では気象情報を確認し、降雨が予想される場合は発生に注意する。
・薬剤防除の際は、予防散布や発生初期の散布を徹底する。複数回散布する場合は、系統の異なる剤を選択する。

【たまねぎ】

<生育の概況>

生育は平年よりも遅れている。

●灰色腐敗病

予報の根拠

・12月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発生なし）。
・本病は多雨で発生が助長される。1か月予報では、気温は平年より低く、降水量は平年より少ないため、本病の発生を助長しない。

防除対策

・春期収穫の作型では、過剰な施肥や肥料の遅効は本病の発生を助長するため、適切な施肥管理に努める。
・例年発生が見られるほ場は、鱗茎への感染を予防するため、薬剤による防除を実施する。複数回散布する場合は、系統の異なる薬剤を選択する。
・罹病球やくず球は、ほ場付近に放置すると発生源となるため早期に取り除き、ほ場外に持ち出して適切に処分する。

●腐敗病

予報の根拠

・12月中旬の巡回調査では、平均発病株率2.0%（平年0.6%）と平年よりも多かった。
・病原細菌の生育適温は20～23℃で、強風雨や多湿な環境により発生が助長される。1か月予報では、気温は平年より低く、降水量は平年より少ないため、本病の発生を助長しない。

防除対策

・本病は細菌病であり、強風雨や凍霜害による傷口から侵入するため、強風雨の前後に薬剤散布を行い、予防や感染の拡大防止に努める。
・ネギアザミウマの食害も本病の感染を助長するため、発生に注意し、本種の防除を実施する。
・発病株は感染源となるため、速やかに抜き取り、ほ場外に持ち出し適切に処分する。
・防除対象については「技術情報第４号（たまねぎ 腐敗病）」も参照すること。

●ネギアザミウマ

予報の根拠

・12月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は2.2%（平年27.6%）と平年より少なかった。被害を示す被害度は2.6（平年15.7）と平年よりも低かった。
・1か月予報では、降水量は平年より少ないものの、気温は平年より低いため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

・例年1月は特に防除の必要はないが、温かい日が続くと増殖を始め、生息密度が高まるので、発生状況に応じて薬剤防除を実施する。

【ねぎ（白ねぎ）】

<生育の概況>

収穫は平年よりも遅れている。

●さび病

予報の根拠

・12月中旬の巡回調査では、平均発病株率0.2%（平年3.4%）と平年より少なかった。
・本病は、気温10～22℃の時期に降雨が続くと発生が多くなる。1か月予報では、気温は平年より低く、降水量は平年より少ないため、本病の発生を助長しない。

防除対策

・収穫期に入っているほ場では防除の必要はないが、今後収穫予定のほ場では気象情報を確認し、降雨が予想される場合は発生に注意する。
・薬剤防除の際は、予防散布や発生初期の散布を徹底する。複数回散布する場合は、系統の異なる剤を選択する。

●べと病

予報の根拠

・12月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発病株率0.5%）。
・本病は、気温15～20℃で降雨が続くと発生が多くなる。1か月予報では、気温は平年より低く、降水量は平年より少ないため、本病の発生を助長しない。

防除対策

・収穫期に入っているほ場では防除の必要はないが、今後収穫予定のほ場では気象情報を確認し、降雨が予想される場合は発生に注意する。
・薬剤防除の際は、予防散布や発生初期の散布を徹底する。

【レタス（非結球レタスを除く）】

<生育の概況>

生育は平年より早い傾向。

●べと病

予報の根拠

・12月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発病株率0.9%）。
・1か月予報では、気温は平年より低いが、降水量は平年より少ないため、本病の発生を特には助長しない（病原菌の生育適温は10～15℃で、多湿を好む）。
・トンネル被覆後に結露するような高湿度になると発生が多くなるので注意する。

防除対策

・初発を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。
・罹病残さは、ほ場外に適切に処分する。
・トンネル被覆後は、過湿にならないよう換気に努める。

●灰色腐敗病

予報の根拠

・12月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発病株率 0.7%）。

・1か月予報では、気温は平年より低いが、降水量は平年より少ないため、本病の発生を特には助長しない（本病は比較的低温で多湿条件を好むため、トンネル被覆後に結露するような高湿度になると発生が多くなる）。

防除対策

・発病は主に結球期以降であるが、結球前に薬剤の予防散布をして葉面の病原細菌密度を下げることが重要である。

・降雨が続くときや初発を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。

・トンネル被覆後は、トンネル内が高温多湿にならないよう換気に努める。

<その他の病害虫>

●菌核病

・12月中旬の巡回調査では、平均発病株率は 0.7%（平年 0.3%）と平年よりやや多かった。

・発病後の薬剤散布では効果が劣るため、常発地では定植後 30～40 日で、本葉が 8～10 枚程度出葉した頃を目安として予防散布を行う。

・発病株には菌核が形成されて伝染源となるので、ほ場に放置せず速やかに撤去する。

【いちご】

<生育の概況>

生育は平年より遅れている地域が多い。

●灰色かび病

予報の根拠

・12月上中旬の巡回調査では、平均発病株率は 0.1%（平年 0.3%）と平年より少なかった。

・1か月予報では、気温は平年より低く、降水量は平年より少ないため、本病の発生を助長しない。

防除対策

・本病は気温が 20℃前後、多湿条件下で多発生するため、施設内の多湿、植物体の結露は、本病の発生を著しく助長する。循環扇や暖房機の利用、換気、かん水量の調整等で湿度を管理し、耕種的な対策を行う。

・曇雨天が続く場合は、施設内の多湿を避けるために薬液散布でなく、くん煙剤を利用した防除を行う。

・株が過繁茂となると発生が助長されるため、下葉や不要な果梗枝の除去を適切に行う。また、発病した果実や葉柄は有力な伝染源となるため速やかに除去し、ほ場外で処分する。

・発病前から定期的に予防散布を行う。薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

●うどんこ病

予報の根拠

・12月上中旬の巡回調査では、平均発病株率は 0.5%（平年 1.4%）と平年より少なかった。

・1か月予報では、気温は平年より低いため、本病の発生を助長しない。

防除対策

・胞子の発芽適温は 20℃前後であり、施設内は本病の発生に好適な環境となるため、発生予防に努める。

・多発生すると防除が困難であるため初期発生に注意し、発病が確認されたら速やかに防除を行う。

・株が過繁茂となると発生が助長されるため、下葉除去を適切に行う。果実でも頻繁に発生するため、発病果の速やかな除去を徹底する。

●炭疽病

予報の根拠

・12月上中旬の巡回調査では、平均発病株率は 1.8%（平年 1.2%）と平年より多かった。

・いちご病害虫防除員 6 名からの報告によると、本病の発生について 4 名が「やや多い」と回答した。

・1か月予報では、気温は平年より低いため、本病の発生を助長しない。

防除対策

・発病株から周囲へと伝染するため、ほ場の見回りを徹底し発病株や、発病が疑われる株の早期発見に努める。発病株は培土ごと取り除き、ビニール袋に入れてほ場外へ持ち出し、殺菌処理後に廃さを処分する。

・本病原菌は水滴の飛散等によって伝染する。薬剤散布も伝染を助長する可能性があるため、殺虫剤のみの散布、感受性低下の疑われる剤（SDHI 殺菌剤（FRAC：1）、DMI 殺菌剤（FRAC：3）、QoI 殺菌剤（FRAC：11））の散布は避ける。

・厳冬期も緩やかに病勢は進展するため、新たな発病に注意する。また、開花、着果により株に負担がかかると萎凋症状が助長する場合がある。

・発生状況及び防除対策については、「技術情報第５号（いちご 炭疽病）」も参照する。

●アブラムシ類

予報の根拠

・12月上中旬の巡回調査では、平均寄生株率は 1.2%（平年 2.8%）と平年より少なかった。

・いちご病害虫防除員 6 名からの報告によると、本種の発生について 4 名が「やや多い」と回答した。

・1か月予報では、気温は平年より低いため、本種の発生を助長しない。

防除対策

・冬期は施設内への侵入は少なくなるが、ほ場をよく観察し、初期防除に努める。

・天敵製剤を利用しているほ場では、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択して防除する。

●ハダニ類

予報の根拠

・12月上中旬の巡回調査では、平均寄生株率は 19.6%（平年 18.6%）と平年並であったが、一部ほ場では多発していた。

・いちご病害虫防除員 6 名からの報告によると、本種の発生について 4 名が「やや多い」または「多い」と回答した。

・1か月予報では、気温は平年より低いため、本種の発生を助長しない。

防除対策

・寄生が認められた場合は、少発生のうちに防除する。

・ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、天敵や気門封鎖剤を利用する。なお、気門封鎖剤は卵への効果が低く残効性が期待できないため、５日間隔程度で連続散布する。

・天敵製剤を利用する場合は、ハダニ類及び天敵の発生状況をよく観察する。ハダニ類の発生が多い場合には、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択して防除する。

●アザミウマ類

予報の根拠

・12月上中旬の巡回調査では、平均寄生株率は 2.7%（平年 2.6%）と平年並であった。

・いちご病害虫防除員 6 名からの報告によると、本種の発生について 4 名が「やや多い」と回答した。

・1か月予報では、気温は平年より低いため、本種の発生を助長しない。

防除対策

・本虫は花を好んで寄生する。花における発生状況をよく観察し、本虫の寄生が認められた場合は少発生のうちに防除する。また、必要のない花は摘み取る。

・施設内外の雑草や花き類は、本虫の発生源となるため除去する。

・天敵製剤を利用するほ場では、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択して防除する。

・発生状況及び防除対策については、「技術情報第６号（いちご アザミウマ類）」も参照する。

３　季節予報

●１か月予報　（東海地方　令和６年１２月１９日　名古屋地方気象台発表）

【予報期間】　１２月２１日から１月２０日

【予想される向こう１か月の天候】

特に注意を要する事項		２週目は、気温がかなり低くなる可能性があり、岐阜県山間部を中心に降雪量がかなり多くなる可能性があります。
向こう１か月	天候	平年に比べ晴れの日が多いでしょう。
	気温	平均気温は、低い確率５０％です。
	降水量	降水量は、少ない確率５０％です。
	日照時間	日照時間は、多い確率５０％です。
１週目	気温	１週目は、平年並の確率５０％です。
２週目	気温	２週目は、低い確率６０％です。
３～４週目	気温	３～４週目は、平年並または低い確率ともに４０％です。

【確　率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多％
１か月	気温	５０	４０	１０
１か月	降水量	５０	３０	２０
１か月	日照時間	２０	３０	５０
１週目	気温	４０	５０	１０
２週目	気温	６０	３０	１０
３～４週目	気温	４０	４０	２０

【予報の対象期間】

１か月　　：１２月２１日（土）～　１月２０日（月）
１週目　　：１２月２１日（土）～１２月２７日（金）
２週目　　：１２月２８日（土）～　１月　３日（金）
３～４週目　：　１月　４日（土）～　１月１７日（金）

※ 利用上の注意

・気温・降水量は「低い（少ない）」「平年並」「高い（多い）」の３つの階級で予報します。階級の幅は、1991～2020 年の 30 年間における各階級の出現率が等分（それぞれ 33%）となるように決めてあります。（気候的出現率と呼びます）。

・晴れや雪などの天気日数は、平年の日数よりも多い（少ない）場合は「平年に比べて多い（少ない）」、また平年の日数と同程度に多い（少ない）場合には「平年と同様に多い（少ない）」と表現します。なお、単に多い（少ない）と表現した場合には対象期間の２分の１より多い（少ない）ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病害虫防除所　〒438-0803　磐田市富丘678-1
TEL 0538-36-1543　FAX 0538-33-0780
URL　https://www.pref.shizuoka.jp/sangyoshigoto/norinjimusho/1058658/boujo/index.html

病害虫発生予察情報（2月予報）

令和７年１月 28 日
静岡県病害虫防除所長

１　予報概況

作物名	病害虫名	予報 （２月の県平均平年値）	予報の根拠
トマト	葉かび病・すすかび病	発 生 量：やや少 （発病株率 6.5%）	１月中下旬発生量：少 (ー) 気象予報：気　温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	灰色かび病	発 生 量：やや少 （発病株率 6.9%）	１月中下旬発生量：少 (ー) 気象予報：気　温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	黄化葉巻病	発 生 量：やや少 （発病株率 1.8%）	１月中下旬発生量：少 (ー) コナジラミ類発生量：やや少 (ー) 気象予報：気　温：高い (＋)
	コナジラミ類	発 生 量：並 （寄生株率 8.5%）	１月中下旬発生量：やや少 (ー) 気象予報：気　温：高い (＋)
たまねぎ	腐敗病	発 生 量：やや多 （発病株率 1.2%）	１月中旬発生量：並 (±) 気象予報：気　温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	灰色腐敗病	発 生 量：やや多 （発病株率０%）	１月中旬発生量：並（発生なし） (±) 防除員からの報告：やや多 (＋) 気象予報：気　温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	ネギアザミウマ	発 生 量：やや少 （寄生株率 32.0%）	１月中旬発生量：少 (ー) 気象予報：気　温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
レタス（非結球レタスを除く）	べと病	発 生 量：少 （発病株率 1.7%）	１月上旬発生量：少（発生なし） (ー) 気象予報：気　温：高い (ー) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	斑点細菌病	発 生 量：少 （発病株率 3.1%）	１月上旬発生量：少（発生なし） (ー) 気象予報：気　温：高い (ー) 降水量：ほぼ平年並 (±)
いちご	灰色かび病	発 生 量：やや少 （発病株率 0.6%）	１月上中旬発生量：少（発生なし） (ー) 気象予報：気　温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	うどんこ病	発 生 量：多 （発病株率 0.8%）	１月上中旬発生量：やや多 (＋) 気象予報：気　温：高い (＋)
	炭疽病	発 生 量：多 （発病株率 1.0%）	１月上中旬発生量：やや多 (＋) 気象予報：気　温：高い (＋)
	アブラムシ類	発 生 量：多 （寄生株率 1.8%）	１月上中旬発生量：やや多 (＋) ただし、東部地域は多 (＋) 気象予報：気　温：高い (＋)
	ハダニ類	発 生 量：多 （寄生株率 13.3%）	１月上中旬発生量：多 (＋) 防除員からの報告：やや多～多 (＋) 気象予報：気　温：高い (＋)
	アザミウマ類	発 生 量：やや少 （寄生株率 6.0%）	１月上中旬発生量：少 (ー) 気象予報：気　温：高い (＋)

表の見方について

- 予報の発生量は平年（静岡県の過去 10 年間）との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の５段階で示しています。
- 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年（静岡県の過去 10 年間）との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の５段階で示しています。
- 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況（調査時期と発生量）、気象庁の１ヶ月予報（気温と降水量）を記入しています。その状況が多発要因の場合は（＋）、少発要因の場合は（ー）を示し、＋ーを総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

農薬情報はこちらで検索！

静岡県農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準
https://www.s-boujo.jp/

静岡県病害虫防除所 HP が新しくなりました。

静岡県病害虫防除所 HP
https://www.pref.shizuoka.jp/sangyo_shigoto/norinjimusho/1058658/boujo/index.html

２　予報の根拠と防除対策

【トマト】

＜生育の概況＞

生育は平年並～遅い。

●葉かび病・すすかび病

予報の根拠

・１月中下旬の巡回調査では、平均発病株率は 3.2%（平年 9.7%）と平年より少なかった。
・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本病の発生をやや助長する。また例年 12 月以降は、ハウスの密閉による多湿で、発生が増加するため注意する（生育適温は、葉かび病 20～25℃、すすかび病 27℃程度であり、特に多湿条件下で発生が多くなる）。

防除対策

・葉かび病については、葉かび病抵抗性品種（*Cf-9* を侵すレース 2.9 の発生が県内で確認されている。本県では 12 月以降は葉かび病の発生が増加する傾向があるため、葉かび病抵抗性品種を栽培しているほ場でも薬剤の予防散布を行い、葉かび病の発生に注意する。
・本病は潜伏期間が２週間程度と長く、多発してからでは薬剤の効果が劣るため、発病が認められたら直ちに薬剤を散布する。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
・多湿にならないように換気につとめ、過度のかん水を避ける。
・発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に搬去し、適切に処分する。特に多発生ほ場では摘み取り作業を徹底する。

●灰色かび病

予報の根拠

・１月中下旬の巡回調査では、平均発病株率は 0.6%（平年 3.8%）と平年より少なかった。
・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本病の発生をやや助長する。また例年 12 月以降は、ハウスの密閉による多湿で、発生が増加するため注意する（本病の生育適温は 23℃程度であり、特に多湿条件下で発生が多くなる）。

防除対策

・株の繁茂やハウス内湿度の上昇により発生が増加するので、不要な下葉を除去するとともに、日中の換気を早めに行い、施設内の除湿に努める。
・予防に重点をおいた薬剤散布を行う。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
・発病した果実や葉菜は伝染源となるため速やかに取り除き、ほ場外に搬去する。
・多湿にならないように換気につとめ、過度のかん水を避ける。

●黄化葉巻病

予報の根拠

・１月中下旬の巡回調査では、平均発病株率は 0.3%（平年 2.2%）と平年より少なかった。
・コナジラミ類の平均寄生株率は、7.0%（平年 11.4%）と平年よりややや少なかった。
・１か月予報では、気温は平年より高いため、媒介虫であるタバココナジラミが増殖しやすい。このため、本病の発生も助長される。

防除対策

・本病はタバココナジラミによって媒介されるため、タバココナジラミの防除を徹底する。防除対策については、コナジラミ類の項を参照すること。
・発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取り、ハウス外の土中に埋めるか、ビニール袋に入れて腐らせる等して適切に処分する。
・脇芽や摘果などの残さは放置すると野良生えとなり、媒介虫や本病の伝染源となるので、ほ場付近には放置しない。
・多発ほ場においては、耐病性品種の利用を検討する。なお、耐病性品種でも感染し、ウイルス密度が高まると発病するため、タバココナジラミの防除を徹底すること。

●コナジラミ類

予報の根拠

・１月中下旬の巡回調査では、平均寄生株率は 7.0%（平年 11.4%）と平年よりやや少なかった。
・１か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

・施設開口部に防虫ネット（目合い 0.4mm 以下）を設置し、侵入を抑制する。
・成虫の寄生や黄色粘着板の捕獲数に注意し、発生が確認された場合は薬剤防除を実施する。

【たまねぎ】

＜生育の概況＞

生育は平年に比べ遅れている。

●腐敗病

予報の根拠

・１月中旬の巡回調査では、平均発病株率 1.2%（平年 1.2%）と平年並だったが、一部のほ場において下葉での発生が目立った。
・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本病の発生を助長する。

防除対策

▪本病は鱗茎病であり、凍霜害や強風雨による傷口から侵入するため、傷んだ葉がある場合は、強風雨の前後に薬剤散布を行い、予防や感染の拡大防止に努める。
・ネギアザミウマによる食害も本病の感染を助長するため、発生に注意し、本種の防除を実施する。
・発病株は感染源となるため、速やかに抜き取り、ほ場外に持ち出し適切に処分する。
・収穫後の植物残さは本病の伝染源となるため、１か所にまとめ、ビニールで被覆し菌を死滅させるなどして適切に処分する。
・発生状況及び防除対策については、「技術情報第４号（たまねぎ　腐敗病）」も参照する。

●灰色かび病

予報の根拠

・１月中旬の巡回調査では、蔓葉に発生は認められなかった（平年発生なし）。

・防除員からの報告では、本病の発生について「やや多い」と回答があった。

・本病は多雨で発生が助長される。１か月予報では降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

・降雨が続く場合は、薬剤散布により防除する。

・被害株やくず球は、ほ場付近に放置すると発生源となるため早期に取り除き、ほ場外に持ち出し処分する。

●ネギアザミウマ

予報の根拠

・１月中旬の巡回調査では、平均寄生株率1.4%（平年27.8%）と平年よりも少なかった。被害程度を示す被害度は、1.4（平年17.4）と平年より低かった。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

防除対策

・本種の発生が確認されていて、収穫までに２週間以上を要するほ場では防除を実施する。成幼虫ともに葉と葉の隙間に多く寄生しているので、寄生部位に薬液が十分かかるように丁寧に散布する。

【レタス（非結球レタスを除く）】

<生育の概況>

生育はやや早い～遅く、地域によりばらつきがある。

●べと病

予報の根拠

・１月上旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率1.5%）。

・１か月予報では、気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並のため、本病の発生を助長しない（病原菌の生育適温は10～15℃で、多湿を好む）。

防除対策

・本病原菌は空気伝染するため、近隣のほ場で発生が確認されている場合は薬剤の予防散布を行う。

・初発生を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。

・罹病残さはほ場外に処分する。

・トンネル内が多湿にならないよう換気に努める。

●菌核細菌病

予報の根拠

・１月上旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率2.0%）。

・１か月予報では、気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並のため、本病の発生を助長しない（本病は比較的低温で多湿条件を好むため、トンネル被覆後に結露するような高湿度になると発生が多くなる）。

・凍霜害は葉縁を傷めて病原細菌の感染を助長させるため、発生に注意する。

防除対策

・降雨が続くときや初発生を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。

・トンネル内が多湿にならないよう換気に努める。

<その他の病害虫>

●ビッグベイン病

・１月上旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率1.9%）。

・本病は土壌中に生息する菌によって媒介される土壌伝染性のウイルス病である。そのため、発病株の見られるほ場の土を鉢や農機具などにつけて他のほ場に持ち運ばないように注意する。また、発病株は根ごと取り除き、土壌中のウイルス保毒菌量を少なくするように心がける。

【いちご】

<生育の概況>

生育は県下全域で平年よりやや遅く推移している。

●灰色かび病

予報の根拠

・１月上中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年平均発病株率0.5%）。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

・本病は気温が20℃前後、多湿条件下で多発生するため、施設内の多湿、植物体の過繁は、本病の発生を著しく助長する。循環扇や暖房機の利用、換気、かん水量の調整等で湿度を管理し、耕種的な対策を行う。

・雨由天が続く場合は、施設内の多湿を避けるために薬液散布でなく、くん煙剤を利用した防除を行う。

・株が過繁茂となると発生が助長されるため、下葉や不要な果梗枝の除去を適切に行う。また、発病した果実や茎葉は伝染源となるため速やかに除去し、ほ場外で処分する。

・発病前から定期的に予防散布を行う。薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

●うどんこ病

予報の根拠

・１月上中旬の巡回調査では、一部ほ場で多発していたことから、平均発病株率は1.3%（平年1.1%）と平年よりやや多かった。

・１か月予報では、気温は平年より高いため、本病の発生を助長する。

防除対策

・胞子の発芽適温は20℃前後であり、施設内は本病の発生に好適な環境となるため、発生予防に努める。

・多発生すると防除が困難であるため、初期発生に注意し発病が確認されたら速やかに防除を行う。

・株が過繁茂となると発生が助長されるため、下葉除去を適切に行う。果実でも頻繁に発生するため、発病果の速やかな除去を徹底する。

●炭疽病

予報の根拠

・１月上中旬の巡回調査では、平均発病株率は1.4%（平年1.2%）と平年よりやや多かった。ただし、例年に比べ欠株や補植が目立った。

・１か月予報では、気温は平年より高いため、本病の発生を助長する。

防除対策

・発病株から周囲へと伝染するため、ほ場の見回りを徹底し、発病株や発病が疑われる株の早期発見に努める。

・発病株は培地も含めて抜き取り、ビニール袋に入れてほ場外へ出す。放置残さは伝染源となるため、殺菌処理を行ってから処分する。

・本病原菌は水滴の飛散等によって伝染する。薬剤散布も伝染を助長する可能性があるため、殺虫剤のみの散布、感受性低下の疑われる剤（MBC殺菌剤（FRAC：１）、DMI殺菌剤（FRAC：３）、Qoi殺菌剤（FRAC：11））の散布は避ける。

・厳冬期も緩やかに病徴は進展するため、新たな発病に注意する。また、開花、着果により株に負担がかかると萎凋症状が連続する場合がある。

・発生状況及び防除対策については、「技術情報第５号（いちご 炭疽病）」も参照する。

●アブラムシ類

予報の根拠

・１月上中旬の巡回調査では、平均寄生株率は1.9%（平年1.6%）と平年よりやや多かった。

・地域別の平均寄生株率は、東部地域で2.0%（平年0.7%）、中部地域で2.6%（平年2.6%）、中遠地域で1.0%（平年1.3%）と、東部地域では発生が多かった。

・１か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

・ほ場をよく観察し、初期防除に努める。

・天敵を利用しているほ場では、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択して防除する。

●ハダニ類

予報の根拠

・１月上中旬の巡回調査では、平均寄生株率は19.7%（平年14.0%）と平年より多かった。

・地域別の平均寄生株率は、東部地域で7.4%（平年11.0%）、中部地域で19.8%（平年21.8%）、中遠地域で31.8%（平年9.2%）と、特に中遠地域で発生が多かった。

・いちご病害虫防除員６名からの報告によると、本種の発生について４名が「やや多い」、１名が「多い」と回答した。

・１か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

・寄生が認められた場合は、少発生のうちに防除する。

・ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、天敵や気門封鎖剤を利用する。なお、気門封鎖剤は卵への効果が低く残効性が期待できないため、５日間隔程度で連続散布する。

・天敵製剤を利用する場合は、ハダニ類及び天敵の発生状況をよく観察する。ハダニ類の発生が多い場合には、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択して防除する。

●アザミウマ類

予報の根拠

・１月上中旬の巡回調査では、平均寄生株率は0.7%（平年2.5%）と平年より少なかった。

・１か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

・本虫は花を好んで寄生する。花における発生状況をよく観察し、本虫の寄生が認められた場合は少発生のうちに防除する。また、必要のない花は摘み取る。

・施設内外の雑草や花き類は、本虫の発生源となるため除去する。

・天敵製剤を利用するほ場では、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択して防除する。

・発生状況及び防除対策については、「技術情報第６号（いちご アザミウマ類）」も参照する。

【畑】

<その他病害虫>

●スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）

防除対策

・県内全域で分布が拡大している。未発生地域への人為的な貝の持ち込みを防ぐため、トラクター等の農業機械を使用する際は作業するほ場の順番を考慮するとともに、既発生ほ場から土が移動する危険がある場合には農業機械を洗浄するなどの対策をとる。

・昨年７～９月に水田内や水路で赤橙色の卵塊が見られた地域では、水田内で越冬している可能性がある。

・本種は低温に比較的弱いが、土中の貝は生き残るため、２月中にロータリー耕を行い、越冬貝を粉砕する。ロータリー耕は細かく、また回数が多いほど効果が高い。

・周辺水路内に泥が残っていると、その中でも越冬するので、水路から泥を上げて貝を粉砕する。

・スクミリンゴガイには、人体に有害な寄生虫（広東住血線虫）が寄生している可能性があるので、貝に触る場合は必ずゴム手袋を着用する。

【小麦】

<その他病害虫>

●うどんこ病・赤さび病

・昨年５月上旬の巡回調査では、うどんこ病の平均発病株率は１.０%（平年 20.2%）と平年より少なかった。また、赤さび病の平均発病株率も２.６%（平年 15.1%）と平年より少なかった。

・本県の奨励品種である「きぬあかり」はうどんこ病にやや弱く、「イワイノダイチ」、「農林６１号」より赤さび病も発生しやすい。またうどんこ病の第一次伝染源は、前年の被害残さで越冬した病原菌であり、赤さび病の第一次伝染源は、ほ場に落下した穀粒で越夏した病原菌である。よって前年多発したほ場では発生に注意する。

・窒素肥料の過多を避ける。

【茶】

<その他の病害虫>

●炭疽病

・病原菌は細菌であり、主に強風雨によって伝染し、傷口から感染する。また、本病は寒害、凍害によって発生が助長されるため注意する。

・常発ほ場では予防的に薬剤散布を行うことが望ましい。特に、幼木園や、「つゆひかり」、「おくひかり」などの品種は本病に弱いため注意が必要である。

３　季節予報

●１か月予報　（東海地方　令和７年１月２３日　名古屋地方気象台発表）

【予報期間】　１月２５日から２月２４日

【予想される向こう１か月の天候】

向こう１か月	天候	平年と同様に晴れの日が多いでしょう。
	気温	平均気温は、高い確率５０％です。
１週目	気温	１週目は、高い確率５０％です。
２週目	気温	２週目は、高い確率５０％です。
３～４週目	気温	３～４週目は、平年並または高い確率ともに４０％です。

【確　率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多％
１か月	気温	２０	３０	５０
１か月	降水量	３０	３０	４０
１か月	日照時間	３０	４０	３０
１週目	気温	１０	３０	６０
２週目	気温	２０	３０	５０
３～４週目	気温	２０	４０	４０

【予報の対象期間】

１か月　：　１月２５日（土）～　２月２４日（月）
１週目　：　１月２５日（土）～　１月３１日（金）
２週目　：　２月　１日（土）～　２月　７日（金）
３～４週目　：　２月　８日（土）～　２月２１日（金）

※ 利用上の注意

・気温・降水量は「低い（少ない）」「平年並」「高い（多い）」の３つの階級で予報します。階級の幅は、1991～2020 年の 30 年間における各階級の出現率が等分（それぞれ 33%）となるように決めてあります。（気候的出現率と呼びます）。

・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い（少ない）場合は「平年に比べて多い（少ない）」、また平年の日数と同程度に多い（少ない）場合には「平年と同様に多い（少ない）」と表現します。なお、単に多い（少ない）と表現した場合には対象期間の２分の１より多い（少ない）ことを意味します。

お問い合わせ先

静岡県病害虫防除所　〒438-0803　磐田市富丘678-1
TEL 0538-36-1543　FAX 0538-33-0780
ＵＲＬ　https://www.pref.shizuoka.jp/sangyoshigoto/norinjimusho/1056658/boujo/index.html

病害虫発生予察情報（3月予報）

令和７年２月 26 日
静岡県病害虫防除所長

１　予報概況

作物名	病害虫名	予報 （３月の最平年値）	予報の根拠
茶	赤焼病	発 生 量：少 （発病葉数 0.08 枚/1.25㎡）	２月上中旬発生量：少（発生なし）（－） 気象予報：気　温：平年並　（±） 降水量：ほぼ平年並　（±）
	カンザワハダニ	発 生 量：並 （樹冠面寄生葉率 1.1%）	２月上中旬発生量：並　（±） 気象予報：気　温：平年並　（±） 降水量：ほぼ平年並　（±）
トマト	灰色かび病	発 生 量：少 （発病株率 10.1%）	２月中旬発生量：少　（－） 気象予報：気　温：平年並　（±） 降水量：ほぼ平年並　（±）
	葉かび病・すすかび病	発 生 量：並 （発病株率 5.8%）	２月中旬発生量：やや少　（－） 気象予報：気　温：平年並　（±） 降水量：ほぼ平年並　（±）
	黄化葉巻病	発 生 量：少 （発病株率 1.7%）	２月中旬発生量：少　（－） コナジラミ類発生量：並　（±） 気象予報：気　温：平年並　（±）
	コナジラミ類	発 生 量：並 （寄生株率 9.8%）	２月中旬発生量：並　（±） 気象予報：気　温：平年並　（±）
たまねぎ	腐敗病	発 生 量：少 （発病株率 5.3%）	２月中旬発生量：少　（－） 気象予報：気　温：平年並　（±） 降水量：ほぼ平年並　（±）
	灰色腐敗病	発 生 量：並 （発病株率 0%）	２月中旬発生量：並（発生なし）（±） 気象予報：気　温：平年並　（±） 降水量：ほぼ平年並　（±）
	ネギアザミウマ	発 生 量：少 （寄生株率 40.1%）	２月中旬発生量：少　（－） 気象予報：気　温：平年並　（±） 降水量：ほぼ平年並　（±）
いちご	灰色かび病	発 生 量：少 （発病株率 2.2%）	２月上中旬発生量：少（発生なし）（－） 気象予報：気　温：平年並　（±） 降水量：ほぼ平年並　（±）
	うどんこ病	発 生 量：少 （発病株率 0.8%）	２月上中旬発生量：少（発生なし）（－） 気象予報：気　温：平年並　（±）
	炭疽病	発 生 量：並 （発病株率 1.2%）	２月上中旬発生量：並　（±） 気象予報：気　温：平年並　（±）
	アザミウマ類	発 生 量：やや少 （寄生株率 11.8%）	２月上中旬発生量：少　（－） 気象予報：気　温：平年並　（±）
	ハダニ類	発 生 量：多 （寄生株率 12.3%）	２月上中旬発生量：多　（＋） 気象予報：気　温：平年並　（±）
	アブラムシ類	発 生 量：やや多 （寄生株率 2.3%）	２月上中旬発生量：やや多　（＋） 気象予報：気　温：平年並　（±）

表の見方について

- 予報の発生量は平年（静岡県の過去 10 年間）との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の５段階で示しています。
- 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年（静岡県の過去 10 年間）との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の５段階で示しています。
- 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況（調査時期と発生量）、気象庁の1ヶ月予報（気温と降水量）を記入しています。その状況が多発要因の場合は（＋）、少発要因の場合は（－）を示し、＋－を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。





２　予報の根拠と防除対策

【茶】

＜生育の概況＞

２月上中旬の巡回調査では、寒害と思われる症状の発生は認められなかった。

●赤焼病

予報の根拠

・２月上中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率 0.07 枚/1.25 ㎡）。
・１か月予報では、気温は平年並で、降水量はほぼ平年並のため、本病の発生を特には助長しない。

防除対策

・幼木園や「つゆひかり」は特に本病に弱いので発生に注意する。
・昨年発生が見られた茶園や常発茶園では、３月上旬に薬剤による防除を行う。発生が広がるようであれば、１回目防除の 20 日後を目処に追加防除を行う。
・本病は、強風雨などで傷害を受けると発生が助長される。現在、発生が見られない茶園でも、これからの発生に注意し、発生が見られたら早めに防除する。

●カンザワハダニ

予報の根拠

・２月上中旬の巡回調査では、樹冠面での平均寄生葉率は 0.5%（平年 0.5%）、株部での平均寄生葉率は 1.1%（平年 1.4%）と、平年並だった。
・巡回時の休眠調査では、調査した雌成虫のうち平均 72.1%（平年 86.5%）が休眠しておらず、産卵を始めている。１か月予報では、気温は平年並、降水量はほぼ平年並なため、今後の発生の増加も平年並と予想される。

防除対策

・樹冠面の葉に寄生が見られる茶園では早めに防除を行う。葉裏に薬液が十分届くように散布する。
・株部の葉に寄生が見られる茶園では、発生に注意し、ハダニが樹冠面に上がってくるようであれば早めに防除を行う。

【トマト】

＜生育の概況＞

生育は平年並～やや遅い。

●灰色かび病

予報の根拠

・２月中旬の巡回調査では、平均発病株率は 2.4%（平年 6.9%）と平年より少なかった。
・１か月予報では、気温は平年並、降水量はほぼ平年並のため、本病の発生を特には助長しない。なお、ハウスの密閉は多湿となりやすく、本病の発生を助長するため注意する（本病の生育適温は 18～23℃程度であり、特に多湿条件下で発生が多くなる）。

防除対策

・株の繁茂やハウス内湿度の上昇により発生が増加するので、不要な下葉を除去するとともに、日中の換気を早めに行い、施設内の除湿に努める。
・予防に重点をおいた薬剤散布を行う。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、作用機構の異なる剤をローテーションで使用する。
・発病した果実や茎葉の表面には病原菌の胞子が多量に形成されて伝染源となる。そのため、発病部位および残さは速やかに圃場の外に持ち出して処分する。

●葉かび病・すすかび病

予報の根拠

・２月中旬の巡回調査では、平均発病株率は 4.8%（平年 6.5%）と平年よりやや少なかった。
・１か月予報では、気温は平年並、降水量はほぼ平年並のため、本病の発生を特には助長しない。なお、ハウスの密閉は多湿となりやすく、本病の発生を助長するため注意する（本病の生育適温は、葉かび病 20～25℃、すすかび病 27℃程度と比較的高温を好み、多湿条件下で発生が多くなる）。

防除対策

・葉かび病については、抵抗性品種（*Cf-9* を侵すレース 2.9 の発生が県内で確認されている。本県では 12 月以降、発生が増加する傾向があるため、抵抗性品種を栽培しているほ場でも薬剤の予防散布を行い、発生に注意する。
・本病は潜伏期間が２週間程度と長く、多発してからでは薬剤の効果が劣るため、発病が認められたら直ちに薬剤を散布する。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、作用機構の異なる剤をローテーションで使用する。
・多湿にならないように換気につとめ、過度のかん水を避ける。
・発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に持ち出して処分する。

●黄化葉巻病

予報の根拠

・２月中旬の巡回調査では、平均発病株率は 0.3%（平年 1.8%）と平年より少なかった。
・コナジラミ類の平均寄生株率は 8.2%（平年 8.5%）と平年並であった。
・１か月予報では、気温は平年並のため、媒介虫であるタバココナジラミの増殖も平年並と予想される。このため、本病の発生も特には助長しない。

防除対策
・本病はタバココナジラミによって媒介されるため、タバココナジラミの防除を徹底する。防除対策については、コナジラミ類の項を参照すること。
・発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取り、ハウス外の土中に埋めるか、ビニール袋に入れて腐らせる等して適切に処分する。
・脇芽や摘果などの残さは放置すると野良生えとなり、媒介虫や本病の伝染源となるので、ほ場付近には放置しない。
・収穫残さは本病の伝染源や媒介虫の発生源となる。そのため、栽培終了後は施設内を蒸しこみ、地際を切断するなどして植物体を完全に枯死させる。また黄色粘着板を設置し、本虫が誘殺されないことを確認してから施設外へ持ち出す。
・多発ほ場においては、耐病性品種の利用を検討する。なお、耐病性品種でも感染し、ウイルス密度が高まると発病するため、タバココナジラミの防除を徹底すること。

●コナジラミ類

予報の根拠
・２月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は8.2%（平年8.5%）と平年並であった。
・１か月予報では、気温は平年並のため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策
・施設開口部に防虫ネット（目合い0.4mm以下）を設置し、侵入を抑制する。
・成虫の寄生や黄色粘着板の捕獲数に注意し、発生が確認された場合は薬剤防除を実施する。

【たまねぎ】

<生育の概況>

生育は平年に比べ遅れている。

●腐敗病

予報の根拠
・２月中旬の巡回調査では、平均発病株率0.2%（平年1.5%）と平年より少なかった。
・１か月予報では、気温は平年並、降水量はほぼ平年並のため、本病の発生も平年並に推移すると予想される。なお、例年３月は気温の上昇に伴い本病の発生が増加するため注意が必要である。

防除対策
・収穫時期を迎えているほ場では、できるだけ降雨の前に収穫し、降雨後は、葉茎が十分乾いた後に収穫する。
・発病株は感染源となるため、速やかに抜き取り、ほ場外に持ち出し適切に処分する。
・収穫後の植物残さは本病の伝染源となるため、１ヶ所にまとめ、ビニールで被覆し蒸し殺を死滅させるなどして適切に処分する。
・発生状況及び防除対策については、「技術情報第４号（たまねぎ 腐敗病）」も参照する。

●灰色腐敗病

予報の根拠
・２月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発生なし）。
・１か月予報では、気温は平年並、降水量はほぼ平年並のため、本病の発生を特には助長しない。また、本病は例年巡回調査では発生が確認されていない。

防除対策
・罹病株がある場合には、早期に取り除き、ほ場外に持ち出して処分することで来年度の伝染源にならないようにする。

●ネギアザミウマ

予報の根拠
・２月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は1.3%（平年32.0%）と平年より少なかった。
・１か月予報では、気温は平年並、降水量はほぼ平年並のため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策
・収穫期を迎えているほ場では、特に防除の必要はない。収穫まで期間を要するほ場では発生に注意し、密度が高まる前に薬剤防除を実施する。
・株元の葉と葉の隙間に多く生息しているので、その部分に薬剤がかかるように丁寧に散布する。また、周辺の収穫期を迎えているほ場に薬液が飛散しないように、風のない時に散布する。

【いちご】

<生育の概況>

生育は平年並～遅く推移している。

●灰色かび病

予報の根拠
・２月上中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平均発病株率0.6%）。
・１か月予報では、気温は平年並、降水量はほぼ平年並のため、本病の発生を特には助長しない。ただし、例年３月は気温の上昇とともに本病の発生が多くなるため注意する。

防除対策
・本病は気温が20℃前後、多湿条件下で多発生するため、施設内の多湿、植物体の結露は、本病の発生を著しく助長する。循環扇や暖房機の利用、換気、かん水量の調整等で湿度を管理し、耕種的な対策を行う。
・曇雨天が続く場合は、施設内が多湿となる薬液散布は避け、くん煙剤を利用した防除を行う。
・株が過繁茂となると発生が助長されるため、下葉や不要な果柄枝の除去を適切に行う。発病した果実や茎葉は有力な伝染源となるため速やかに除去し、ほ場外で処分する。
・発病前から定期的に予防散布を行う。薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

●うどんこ病

予報の根拠
・２月上中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平均発病株率0.8%）。
・１か月予報では、気温は平年並のため、本病の発生を特には助長しない。

防除対策
・ 胞子の発芽適温は20℃前後であり、施設内は本病の発生に好適な環境となるため、発生予防に努める。
・ 多発生すると防除が困難であるため初期発生に注意し、発病が確認されたら速やかに防除を行う。
・ 株が過繁茂となると発生が助長されるため、下葉除去を適切に行う。果実でも頻繁に発生するため、発病果の速やかな除去を徹底する。

●炭疽病

予報の根拠
・ ２月上中旬の巡回調査では、平均発病株率は1.0%（平年1.0%）と平年並だった。
・ １か月予報では、気温は平年並のため、本病の発生を特には助長しない。

防除対策
・ 発病株から周囲へと伝染するため、ほ場の見回りを徹底し、発病株や発病が疑われる株の早期発見に努める。
・ 発病株は培土も含めて抜き取り、ほ場外へ出す。放置残さは伝染源となるため、ビニール袋に入れて腐らせる等して適切に処理を行ってから処分する。
・ 本病原菌は水滴の飛散等によって伝染する。薬剤散布も伝染を助長する可能性があるため、散布前にほ場の見回りと発病株の抜き取りを徹底し、感受性低下の疑われる剤（MBC 殺菌剤（FRAC：１）、DMI 殺菌剤（FRAC：３）、QoI 殺菌剤 （FRAC：11））の散布は避ける。
・ 気温の上昇に伴い病徴が再び進展するため、本ほでの新たな発病に注意する。また、開花、着果により株に負担がかかると萎凋症状が進展する場合がある。
・ 発生状況及び防除対策については、「技術情報第５号（いちご 炭疽病）」も参照する。

●アザミウマ類

予報の根拠
・２月上中旬の巡回調査では、平均寄生株率は3.6%（平年6.0%）と平年より少なかった。
・１か月予報では、気温は平年並のため、発生の増加も平年並と予想される。なお、例年３月は気温の上昇とともに本虫の発生が多くなるため注意する。

防除対策
・本虫は花を好んで寄生する。花における発生状況をよく観察し、本虫の寄生が認められた場合は少発生のうちに防除する。また、必要のない花は摘み取る。
・施設内外の雑草や花き類は、本虫の発生源となるため除去する。
・天敵製剤を利用するほ場では、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択して防除する。
・発生状況及び防除対策については、「技術情報第６号（いちご アザミウマ類）」も参照する。

●ハダニ類

予報の根拠
・２月上中旬の巡回調査では、平均寄生株率は20.5%（平年13.3%）と平年より多かった。
・地域別の平均寄生株率は、東部地域で2.6%（平年7.6%）、中部地域で26.6%（平年22.8%）、中遠地域で32.2%（平年9.6%）と、特に中遠地域で発生が多かった。
・１か月予報では、気温は平年並のため、発生の増加も平年並と予想される。

防除対策
・寄生が認められた場合は、少発生のうちに防除する。
・ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、天敵や気門封鎖剤を利用する。なお、気門封鎖剤は卵への効果が低く残効性が期待できないため、５日間隔程度で連続散布する。
・天敵製剤を利用する場合は、ハダニ類及び天敵の発生状況をよく観察する。ハダニ類の発生が多い場合には、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択して防除する。

●アブラムシ類

予報の根拠
・２月上中旬の巡回調査では、平均寄生株率は2.3%（平年1.8%）と平年よりやや多かった。
・１か月予報では、気温は平年並のため、本虫の発生の増加も平年並と予想される。

防除対策
・ほ場をよく観察し、初期防除に努める。
・天敵を利用しているほ場では、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択して防除する。

【共通】

<その他病害虫>

●いもち病（葉いもち）、ばか苗病、もみ枯細菌病、苗立枯病、イネシンガレセンチュウ

防除対策
種子消毒（作業を省かず、以下の点に留意して行う。）
・自家採種の種もみは塩水選を必ず行う。
・「農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準」に掲載の種子消毒法の手順を守り実施する。
・厚まきは発病を助長するため、適正なは種量を守る。

育苗管理
・出芽期は30℃以上、緑化期は25℃以上の高温とならないよう温度管理に注意する。
・他県ではいもち病のQoI 剤耐性菌の発生が問題となっている（本県での発生は確認されていない）。耐性菌の発生リスクが高い薬剤を使用する場合は、連用を避けるなど適切に使用する。詳細は日本植物病理学会殺菌剤耐性菌研究会ホームページの「殺菌剤使用ガイドライン」（http://www.taisekikin.jp/guideli nes/）を参照。

●スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）

防除対策

・県内全域で分布が拡大している。昨年７～９月に水田内や水路で赤橙色の卵塊が見られた地域では、水田内で越冬している可能性がある。

・周辺水路内に泥が残っていると、その中でも越冬するので、水路から泥を上げて貝を物理的する。

・スクミリンゴガイには、人体に有害な寄生虫（広東住血線虫）が寄生している可能性があるので、貝に触る場合は必ずゴム手袋をはめる。

【小麦】

＜その他病害虫＞

●うどんこ病・赤さび病

・うどんこ病の第一次伝染源は前年の被害残さで越冬した病原菌であり、赤さび病の第一次伝染源は圃場に落下した穎粒で越夏した病原菌である。よって、前年多発したほ場では発生に注意する。

・昨年５月上旬の巡回調査では、うどんこ病の平均発病株率は1.0%（平年 20.2%）と平年より少なかった。また、赤さび病の平均発病株率も 2.6%（平年 15.1%）と平年より少なかった。

・本県の奨励品種である「きぬあかり」はうどんこ病にやや弱く、赤さび病も「イワイノダイチ」「農林61号」より発生しやすい。

・窒素肥料の過多を避ける。

【かんきつ全般】

＜その他の病害虫＞

●かいよう病

・昨年は温州みかん、中晩柑類ともに本病の発生が多かった（<u>「注意報第４号（温州みかん・中晩柑類　かいよう病）」</u>）。また台風の襲来もあり、潜伏越冬病斑が多いと予想されるため、３月中旬（発芽前）の防除を徹底する。

・罹病葉のついた夏秋枝は重要な伝染源となるため、支障がない限り切除し、園内からの除去を徹底する。

・風ずれなどの傷口から病原菌が容易に侵入するため、防風垣、防風網の整備を行い防風対策に努める。

３　季節予報

●１か月予報　（東海地方　令和７年２月２０日　名古屋地方気象台発表）

【予報期間】　２月２４日から３月２１日

【予想される向こう１か月の天候】

特に注意を要する事項		期間の前半は気温の変動が大きいでしょう。
向こう１か月	天候	平年と同様に晴れの日が多いでしょう。
	気温	平均気温は、平年並の確率５０％です。
１週目	気温	１週目は、低い確率７０％です。
２週目	気温	２週目は、高い確率５０％です。

【確　率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多％
１か月	気温	３０	５０	２０
１か月	降水量	４０	３０	３０
１か月	日照時間	３０	３０	４０
１週目	気温	７０	２０	１０
２週目	気温	２０	３０	５０
３～４週目	気温	３０	４０	３０

【予報の対象期間】

１か月　：　２月２２日（土）～　３月２１日（金）
１週目　：　２月２２日（土）～　２月２８日（金）
２週目　：　３月　１日（土）～　３月　７日（金）
３～４週目　：　３月　８日（土）～　３月２１日（金）

※ 利用上の注意

・気温・降水量は「低い（少ない）」「平年並」「高い（多い）」の３つの階級で予報します。階級の幅は、1991～2020 年の 30 年間における各階級の出現率が等分（それぞれ 33%）となるように決めてあります。（気候的出現率と呼びます）。

・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い（少ない）場合は「平年に比べて多い（少ない）」、また平年の日数と同程度に多い（少ない）場合には「平年と同様に多い（少ない）」と表現します。なお、単に多い（少ない）と表現した場合には対象期間の２分の１より多い（少ない）ことを意味します。

お問い合わせ先は

静岡県病害虫防除所　〒438-0803　磐田市富丘678-1
TEL 0538-36-1543　FAX 0538-33-0780
ＵＲＬ　https://www.pref.shizuoka.jp/sangyo/shigoto/norinjimusho/1058658/boujo/index.html

病害虫発生予察情報（4月予報）

令和７年３月25日
静岡県病害虫防除所長

１　予報概況

作物名	病害虫名	予報（４月の県平均平年値）	予報の根拠
温州みかん	そうか病	発生量：やや多	３月上中旬発生量：並　（±） 気象予報：気　温：並か高い　（＋） 降水量：ほぼ平年並　（±）
	ミカンハダニ	発生量：並 （寄生葉率7.0%） ただし、東部地域：多	３月上中旬発生量：やや少　（－） ただし、東部地域：やや多（＋） 気象予報：気　温：並か高い　（＋） 降水量：ほぼ平年並　（±）
かんきつ	かいよう病	発生量（中晩柑）：多 （中晩柑発病度（葉）0.79） 発生量（温州みかん）：多 （温州みかん発病度（葉）0.28）	３月上中旬発生量 （中晩柑）：多　（＋） （温州みかん）：多　（＋） 気象予報：気　温：並か高い　（＋） 降水量：ほぼ平年並　（±）
果樹全般	果樹カメムシ類	発生量：多	昨年予察灯誘殺数：多　（＋） ﾌｪﾛﾓﾝﾄﾗｯﾌﾟ誘殺：多　（＋） 越　冬　量：多　（＋） 気象予報：気　温：並か高い　（＋）
茶	カンザワハダニ	発生量：並 （摘採面寄生葉率2.6%）	３月上中旬発生量：並　（±） 気象予報：気　温：並か高い　（±） 降水量：ほぼ平年並　（±）
	チャハマキ	発生量：多 （幼虫数0.07頭/1.25㎡）	３月上中旬発生量：多　（＋） 気象予報：気　温：並か高い　（＋） 降水量：ほぼ平年並　（±）
	チャノコカクモンハマキ	発生量：多 （幼虫数0.1頭/1.25㎡）	３月上中旬発生量：多　（＋） 気象予報：気　温：並か高い　（＋） 降水量：ほぼ平年並　（±）
トマト	灰色かび病	発生量：やや少	３月中旬発生量：やや少　（－） 気象予報：気　温：並か高い　（＋） 降水量：ほぼ平年並　（±）
	葉かび病・すすかび病	発生量：やや少	３月中旬発生量：やや少　（－） 気象予報：気　温：並か高い　（＋） 降水量：ほぼ平年並　（±）
	黄化葉巻病	発生量：やや少	３月中旬発生量：少　（－） コナジラミ類発生量：並　（±） 気象予報：気　温：並か高い　（＋）
	コナジラミ類	発生量：やや多	３月中旬発生量：並　（±） 気象予報：気　温：並か高い　（＋）

作物名	病害虫名	予報（４月の県平均平年値）	予報の根拠
いちご	灰色かび病	発生量：やや少	３月中旬発生量：少　（－） 気象予報：気　温：並か高い　（＋） 降水量：ほぼ平年並　（±）
	うどんこ病	発生量：やや多	３月中旬発生量：並　（±） 気象予報：気　温：並か高い　（＋）
	炭疽病	発生量：多	３月中旬発生量：やや多　（＋） 気象予報：気　温：並か高い　（＋）
	アザミウマ類	発生量：やや少 ただし、中遠地域：やや多	３月中旬発生量：少　（－） ただし、中遠地域：並（±） 気象予報：気　温：並か高い　（＋）
	ハダニ類	発生量：多	３月中旬発生量：多　（＋） 気象予報：気　温：並か高い　（＋）
	アブラムシ類	発生量：やや多 ただし、中部地域：多	３月中旬発生量：並　（±） ただし、中部地域：やや多（＋） 気象予報：気　温：並か高い　（＋）

表の見方について

- 予報の発生量は平年（静岡県の過去10年間）との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の５段階で示しています。
- 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年（静岡県の過去10年間）との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の５段階で示しています。
- 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況（調査時期と発生量）、気象庁の1ヶ月予報（気温と降水量）を記入しています。その状況が多発要因の場合は（＋）、少発要因の場合は（－）を示し、＋－を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。
-

農薬情報はこちらで検索！
静岡県農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準
https://www.s-boujo.jp/

静岡県病害虫防除所HPが新しくなりました。
静岡県病害虫防除所 HP
https://www.pref.shizuoka.jp/sangyoshigoto/norinjimusho/1058658/boujo/index.html

２　予報の根拠と防除対策

【温州みかん】

●そうか病

予報の根拠

・３月上中旬の巡回調査では、平均発病度は0.04（平年0.06）と平年並だった。
・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年並か高いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

・被害のある夏秋梢は伝染源となるため除去する。また、前年に多発したほ場は伝染源を翌年に持ち越しやすいので発生に注意する。
・発芽期以降、越冬病斑から新葉へ降雨のたびに伝染する。新葉の病斑から効果に二次伝染するため、４月（展葉期）、５月下旬（落弁直後）、６月下旬（幼果期）に薬剤防除を行う。
・苗、若木での発生が多い病害であるため、新植や改植をしたほ場では発生に注意する。

●ミカンハダニ

予報の根拠

・３月上中旬の巡回調査では、平均寄生葉率は3.6%（平年4.1%）と平年よりやや少なかった。地域別では、東部地域で1.8%（平年1.4%）、中部地域で4.0%（平年5.9%）、中遠地域で4.9%（平年5.1%）と東部地域での発生がやや多かった。
・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年並か高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・着花前のこの時期は果実への実害は生じない。ただし、葉に多発すると旧葉の落下を助長することもあるため、注意する。
・マシン油乳剤を散布する場合、散布直後の降雨で防除効果が低下することから、晴天が数日続くと見込まれる際に防除を実施する。

【かんきつ】

●かいよう病

予報の根拠

・３月上中旬の巡回調査では、中晩柑類の葉での平均発病度は1.36（平年0.76）と平年より多かった。温州みかんの葉での平均発病度は0.30（平年0.09）と平年より多かった。
・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年並か高いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

・罹病葉のついた夏秋梢は、重要な伝染源となるので早急に除去する。
・中晩柑類では、発芽前、５月上旬及び下旬、６月中下旬（梅雨期）に薬剤防除を行う。温州みかんでも、昨年または現時点で本病の発生が見られたほ場では、中晩柑類に準じた防除を行う。ただし、薬害が出るため発芽後～新梢伸長期は銅剤の散布を避けた方がよい。
・風ずれなどの傷口から病原菌が容易に侵入するため、防風垣、防風網の整備を行い防風対策に努める。

【果樹全般】

●果樹カメムシ類（チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ）

予報の根拠

・令和６年８～10月の予察灯（県内４か所）における果樹カメムシ類（以下、カメムシ類）の合計誘殺数の平均は、2834.3頭/か所（平年2659頭、平年比10.7倍）と平年より多かった。
・令和６年８～10月のフェロモントラップ（県内６か所）におけるカメムシ類の合計誘殺数の平均は、2040.9頭/か所（平年489頭、平年比4.2倍）と平年より多かった。
・本年２～３月の越冬量調査（県内20地点）において、チャバネアオカメムシ越冬量／落葉１㎡は、県平均2.9頭（平年1.0頭）と平年より多かった。また、各地域における同種の越冬量／落葉１㎡は、東部地域1.6頭（平年1.3頭）、中部地域4.2頭（平年0.9頭）、西部地域2.9頭（平年1.0頭）と、特に中部及び西部地域で平年より多かった。
・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年並か高いため、本虫の発生をやや助長する。
・カメムシ類の主な餌となるヒノキ球果の着果量は、隔年で豊凶を繰り返すことが多い。昨年は着果量が平年より多かったことから、本年は着果量が平年より少ないと予想される。カメムシ類の餌が不足することにより、本虫が新たな餌を求めて４～８月にかけて果樹園に大量飛来し、花・果実等を加害する恐れがある。

防除対策

・昨年、西日本等の果樹産地では、カメムシ類の越冬成虫が果樹園に大量飛来し、本虫の加害による落花・落果・新梢枯死等の被害が生じた。本県においても越冬成虫の飛来に細心の注意を払う。なお、静岡県病害虫防除所ホームページ「害虫誘殺グラフ」では、本虫に関する各種情報（予察灯及びフェロモントラップにおける発生状況、ヒノキ球果の着果量や球果における吸汁痕数、果樹園への秋季以降の飛来予測日等）を随時提供しているので参照する。
・静岡県病害虫防除所による今後の「病害虫発生予察情報」に注意するとともに、地域の予察灯やフェロモントラップにおけるカメムシ類の発生状況を参考にし、果樹園への本虫飛来前の予防的な薬剤散布を心掛ける。また、ほ場で少数でも本虫の発生を確認したら、本虫が集合フェロモンを放出し大量飛来する前に、直ちに薬剤防除を行う。また、本虫の移動範囲は広いため、地域での一斉防除が効果的である。なお、ヒノキ・スギ林の隣接地域（特に中山間地）や暴風雨後の園地では、急激に発生が増加する場合があるので注意する。
・薬剤防除については、静岡県病害虫防除所による「静岡県農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準」を参照する。なお、薬剤の選択に際しては収穫前日数と総使用回数に注意する。

【茶】

＜生育の概況＞

茶業研究センターの報告では、品種「やぶきた」で、新芽の生育は３月15日時点で平年より２日早く推移している。

●カンザワハダニ

予報の根拠

・３月上中旬の巡回調査では、樹冠面（摘採面）での寄生葉率0.6%（平年1.1%）、裾部での寄生葉率1.4%（平年1.5%）と平年並だった。

・防除員からは、平年並の回答が多かったが、一部のほ場で発生の多い報告がある。

・１か月予報では、気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並のため、本種の発生をあまり助長しない。

防除対策

・樹冠面の葉に寄生が見られる茶園では早期に防除を行う。その際、葉裏に薬液が届くように散布する。

・凍霜害等を受けた茶園では、被害を受けなかった新芽にハダニが集まり集中加害することがあるので、防霜対策を万全にする。

・新芽がハダニの被害を受けた場合は、薬剤の摘採前日数に注意して直ちに防除を行う。

●チャハマキ・チャノコカクモンハマキ

予報の根拠

・３月上中旬の巡回調査では、チャハマキの越冬幼虫数は0.9頭／1.25m²（平年0.3頭／1.25m²）、チャノコカクモンハマキの越冬幼虫数は0.7頭／1.25m²（平年0.3頭／1.25m²）と両種とも平年より多かった。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年並か高いため、両種の発生をやや助長する。

防除対策

・昨年は両種ともに１世代発生が多かったことから、秋の防除を実施しなかった茶園では越冬幼虫の密度が高い可能性がある。越冬幼虫による被害が確認された茶園では、地域の防除規制に注意して、摘採後速やかに薬剤防除を実施する。

＜その他病害虫＞

●褐色円星病（炭疽病）

防除対策

・３月上中旬の巡回調査では、平均発病葉率は9.1%（平年20.8%）と平年より少なかった。

・本病は、多発すると一番茶萌芽期から生育期に下葉が落葉し、品質・収量への被害が大きくなる。薬剤による防除適期は夏期以降となるが、被害は一番茶生育期に顕著となるため、被害が大きかった茶園では、この時期に発生状況を確認しておき、夏～秋期に防除を実施する。

●マダラカサハラハムシ

防除対策

・近年、葉を食害される被害が発生した茶園が増加している。これらの茶園では一番茶芽に越冬成虫による被害が発生するおそれがあるため、一番茶生育期に薬剤防除を行う。なお、各地区の防除規制や摘採前日数に注意する。

防除対策

・本病はタバココナジラミによって媒介されるため、タバココナジラミの防除を徹底する。防除対策については、コナジラミ類の項を参照すること。

・発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取り、ハウス外の土中に埋める か、ビニール袋に入れて腐らせる等して適切に処分する。

・脇芽や摘果などの残さは放置すると野良生えとなり、媒介虫や本病の伝染源となるので、ほ場付近には放置しない。

・収穫残さは本病の伝染源や媒介虫の発生源となる。そのため、栽培終了後は施設内を蒸しこみ、地際を切断するなどして植物体を完全に枯死させる。また黄色粘着板を設置し、本虫が誘殺されないことを確認してから施設外へ持ち出す。

・多発ほ場においては、耐病性品種の利用を検討する。なお、耐病性品種でも感染し、ウイルス密度が高まると発病するため、タバココナジラミの防除を徹底すること。

●コナジラミ類

予報の根拠

・コナジラミ類の平均寄生株率は10.3%（平年9.8%）と平年並だった。

・１か月予報では、気温は平年並か高いため、本虫の増殖を助長する。

防除対策

・施設開口部に防虫ネット（目合い0.4mm以下）を設置し、侵入を抑制する。

・今後、気温が上昇しタバココナジラミの発生に適した条件となる。成虫の新芽や葉裏への寄生や黄色粘着板の捕獲数に注意し、発生が増加する場合は薬剤防除を実施する。

【いちご】

＜生育の概況＞

生育は平年並から遅い状況。

●炭疽病

予報の根拠

・３月中旬の巡回調査では、平均発病株率は0.1%(平年2.2%)と平年より少なかった。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年並か高いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

・本病は気温が20℃前後、多湿条件下で多発生するため、施設内の多湿、植物体の結露は、本病の発生を著しく助長する。循環扇や暖房機の利用、換気、かん水量の調整等で湿度を管理し、耕種的な対策を行う。

・曇雨天が続く場合は、施設内が多湿となる薬液散布は避け、くん煙剤を利用した防除を行う。

・株が過繁茂となると発生が助長されるため、下葉や不要な果梗枝の除去を適切に行う。発病した果実や葉菜は有力な伝染源となるため速やかに除去し、ほ場外で処分する。

・発病前から定期的に予防散布を行う。薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

【トマト】

＜生育の概況＞

生育は平年並。

●灰色かび病

予報の根拠

・３月中旬の巡回調査では、本病の平均発病株率7.3%（平年10.1%）と平年よりやや少なかった。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年並か高いため、発生をやや助長する（本病の生育適温は18～23℃程度であり、特に多湿条件下で発生が多くなる）。

防除対策

・株の繁茂やハウス内湿度の上昇により発生が増加するので、不要な下葉を除去するとともに、日中の換気を早めに行い、施設内の除湿に努める。

・発病した果実や葉菜は伝染源となるため、速やかに取り除き、ほ場外に持ち出して処分する。

・予防に重点をおいた薬剤散布を行う。ただし耐性菌の発生を防ぐため、作用機構の異なる剤をローテーションで使用する。

●葉かび病・すすかび病

予報の根拠

・３月中旬の巡回調査では、本病の平均発病株率4.7%（平年5.8%）と平年よりやや少なかった。

・１か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年並か高いため、発生をやや助長する（本病の生育適温は、葉かび病20～25℃、すすかび病27℃程度と比較的高温を好み、多湿条件下で発生が多くなる）。

防除対策

・多湿にならないように換気につとめ、過度のかん水を避ける。

・発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に持ち出して処分する。

・本病は潜伏期間が２週間程度と長く、多発してからでは薬剤の効果が劣るため、発病が認められたら直ちに薬剤を散布する。ただし耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。

・葉かび病については、抵抗性品種（*Cf-4*）を侵すレース2.9の発生が県内で確認されている。本県では12月以降、発生が増加する傾向があるため、抵抗性品種を栽培しているほ場でも薬剤の予防散布を行い、発生に注意する。

●黄化葉巻病

予報の根拠

・３月中旬の巡回調査では、黄化葉巻病の平均発病株率は0.1%（平年1.7%）と平年より少なかった。

・コナジラミ類の平均寄生株率は10.3%（平年9.8%）と平年並だった。

・１か月予報では、気温は平年並か高いため、媒介虫であるタバココナジラミの増殖を助長する。このため、本病の発生も助長される。

●うどんこ病

予報の根拠

・３月中旬の巡回調査では、平均発病株率は1.3%(平年0.8%)であり、多発していた一部ほ場を除くと発生は平年並だった。

・１か月予報では、気温は平年並か高いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

・胞子の発芽適温は20℃前後であり、施設内は本病の発生に好適な環境となるため、発生予防に努める。

・株が過繁茂となると発生が助長されるため、下葉除去を適切に行う。果実でも蔫菓に発生するため、発病果の速やかな除去を徹底する。

・多発生すると防除が困難であるため初期発生に注意し、発病が確認されたら速やかに防除を行う。薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

●炭疽病

予報の根拠

・３月中旬の巡回調査では、平均発病株率は1.4%（平年1.2%）と平年よりやや多かった。ただし、例年に比べ欠株や補植が目立った。

・地域別では、東部地域で発生は認められず（平年1.6%）、中部地域で3.2%（平年0.8%）、中遠地域で1.0%（平年1.2%）と中部地域での発生が多かった。

・１か月予報では、気温は平年並か高いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

・気温の上昇に伴い病勢が再び進展するため、本ぼでの新たな発病に注意する。また、開花、着果により株に負担がかかると萎凋症状が進展する場合がある。

・発病株から周囲へと伝染するため、ほ場の見回りを徹底し、発病株や発病が疑われる株の早期発見に努める。

・発病株は培土も含めて抜き取り、ほ場外へ出す。放置残さは伝染源となるため、ビニール袋に入れて腐らせる等して適切に処理を行ってから処分する。

・本病原菌は本満の飛散等によって伝染する。薬剤散布も伝染を助長する可能性があるため、散布前にほ場の見回りと発病株の抜き取りを徹底し、感受性低下の疑われる剤（MBC 殺菌剤（FRAC：１）、DMI 殺菌剤（FRAC：３）、QoI 殺菌剤 （FRAC:11））の散布は避ける。

・本病発生ほ場の栽培株は潜在感染している恐れがあるため、健全に見えても親株に使用しない。

・本病発生ほ場では、栽培終了後の土壌や資材の消毒を徹底する。

・発生状況及び防除対策については、「技術情報第５号（いちご 炭疽病）」も参照する。

●アザミウマ類

予報の根拠

・３月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は6.7%（平年11.8%）と平年より少なかった。地域別では、東部地域で2.0%（平年10.0%）、中部地域で9.4%（平年17.0%）、中遠地域で8.6%（平年8.6%）と中遠地域での発生は平年並だった。

・１か月予報では、気温は平年並か高いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

・４月以降、気温が高くなると本虫の飛び込みが増える。施設開口部には防虫ネット（目合１mm 以下）を被覆し、施設外からの本虫の侵入を防ぐ。ただし、被覆により施設内の温度・湿度が高まるため、換気に注意する。

・花における発生状況をよく観察し、害虫が認められた場合は少発生のうちに防除する。

・天敵を利用しているほ場で薬剤散布する場合は、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択する。

・花はアザミウマ類の増殖源となるため、必要のない花は摘み取る。また、施設内外の雑草や花き類についても本虫の増殖源となるため、除去する。

・栽培終了後は、施設を密閉するとともに蒸し込み処理を 10 日以上行い、残存虫を死滅させる。

・発生状況及び防除対策については、「技術情報第６号（いちご アザミウマ類）」も参照する。

●ハダニ類

予報の根拠

・３月中旬の巡回調査では、平均害生株率は 22.5%（平年 12.3%）と平年より多かった。地域別では、東部地域で 4.4%（平年 5.4%）、中部地域で 31.4%（平年 23.9%）、中遠地域で 31.6%（平年 7.7%）と中部及び中遠地域での発生が多かった。

・１か月予報では、気温は平年並か高いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

・ハダニ類の寄生が認められた場合は、少発生のうちに防除する。

・ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいため、気門封鎖剤や天敵を積極的に活用する。なお、気門封鎖剤は殺卵効果が低く、残効性も期待できないため、５日間隔程度で連続散布する。

・天敵を利用している場合は、ハダニ類と天敵の発生状況をよく観察し、必要に応じて天敵の追加放飼または薬剤散布を行う。薬剤散布する場合は、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択する。

●アブラムシ類

予報の根拠

・３月中旬の巡回調査では、平均害生株率は 2.2%（平年 2.3%）と平年並であった。地域別では、東部地域で 0.2%（平年 1.3%）、中部地域で 5.4%（平年 4.3%）、中遠地域で 1.0%（平年 1.4%）と中部地域での発生がやや多かった。

・１か月予報では、気温は平年並か高いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

・発生に注意し、初期防除に努める。

・アブラバチを利用している場合は、寄生蜂（マミー）の発生状況をよく観察し、防除の成否を確認する。薬剤散布する場合は、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択する。

【小麦】

<その他病害虫>

●赤かび病

防除対策

・４月に発生が少なくても、５月に多発することがあるので予防散布に努める。特に出穂期から乳熟期にかけて、気温が高く降雨が続くような場合は注意する。

・防除適期は開花期前後となる。一回目の薬剤散布を穂揃期から５日目までに行い、さらにその５～７日後に二回目の薬剤散布を実施する。

●うどんこ病・赤さび病

・昨年５月上旬の巡回調査では、うどんこ病の平均発病株率は 1.0%（平年 20.2%）と平年より少なかった。また、赤さび病の平均発病株率も 2.6%（平年 15.1%）と平年より少なかった。

・本県の奨励品種である「きぬあかり」はうどんこ病にやや弱く「イワイノダイチ」、「農林 61 号」より赤さび病も発生しやすい。

・うどんこ病の第一次伝染源は前年の被害残渣で越冬した病原菌であり、赤さび病の第一次伝染源は圃場に落下した罹病で越夏した病原菌である。よって、前年多発したほ場では発生に注意する。

・止葉の一枚下葉の展開期以降～止葉抽出期に薬剤の予防散布を行う。

・窒素肥料の過多を避ける。

【麦】

<その他病害虫>

●いもち病（葉いもち）、ばか苗病、もみ枯細菌病、苗立枯病、イネシンガレセンチュウ

防除対策

種子消毒（作業を省かず、以下の点に留意して行う。）

・自家採種の種もみは塩水選を必ず行う。

・「農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準」に掲載の種子消毒法の手順を守り実施する。

・厚まきは発病を助長するため、適正な種量を守る。

育苗管理

・出芽期は30℃以上、緑化期は25℃以上の高温とならないよう温度管理に注意する。

・県内ではいもち病の QoI 剤耐性菌の発生が問題となっている（本県での発生は確認されていない）。耐性菌の発生リスクが高い薬剤を使用する場合は、連用を避けるなど適切に使用する。詳細は日本植物病理学会殺菌剤耐性菌研究会ホームページの「殺菌剤使用ガイドライン」

（http://www.taiseikin.jp/guidelines/）を参照。

●斑葉枯病（ヒメトビウンカ）

防除対策

・常発地では媒介虫となるヒメトビウンカの箱施用剤による防除を徹底する。

●トビイロウンカ

防除対策

・本虫の日本での発生量は年によって大きく異なり、海外からの飛来時期、量、回数等に影響される。このため、本虫に効果の高い薬剤を含む育苗箱施用剤による予防防除を徹底する。なお、本虫はイミダクロプリド（アドマイヤー等）に対する感受性低下が報告されているため、本剤が含まれている育苗箱施用剤はトビイロウンカ対策に用いないよう注意する。

●斑点米カメムシ類（アカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメ等）

防除対策

・主要種のアカスジカスミカメは雑草に産み付けられた卵で越冬し、春に孵化する。孵化直後は、水田周辺のイネ科雑草（スズメノテッポウ、セトガヤ、早生型チガヤ）が寄主植物となることから、４月中に除草すると効果的である。ただし、成虫の行動範囲は最大で半径 300m 程度と広く、個々の水田周辺を除草するだけでは十分な防除効果が得られない場合もあるため、地域ぐるみで除草することが重要である。

●スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）

防除対策

・県内全域で分布が拡大している。昨年の７～９月に水田内や水路で赤橙色の卵塊が見られた地域では、水田内で越冬している可能性がある。

・周辺水路内に泥が残っていると、その中でも越冬するので、水路から泥を上げて貝を破砕する。なお、スクミリンゴガイには寄生虫（広東住血線虫）が寄生している可能性があるので、貝に触る場合は必ずゴム手袋をはめること。

３　季節予報

●１か月予報　（東海地方　令和６年３月２０日　名古屋地方気象台発表）

【予報期間】　３月２２日から４月２１日

【予想される向こう１か月の天候】

特に注意を要する事項		期間のはじめは、気温がかなり高くなる見込みです。
向こう１か月	天候	天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。
	気温	平均気温は、平年並または高い確率ともに４０％です。
１週目	気温	１週目は、高い確率８０％です。

【確　率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多％
１か月	気温	２０	４０	４０
１か月	降水量	３０	４０	３０
１か月	日照時間	３０	４０	３０
１週目	気温	１０	１０	８０
２週目	気温	４０	３０	３０
３～４週目	気温	３０	３０	４０

【予報の対象期間】

１か月　：　３月２２日（土）～　４月２１日（月）

１週目　：　３月２２日（土）～　３月２８日（金）

２週目　：　３月２９日（土）～　４月　４日（金）

３～４週目　：　４月　５日（土）～　４月１８日（金）

※ 利用上の注意

・気温・降水量は「低い（少ない）」「平年並」「高い（多い）」の３つの階級で予報します。階級の幅は、1991～2020 年の 30 年間における各階級の出現率が等分（それぞれ 33%）となるように決めております。（気候的出現率と呼びます）。

・晴れや雪などの天気日数は、平年の日数とも多い（少ない）場合は「平年に比べて多い（少ない）」、また平年の日数と同程度に多い（少ない）場合には「平年と同様に多い（少ない）」と表現します。なお、単に多い（少ない）と表現した場合には対象期間の２分の１より多い（少ない）ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病害虫防除所　〒438-0803　磐田市富丘678-1
TEL 0538-36-1543　FAX 0538-33-0780
ＵＲＬ　https://www.pref.shizuoka.jp/sangyoshigoto/norinjimusho/1050888/boujo/index.html